

シュウよめ

～シュウジのおよめさん～

Attention !

ADULT ONLY

R-18

シュウマチュ短編集

Shuji and Machu unofficialfanbook

ゲンキなサル

もくじ

・ シュウよめ〜シュウジのおよめさん〜（書き下ろし）	：	3
・ 大雨（キラマヴワンドロライより再録）	：	192
・ おそろい（キラマヴワンドロライより再録）	：	206
・ おでかけ（キラマヴワンドロライより再録）	：	220
・ やきもち（キラマヴワンドロライより再録）	：	233

シ
ユ
ウ
よ
め

く
シ
ユ
ウ
ジ
の
お
よ
め
さ
ん
く

マチユビームその① 序章

「やあマチユ、元気にしてた？」

シュウジはあっさりと帰ってきた。予告もなくいきなり帰ってきたからビックリした。

——幸せだった。

シュウジとの再開。此処（ここ）に二時間尺ほどの感動のドラマがあれば、テレビの前のみなさまにも納得して貰えると思うのだけど。そんなドラマは現実には存在しない。想い人は突然に帰ってくるものなのだ。わたしの経験則ではそうなる。

「うん、元気にしてたよ、わたしはいつだって元気だよ」

答えた。眼の前にいるシュウジへ恍惚に惚れながら答えた。あの日、イズマコロニーの高架下。

キラキラという名のグラフィティが見守る中。出会ってからずっと惚れているのだ。キラキラだ。
「ボクは元気さ、あの時。マチュが口づけてくれた。あの瞬間から刻（とき）が止まっているよ」

シュウジは答える。あの黒く、何もかも吸い込んでしまいそうな瞳はもう姿を隠している。澄んだ赫い瞳がわたしを見つけてくれている。

「ボクはあの瞬間のままさ、マチュ達の世界はちょっと時間が経ったようだね」とシュウジ
「うん、『ちょっと』、ちょっとだけね…わたし18歳になったんだよ！」

「お誕生日を迎えたんだね、おめでどうマチュ」

その時、終末装置と呼ばれていた彼は、剥き出しの肉体で赤い髪を揺らす彼女の躰（からだ）を抱きしめていた。そこに終末装置らしい恐ろしさはなく、ただ等身大の17歳男子青年の姿がそこにあった。うれしかった。

「ありがとうシュウジ、わたしたい？ちょっと年上になっちゃったかな？」

「そんな事ないよ、ボクはマチュと同じ世界で生きる事に決めたんだ、キミとボクは同じ刻（とき）を刻んでいる。同じ年さ、もうこの時間軸から離れるつもりはないよ。」

「ダメダメ、別の世界なんて絶対いっちゃダメ！」怒るわたし。

「もちろんさ、『愛』は不変。不変なんだ。どんなに離れていても、別の宇宙にいても、別の世界にいても、『愛』だけは不変なんだ。ボクはその愛を知った。マチュ、きみのおかげでね」

「『愛』って、そんな立派なものじゃないよ」

「いや立派だよ」シュウジが耳元で呟く。わたしより少し、いやかなり大きい肩でマチュを抱く、すこし背を丸めて、わたしの臍を抱き寄せて。耳元で囁いてくれる。うれしい。

「マチュの愛でボクは目覚めたんだ。『愛』は生命が生命たる所以さ、ありがとうマチュ。この世界にボクを見つけてくれて。もう彷徨う必要がない、マチュがいるからね。」

「そうだよ、これからはずっとわたしと一緒にいようねシュウジ」

涙が溢れてきた。悲しくないのに、嬉しいのに。涙が溢れてくるんだ。なんだろう、感情が混じり合ってどう表現したらいいのかわからなくなってるのかな？感情の波が押し寄せて。涙として表現されている。こういう時、こういう感情をどう頭（あたま）（あらわ）せばいいのかが。もうちょっと

と学校で勉強しておけばよかった。国語なんて適当に済ませちゃったから言葉が思いつかないやわたしは困っていた。けど、涙だけはちゃんと流れていた。興奮で鳥肌が立っている。

「マチュ、泣かないで」

シュウジが身をギュと抱き寄せる。男の子らしい強い力を感じた。「もう離さない」とでもいったげな力だった。離れていったのはシュウジのくせに！

「うん、ゴメンねシュウジ。けど、うれしくて」

「わかってるよ、マチュの気持ちはボクに伝わっている。ほら——」

視界は光に満ちている。翠色の海にお日様の光が広がるような空間に満ちていく。

キラキラだッ！

シュウジとわたしだけのキラキラだッ！

「ぜくのうあ」とかそういうむつかしい言葉は知らない。シュウジとわたしだけの世界。

キラキラが広がっていた。何時ぶりだろうなあキラキラ……。おぼえてないや。

「マチュとこうして同じ世界が見える。この世界が恋しかったんだ。もう手放さないよマチュ」

「うん、そうして。手放しちゃ絶対ダメだよシュウジ。ずっといっしょだよシュウジ」

「そうだね、ずっと一緒にいようねマチュ」

「わたし、シュウジのおよめさんになってもいい？」

ナニ言ってるわたし！？およめさんってナニよ。もう脳みそで言葉を選んていない。

心で、肉体で、そしてキラキラで言葉を紡いでいる。キラキラが『およめさん』という単語をひねり出してしまったのだ。しょうがない。

「うん、番（つがい）になろう。僕達は出会ってしまったのだ。これから一生、番だよ」

少年らしいあどけなさが残る17歳下らの求愛の言葉がそれだった。

『番（つがい）』——好き。番っていう響きがもうすき。

「僕はもう番だよ、一生離さない。この世界に出会わせてくれたララアに感謝しないとね。あ

りがとうララア」

「そうだね、ありがとうララアさん！」

ララアおねえさまに一瞥の謝礼を述べた後、すぐさま唇を重ねた。

「好きだよマチュ」

「シュウジだいすき、ぜったいはなさない！」

小鳥の囀りのようなささやかな口づけだったが、確かなものであった。

ここに、「シュウジのおよめさん」が誕生する。

かつて大人達が持て囃した「ニュータイプ」の物語は、この少年少女の再開によって終幕する。これから始まるのは、ごく普通の少年少女による夫婦善哉めいた物語。

——小さな恋のメロディである。

60億年ぶりのアダムとイブが此処に再会する。

マチュビームその②

前回のあらすじ・シュウジと再開しました。あつという間の出来事でした。

――太陽系第三惑星地球。旧仏領ギアナ。某諸島。某島。

先の大戦で連邦から「租借」したジオン公国の領土である。「租借」と銘打っているが、返還期限は100年後を予定。ほぼジオン領土といって差し控えない土地である。

その旧仏領ギアナに豆粒の様に点在する諸島、珊瑚の砂でできた小さい島に彼らは棲んでいた。新たなニュータイプと持て囃された二人の少女はそこに棲んでいた。旧世紀よりフランス軍の宇宙港として栄えたその空は、毎朝のように打ち上げられる宇宙船のロケット雲といつまでも青い空が支配していた。時折スコールが降る。

マチュとニヤアン。二人の島であった。

そこに、たどり着いた少年が一人。「帰ってきた」と表現する方が正しかった。

宇宙世紀0086年初春。シュウジとマチュとニャアン。三人の友情が「再確認」された。

「一年、経ったんだ」

少女二人だけが住む南の島の別荘。別宇宙から帰還したシュウジ少年はシゲシゲと確認する。

「まあ半年とちょっと、かな？」

「マチュは変わらないね」と少年はマチュの小さい臍を抱きしめ、そして頭を撫でる。

「あんまり大きくなってないかな、ちょっと太ったかも」

シュウジ、マチュを抱き上げたついでに、臍（からだ）を持ちあげる。男子故の筋力なのか、40kg台後半はあるであろう赤き肉体をそのまま持ち上げてしまった（マチュの体重は不明）

「太ってないよ、マチュは軽いね。羽根でも生えているみたいだ」

まるで乙女小説の口説き文句めいた台詞がスイッと出てきた。いや台詞じゃない、素のシュウジから紡ぎ出された言葉であった。

「／＼」マチュは顔を赤らめるばかりだった。抱き上げられる感触に臍は酔っていた。

「もっとちゃんと食べなきゃダメだよマチュ」こういう無神経な発言も彼らしい。

「うるさいハラヘリムシ！」マチュ一喝。

「けど、ここは地球。地球なんでしょマチュ」とシュウジ。

「そうだよ、ここは地球。詳しい場所は知らないけどヒゲマンが用意してくれた南の島」

「シャリア・ブルか、感謝しないかね。シャアは元気かい？」

「うん、ララアさんがたまに「Z」してくれる」

旧世紀。極東アジアで流行したSNS「Z」は未だに現役であった。プラットフォームの優秀さ、容量の軽さなどを含め、宇宙世紀0080年代でも現役で使われている。シーラカンスめいた枯れた技術であった。

「そうか、彼とララアが元気ならボクはそれでいいよ。ボクはララアの幸せの為に生まれてきたんだ。そして殺した。もうそんな悲しい事はしたくないよ」

「シュウジ、もういいんだよ。ララアさん幸せだし。余計なちょっかい出す必要はないんだよ」
抱き寄せられた軀でシュウジを撫でる。まんざらでもない様子のシュウジがマチュの胸の中で頬を紅潮させ、そして安堵しているのがわかる。

ここだけの話だが、マチュは胸の中にシュウジを抱いたのは決して初めてではない。マチュ曰く「はずかしいことばせんぶやった」と言うようにそれなりの関係を持っていたのだ。故にシュ

ウジも最後の別れは悲しかったし。マチュも必ず再開すると決意する覚悟を決めていたのだ。

遺伝子が彼らを結びつけた。別にホモ・サピエンス同士に産まれたから結びついた訳ではない。地球という揺り籠に産まれた生命体であるからこそ結びつけてくれたのだ、地球圏はシュウジという迷える船にとつての灯台であった、マチュという灯火に導かれ。再会したのだ。

「この件（くだり）はやたら長くなりそうだからちょっと省こう」とマチュ曰く。

「他にあまり変化はないみたいだね」

「うん、ジオンはアルティシアって人がビシッと治めてるよ」

「あの人が」「知ってるの?」「うん、ボクにガンダムハンマーを授けてくれた人だよ」

へえ。シュウジのハンマーってアルティシア様のモノだったんだあ。知らなかったな。

「あとは変わらないかい?」

「ニヤアンもわたしも元氣だし、知る限り宇宙は平和だし、まあどうって事ないよ——けどね」

「けどね?」シュウジ訝しむ。

「ちょっと来て」とマチュは自室から普段ニヤアンと過ごすりビングへとシュウジを誘う。

アナログ式の黒電話。ブラウン管のテレビに真空管ラジオ。ラッパ式のレコードプレイヤーなど旧世紀の品々が揃う謎の空間がそこには広がっていた。少女二人が「ゆっくり」と刻を過ごす聖なる場所であった。

「ニヤアン、シュウジだよ。シュウジ帰ってきたよ」

とマチュが褐色の少女を呼ぶ。少女は赤面しながらマチュの言葉に従い、自室を出て歩きはじめる。最後に見た褐色の彼女は泣いていた。ポロポロで、友達を失い。途方に迷っていた。

「――一緒に逃げよう。」と告げられたが、叶う願いではなかった。ゼクノヴァへ導く訳にはいかなかった。そう彼女は「普通の女の子」だから。巻き込む訳にはいかない。

彼女は細木のようなしなやかで細い躰でイズマコロニーというソドムとゴモラの街を生き抜いていた。少しばかり自分に重なる部分があった。お互い、お尋ねものだった――。

ニヤアンの回想が続きます。けどこれはわたしとシュウジのおはなしだから割愛するね。

ニヤアンだ、ニヤアンがヒョッコリ顔を出した。その長身の躰には幼すぎる表情が顔を出す。

いや——違う。何か、何かを秘めている。シュウジは感じ取った。

ニヤアンには少し膨らみが産まれていた。躰のラインが柔らかくなった訳じゃない。常に何かを警戒していた目つきが、丸くなったのだ。庇護下におかれたやさしい瞳がシュウジを見つめる。

「シュウちゃん」

本来なら飛びつきたい所を、彼女は抑えた。なぜならそれはマチュとシュウジの再会だからである。自分とではない事を、彼女は知っていた。知っていたんだ。そう思い込んでいた。あの時シュウちゃんとは離れてしまったから。

「やあニヤアン。元気そうよかった」

「うん、元気だよシュウちゃん」

ニヤアンはゆっくりを歩き出す。まるで何か転倒する事を警戒しているかのような歩みであった。何かあるんだ。シュウジは直感でニヤアンの心を、一瞬だけ弄ろうとするが、そういう不躰な事はしないのが礼儀だと思った。

いたずらに人の心を盗み見るのはニュータイプの悪い癖だ。これから覗き込んでいいのは番（つがい）であるマチュの心と、おのれを傷つけようとする悪たるものだけにしようと思った。そんなニヤアン、何か様子が違った。

「ニヤアン、自分から言う？」マチュが伺う

「ううん、マチュから紹介してあげて。恥ずかしい」とニヤアンは答える

「はづかしい事なの？」とシュウジが伺うが「そうじゃない」とニヤアン更に恥ずかしがる。

「おかあさん、ニヤアンはおかあさんなんだよ。」

マチュがニヤアンのお腹を撫でながら語りかける。

「ニヤアンはいいおかあさんになれるよ」優しい言葉だった。

「うん、いいおかあさんになる」とニヤアンは力強く答える。あのいつもオロオロしていた瞳はどこか遠く彼方へ消え去り。今はどっしりと構えた力強い黄色い瞳がそこに宿っている。

「おめでとう、ニヤアン。いいおかあさんになろうね」シュウジが感じた「何か」とは――。

『母性』そう、母性だった。ニヤアンという幼い精神に母性が芽生えていたのだ。

「もちろんだよ！ニヤアンはいいおかあさんになれるんだよ！？じゃなきゃ嘘だよ」

マチュは力説する。

「うん、いいおかあさんになる」繰り返すニヤアンの言葉も力強い。

いま、ここに神聖な瞬間が訪れる。イズマコロニーで出会った3つの命。それが重なり合う。

赤い瞳と青い瞳と黄色い瞳。すべてが重なると光の色になる。色を重ねればいつか黒くくすむというのは古い地球人。もしくは絵の具の具のそれであるが、ここにいる新しきニュータイプ達の色は光の色であった、色を帯びた光は重なると白く透明な色へと昇華されていく。

そこに、新しい命が加わろうとしていた。光の色でいっぱいの新しい命だった。

「シュウちゃん？赤ちゃん見える？」とニヤアン

「見てやってよシュウジ。ニヤアンの赤ちゃんだよ」とマチュ

「うん、ニヤアンのキラキラは紫色だね」とシュウジは先程覗こうとしたキラキラへ瞳を澄ます。

「赤ちゃん、いる？」とニヤアン不安げ。

「いる、新しい命が、芽生えている。ニヤアンといっしょにキラキラを泳いでいるね」

シュウジは新しい命の鼓動を聞いた。

人よ。命よ。はじまりを見る。

胎動をシュウジは「キラキラ」の中で感じた。

「聞こえるよ、ニャアンの赤ちゃんの産声、男の子か女の子か当ててあげようか？」

「できるの？」マチュびっくりしたという声を出す

「いいよ、私ももう知ってるし、今5ヶ月だよ、当ててみてシュウちゃん」

「うん」シュウジお腹にそっと手をやる。膨らんだお腹を守るようにタイトなワンピースで身を固めるニャアンの鼓動が聞こえた。

数秒ほどの時の刻みが流れる。

「おんなの子だね」とシュウジ。あたり。

「なんでわかるの!？」とマチュ

「だっておちんちんないもの」とあっけらかんとシュウジは答える。

「それはそうだけどき？わたし達エスパーじゃないんだよ？透視とかできるわけじゃないじゃん」

「でも、命の鼓動は感じられる。そう産まれ落としてくれたんだよ。人類の進化がそうさせたんだ。人類が火を覚えてから数十万年。文明という果実に溺れてから数千年。妥当な進化だよ。少し遅いくらいだ。命の鼓動を感じてみてマチュ」

シュウジは語る。このハラヘリムシ、時折シリアスに語り始めるのだ。あのイノグアツソ紛議・の渦中。人類全体の事を考えて動いていたのは三人、シャア・アズナブル。シュウジ・イトウ。そして、キシリア・ザビであった。キシリア様は少し身内との争いと利害関係のせいで人類全体について考えるにはすこし浅慮であったが、生存戦略上致し方なかった。

「ニヤアン？ いい」とマチュは胎動する子宮を触ろうとする。

「いいよ、いつものように撫でてあげて」とニヤアン。母たる声を出す。

マチュ、ニヤアンの膨らんだ下腹部を触る。胎動が聞こえる。紫色のキラキラの奥底にニヤアンを惑う衛星のように新たな生命が回っている。母子が戯れているのだ。

「そうだね、女の子だね。ニヤアンそっくりのかわいい女の子だ」マチュはかみしめる。

「そうだよ、わたしの赤ちゃん。かわいい赤ちゃんだよ」

母たるニヤアンは子宮に語りかける。

「この命のお父さん、旦那さんはステキな人なんだね」とシュウジ。

「うん」ニヤアンは恥じらいながら答える。ニヤアンは恥ずかしがり屋だ。

「シュウジびっくりすると思うよ、ニヤアンのステキな旦那さん誰だと思う？」

「ジークアックスのパイロットだね、合った事はないけど、『遭った』事はある、実直な魂を持ち合わせていた」

ニヤアンはジオン国民となり、姓名を受けていた。「ニヤアン・オリベ」優しき名前だった。

「実直な魂ってまさしくエグザベくんじゃん」マチュはビツクリ。

「あの人、エグザベ少尉は実直な人。素直な人だよ」とニヤアン

「遭ったことって何よ」「遭遇したんだよ。対峙もした、それで戦った」

「マジで？」「マジだよマチュ、君は流れ弾で死ぬはずだったけど、今生きている。」

マチュは記憶を巡る。カネバン公司構成員「ジェジー」の顔がチラついた。タラコくちびるで愛犬ボメラニアンを愛でる優しい瞳。そして中立コロニーに戦禍。コロニーの残骸が飛び交う。

破片、そして死線。その刹那を。護ってくれた赤き盾。あの時のジークアックスのパイロットってエグザベくん！？

マチュマさかの縁（えにし）に開けた口が塞がらない。あのロッカーナンパ野郎とあんな所で遭っていたなんて。わたしの人生は運命的な出会いで成り立っているんだ。と主人公めいた事を口にする。

「ステキな旦那さんだよ、ボクが保証するよ。聞かせて？エグザベくんのお話」

「それよりもわたしと何か話す事ないの！？」とマチュ軽い嫉妬心。

「マチュとはもう語り尽くしたよ。次はニヤアンの番だよ」

「おはなしするね、マチュ今日はピザ取ろう」夜伽噺は長くなりそうであった。

「取ろう！取ろう！カラオケ大会やろう！」

マチュは張り切って黒電話のダイヤルを回す。ここ仏領ギアナの孤島はシュウジとマチュとニヤアン以外棲んでいない。ほぼ無人島。宅配ピザは高速艇かヘリコプターで空輸される。ごっつい保温器に入って届けられるピザだけど、ちょっと冷めている気がする。まあ気にしない。

そしてその夜。シュウジが地球に還って、初めて食べた物は『ピザ』だった。サラミとオニオンと彩りのピーマンが添えられた、どこか懐かしきピザだった。

そして「おたま」をマイクに見立て唄う彼女達の調子に合わせてタンバリンを鳴らす彼、シュ

ウジの姿があった。「もうどうなってもいいや」という名の詩らしい。

——神様、いや神のように宇宙を司る存在がいるのであれば、この願いを聞いて下さい。

タンバリンを無らしながらシュウジは祈る。宇宙に向けて。別の宇宙に向けて。今尚膨張しつづける宇宙全体に対して祈りはじめた。

——「もうどうなってもいい」なんて言いません。ボクとマチュ。そしてニヤアンやみんなに安住と、そして『倅せ』を授けてください。ボク達人類が掴み取った「幸せ」ですが「倅せ」をください。人に授けられた幸せを「倅せ」と呼ぶと旧い地球人が謳ったそうですが。ボク達にも誰かに守れた。与えられた「倅せ」をどうか、お授けください。誰かに護られて、ボクたちはきつと安堵できるのですから。

シュウジはそう静かに祈った。ミラーボールが輝くカラオケ会場には似合わない。静かな祈りであった。

旧い詩人が謳った文句が脳裏に響いた。

——**全ての夜と全ての朝にタンバリンを鳴らすのだ**

静かな夜と静かな朝が、きっとこの三人を包んでくれるだろう。

マチュビームその③

前回…シユウジと再会した。ニヤアンと三人でカラオケした。歌いまくった。幸せだった。

その夜、シユウジをベッドへ誘い。愛し合った。わたしのベッドは夫婦にとって愛の褥と化した。番（つがい）たるおしどり夫婦の巣だ。雖はその姿をまだ見せていない。まあベッドの中じやわたしが雛みたいなモンだけどね！シユウジに随分と可愛がってもらってしまった！

——アマテ・ユズリハ。18歳と一ヶ月。赤裸々に口述す。

「それでねえ、エグザベくんは宇宙で仕事してるんだよ？」

「ニヤアンを置いてかい」

「うん、ニヤアンは『マチュといっしょにいたい』って言ってゴネた訳。エグザベくんも地球勤

務にして欲しいってヒゲマンに言ったんだけど、ダメでさあ」

「『愛』という感情は宇宙を通じて繋がりがあえるよ、距離は大気圏なんかは関係ない。ボクとマチュがいい例じゃないか」

「そうだけど、物理的に愛し合わないと赤ちゃんはできないじゃん」

「それはそうだね」とシュウジ

「宇宙での航海。変な日本語になっているけど、訓練航海は一回につき三ヶ月と決まっているの。だから、三ヶ月に一度まとめて休日を貰ってエグザベくんはニヤアンに会いに来るんだ」

「えらいねエグザベくんは」シュウジの吐く息が白い、寒い訳じゃない。わたしとシュウジの汗と体温で靄（もや）が出来ているのだ。わたしたち二人を包むタオルケットの中は汗と肌の温もりで『すごいこと』になっている。

「二週間の休暇の内、10日しかこの島にいられない。そこでニヤアンと愛し合うんだけど、これがまたすごくて。ニヤアンって、結構積極的なんだね」

隣の夫婦の営みをマチュは天井裏から覗いている気持ちでいた、アドバイスしたい位だった。

「愛に積極的なのはステキなことだよ。それで遺伝子を残せるなら幸せだ」シュウジ

「『遺伝子』って言わないで！なんかすごい冷たい感じに聞こえるよ」

わたしの眼の前には等身大のシュウジの貌（かお）がくっきりと見える。月の光を浴びて、青い髪と瞳がきらめく、星の海と人工衛星。それに月の光しか照らすものは無い孤島の夜。輪郭がはっきりと見える。満月なのだ、太陽光に当てられて月が赤く光る。そういう夜に私達は出会い、一つになった。きつと「運命」なんだと思う。自分で掴み取った運命だッ。絶対離さない。

そうマチュは誓った。その印として男の子めいたシュウジの首筋に力強く口づけ。愛の印を刻みつけるような行爲だった。マチュはシュウジ以外に肉体関係を持ち合わせていなかった。男性自身も幼き日にお風呂に入れてた父親のモノとネットで見た猥雑な画像でしか知らない。実質シュウジだけの肉体だった。それが嬉しかった。「シュウジ専用マチュ」という謎の言葉が脳裏によぎったが、馬鹿らしいので口にしなかった。そんな実質ウブでネンネだったマチュをシュウジという不思議な青年が、階段2つくらいオトナにさせてしまったのだから恐ろしい。名門女学園ハイバリー学園をエスカレーター式で登ってきたのもその理由だったかもしれない。女子校たる女の園で王子様であり続けた女の子はある日王子様に出会ってお姫様にされてしまう――。

軽金属とカーボン繊維で身を固めた、全長18メートルの巨大殺戮ロボット「モビルスーツ」

ジークアクスに乗り、蛮族めいた手斧を振り回して巨大ロボット同士の拳闘をカリギュラ達に見せつけるのだ。お姫様ではないかもしれない。そして世界まで救ってしまった。

そんなお姫様でも褥の中じゃかわいいお人形だった。「シュウジの指はヤバイ」とだけ伝えて欲しいとマチュ曰く。

そんなマチュが、どこで覚えたのか唇をきつくシュウジの首筋に立てる、人の肌を強い力で吸うと内出血を起こして「痕」が残る。医学的には「吸引性皮下出血」と呼ぶらしい。そんな事は後で教わった。キスマークだ。シュウジにたつぷりと付けられたのでマチュは肉体でその「痕」の付け方を覚えた。まだイズマコロニーの隙間で暮らしていた頃からシュウジとマチュは愛し合っていた。お互いに愛の術を与え、そして、覚えていた。

きつと遺伝子が突き動かしたに違いない、愛の「印」を与える事を遺伝子で覚えていたのだ。それは人類が火をもち、文明を築き、宇宙にまで進出しても忘れない「遺伝子」レベルの情報であった。原始反応と読んでもいい愛の啄み。

「マチュ、そんな事しなくてもボクはキミのものだよ」とシュウジは囁く

「『モノ』とかそういう話じゃないの!」とマチュ一喝。しかるのち再度首筋を嬲りだす。

粘膜と唇がこすれる音だけがマチュの部屋に響く。「淫靡だ」とシュウジ

「おいしい！シュウジの首筋おいしい！男の人の味がする！しょっぱい。頑張ってくれた汗の味」

マチュ心の中で絶叫した。当然シュウジにはバレていた。

口は塞がっていても、魂は絶叫しているのだ。

キラキラの中で声をめいっばい広げ、絶叫していた。

聞いているシュウジは、ちょっと恥ずかしそうだった。恥ずかしそうだったけどマチュを抱き止める腕（かいな）は決して離そうとはしなかった。

「噛むのはやめてマチュ。痛いよ」シュウジが囁く

眼の前のお姫様はもうお姫様というか狼になっていた。愛に飢えた餓狼であった。ついに牙まで向けようとしていた。シュウジはさすがに歯型は痛いからやめてくれと懇願した。

「自分は噛むくせに」

マチュは告白した。今彼女のたわわな胸には噛み跡がついている。シュウジはこうみえて執念深いというかねちっこい部分もあるのだ。とマチュは告白する。ブラジャーの裏、とか二の腕とか、

制服の上からは見えないような所に齒型をこっそりと残す。そういう男だった。

おたがい、うぶなねんねという訳ではなかった。

爛れてはいないが性生活は充実しているみたいだ。

今日、二人が久しぶりに肌を重ねた夜。神聖なる夜であった。

マチュビームその④

前回までのあらすじ…シュウジと再会した。肌を重ねた。

「シュウジのおよめさんなる」

宣言してしまった。

考えてみればとんでもない宣言をしてしまったなあって思う。反省は絶対しない！だってシュウジのお嫁さんになったかったんだもん！女に産まれたからには一度くらい結婚っていうモノを味わっておきたいじゃん。

「結婚なんてするもんじゃないよ。苦勞の連続さね」

日光浴をしている時、アンキーに言われた。アンキーには離婚歴がある。その事を赤裸々に話してくれた。イズマコロニーの反射板は太陽光を眩しく取り入れてくれた。

「でも好きで結婚したんでしょ？」とその時は言い返した。バツイチの女の人にそんな事言うな

んて。あの時のわたしはなかなか根性が座っているように思える。今でも肝っ玉の大きさは自慢できる。ジークアクス越しとはいえ、なんせ大気圏突入したからね。挙げ句、生まれ故郷のイズマコロニーじゃ凶状持ちの指名手配だからね。ちょっと冒険しすぎたかな…公開してる。

おかあさん元氣かなあ：

「好いた惚れたがあるさね、まあ籍を入れて落ち着くと百年の恋も醒めるってもんよ、あんた絶対結婚したらダメなタイプかもね…でも、好いてるコレがいるんだろ？」

アンキーは指を一つ出した。まあそういう意味である

「いないっていったら嘘だけどお…」恥じらいながら答えたのを覚えている。

「まあ恋愛程度にしな、あんたまだ17歳でウブなネンネなお年頃なんだからさ、まあまぐわい程度にしときな」

「けっこう、結婚とか真剣に考えているんですけど…」

恥じらいながら答えた。当然嘘である。シュウジとの隠れ家生活。こんな生活がいつまで続けられるか、わからなかった。愛の逃避行まで考えてもみなかった。ただ『地球旅行』という目標だけ決めて、それを言い訳にクラブという現実逃避めいた宇宙時代の拳闘士を演じていたのだ。

カリギュラ達の目線よりも、シュウジと舞う「キラキラ」に酔っていた。それにニヤアンを救いたかった。クラバの稼ぎでニヤアンの市民権くらい買ってやろうと思っていた。

だってフェアじゃないじゃん！わたしは衣食住に困ってないけどニヤアンは明日も解らぬまま彷徨っているなんて、おまけに軍警は本気で殴ってくる。ありえない。だから、ニヤアンには怯える事なくイズマコロニーを自由に歩いてほしかった。

——その願いはエグザベくん、あのナンパ野郎が叶えてくれた。エグザベくんとニヤアンは結婚して、ニヤアンには晴れてジオンの市民権が与えられている。軍隊も名誉除隊した。ニヤアンは幸せになれたんだ！

ニヤアンの話が長くなってしまった。アンキー、アンキーとのお話。

「まあ男なんて、私生活を覗くと幻滅するのよ」

「私生活ってナニ？」

「ネンネのお時間さね、恋人の屁の臭さで千年の恋も醒めるってもんよ」

「そんなものかなあ」

「恋愛と結婚は別だよマチュ、よく考えときな、お嬢さん」

アンキーが差し入れてくれたレモネードはちょっとすっぱかった。

振り返るとメチャクチャな事してたなあ：会社の金庫を漁って挙げ句の果てにアンキー撃ち殺そうとしたからねえ。アンキー、許してくれるかなあ。乙女の間違いくらい許してほしいなあ。

アンキーが言ってた千年の夢が醒める屁、放屁にはまだ当たってなかった。シュウジって匂いしないんだもん。寝起きのキスとか普通臭いっていうけどまったく感じない。というかおトイレしても臭くないかも知れない。シュウジの隠れ家のおトイレ無味無臭だった。アイツの身体は何で出来ているんだ？地球人なのかすらあやしいなあ？

そんな事を考えながらリビングでくつろぐ、レコードの針がボツツと音を出した。奏でていた音楽が止まった。レピート機能すらないアナログで融通の聞かない蓄音機。わたしはその融通の効かなさが好きだ。「牛さん」が振り向いているそのレコードのジャケットはかわいいので好きだ。ネットで調べると牛さんの名前は「ルルベル三世」という名前らしい。旧世紀のロックバンドの一枚。A面は没入しないと聞けない23分。B面はわりとポップだ。

そんな特に詳しくもない音楽鑑賞に浸っているとニヤアンが顔を出す。

「お洗濯、終わったよ」と洗濯籠いっぱいのお洗濯物を取り出す。

「じゃあ、干しにいこっか！ニヤアンは休んでて」とマチュはニヤアンをソファに座らせる。

「なんで」とニヤアンが頸をかしげる。

「なんでって、お腹に赤ちゃんいるじゃん。安静だよ安静」と言い聞かせる

「大げさだよマチュ、ちょっとくらい身体を動かした方がいいだよ？毎朝やってるヨガも運動だからダメ？」とニヤアンは聞く。

ニヤアンはイズマコロニーにいた頃から毎日、美容と健康の為にヨガを欠かさない。難民街（ゲットー）の広場でおばちゃん達と集まって毎朝ヨガに勤しむのが日課だったらしい。ジオン軍に入ってからでもグラナダでやっていたと言うのだからすごい。

「ヨガも控えた方が・・・」と言いかけるが

「マタニティヨガってあるんだよマチュ？知ってる」と言い返されてしまった。ヨガに関してはニヤアンは博士だ。

「転ばなきゃ、大丈夫だから。身体を動かしたいし、『この子』にお日様をいっぱい浴びてほしいから」とまだ膨らみかけのお腹を撫でる。その子宮には新しい命が宿っていた。

「じゃあ一緒に干しますか！」とわたしは藤編で出来た洗濯籠を持ち上げる。これが結構思い！

ニヤアンはひょうひょうと持ち上げていたのに！やっぱりヨガで鍛えるからなのかな？ニヤアンはすごいや！

「マチュ、無理しないで」とニヤアン

「無理なんかしてない！これくらい持ち上げられないと」

とトコトコとカニさん歩きで干し場へ運ぶ。サンダル越しに感じる砂粒がとても熱い。赤道直下の孤島は毎日が夏休みだった。

洗濯物は決まってわたしとニヤアンの服やら下着やら。その中にシュウジの服が増えた。

ペンキまみれのつなぎと、袖がえらい事になってるスケベタンクトップとボクサーパンツ。

浜風に晒されてはためくシュウジのつなぎは晴れの空に映えて美しい。

じゃあ今シュウジは何を着ているのかって？すっぱんぼんだ！すっぱんぼんで島を探索しにいつてしまった。変な虫にオチンチンとか噛まれなにか心配である。

そしてシート、わたしとニヤアンのシートとタオルケットもついでお洗濯。この島は恐ろしいほどすぐ洗濯物が乾く。平均気温摂氏30℃の常夏の大地と涼しい浜風に揺らされたらどんな洗濯物もすぐに乾いてしまう。もちろんスコールには気をつけないといけない。

わたしのシーツがなんだか目立つように思える。昨晚、あれだけ愛し合ったんだからそりゃシーツも汗やら体液まみれになりますわ！我ながら恥ずかしい。

「すごかったね、シュウちゃんとマチュ」

ニヤアンにも当然バレていた。穴があつたら入りたい。

「まあね！初夜みたいなもんだからね」と背伸びして答えてみた。わたしの着ている「シャツから除き見える噛み跡やらキスマークで愛の営みはニヤアンにもお見通しだった。

「シーツすごい匂いだった、マチュの匂いとシュウちゃんのおいが混じって」

「嗅がないですよ！」「ごめん、つい…」ニヤアンも我が身を五分反省する。

「だってシュウちゃんとマチュの匂い…幸せだった…嗅いでる時、キラキラが見えた」

「そんなに!？」

ニヤアンの告白にわたしもビックリ。まあ、キラキラの海を双りで泳いでましたから？

あたりまえ？なんですけど？

「これから毎日シーツは洗濯すると思うからよろしくッ」とだけ付け加えた。

ニヤアンは赤面していた。まあこんなニヤアンだけどエグザベくんが島に帰ってきた時は激し

く求め合っているんですけどね。すごいよニヤアンの絶叫。最初は「エグザベ少尉！エグザベ少尉！」って理性を保ちながら愛の啄みをしているのに「あなたッ」「あなたッ！」って精を受け入れちゃうの。まあ新婚さんはオアツイですこと。そりゃ赤ちゃんだってデキるわ！

「あっ」

声が漏れた、何かを再確認してしまったのだ。昨夜の愛の営みがリフレインしている。

「そうだ…わたし」「どうしたのマチユ」

ニヤアンはその高い背丈を屈ませてわたしの顔を覗き込む。

「わたし、シュウジのおよめさんになるんだ」

思わず口から漏れ出してしまった。愛の告白。確定している事実を述べているにすぎない。

「うん、およめさんになるんだねマチュ」とニヤアン

「そう、『シユウジのおよめさん』になる、なるんだわたし！なったんだよ！」

昨晩交わしたばかりの愛の契りをニヤアンに打ち明ける。恥ずかしさしかない行為だけど、恥じらいの頬の紅潮もなく、淡々と事実だけ答えていた。

「およめさんになる…シユウジのおよめさん」

うわ言のように呟いていた。

「ニヤアン、わたし。シユウジのおよめさんになってもいいよね？」

何故かニヤアンに許しを乞う姿があった。

「しってるよ。マチュはシユウちゃんのお嫁さんになっていいんだよ？」

ニヤアンの瞳はやさしかった。慈母愛めいた微笑みがわたしを包んでくれた？

「ほんとうにいいのかな？」とわたしは自分を疑う。

「シユウちゃんとマチュ。ステキなカップルだと思うよ。きっといいお嫁さんになれる」

ニヤアンが何故が確約してくれる。赫灼（かくやく）した未来が見えてくる。

「ありがとうニヤアン、ありがとう」

なぜだろう、わたしは泣き出した。涙が溢れてきたのだ。悲しくなんかないのに。

シーツがはためく洗濯場、洗剤と潮の香りが混じりあう。シーツの影に二人の少女が映し出される。そして身体は一つに抱き合う。ニヤアンが傍にいてくれるのに、わたしの心はどんどん不安定になっていく。

「ひとごろしが――になっちゃいけないんだ」悲しい言葉が漏れる

「どうしたの？」

「人殺しが幸せになっちゃいけないんだ！」感情の昂りと同時に言葉を荒げた。

「ひとごろしだ……わたしはひとごろしだ……そんなやつがしあわせになっていいわけがない」

わたしの口からは、幸せと相反する言葉が紡がれていた。本当はシュウジと幸せになりたいのに、『もうひとりのわたし』がそれを赦さないのだ。きっとアンキーを衝動で撃ち殺そうとしたわたしだろう。クラブという殺し合いの中で散っていった無も知らぬゴロツキの一人を始末し自分がそう言っているんだ。トメノスケホークは加減を知らない。殺す時は殺してたと思う。多分。なんだろう、ニヤアンじゃないけどワケワカになっちゃう。心が乱れて動揺している。キラキラは曇っていて見えない。いやだッ！怖いよ。一人でテンパっている自分がいる。呼吸が過度に

なる。

ニヤアンはそんなわたしを見つめていた。自分を見失っていてニヤアンの事を見れなかった。きっと困っていただろうなあニヤアン。勝手に自分を卑下して怯えている一少女をどう見守っていいかなんて、18歳の身分じゃわからないよ。

けど、ニヤアンは違った。わたしよりちょっと『オトナ』だった。人生経験の差なのか、わたしが幼いだけなのか、眼の前のニヤアンは出会ったばかりの頃みたいにお口お口する事もなければ、ワケワ力になってパニックになったりする事もなかった、わたしを抱きとめる力を、しなやかに強くしていた。

「私だっていっぱい人を殺したよ」

ニヤアンの言葉が胸に響く、むかし、夜な夜なニヤアンから紡がれるグラナダ時代の思い出が脳裏によぎる。謀殺を図る悪漢を斃し。ソーラレイという集団殺戮装置で数万人のジオン軍人を焼き払うとう大義を命じられたという事実、殺戮装置としてジフレドと共に働いていたという

悲しい過去。

「キシリア様の命令でいっぱい殺した。もう償いきれない数の人を殺したよ」

ニヤアンは再びその負の物語を語ろうとしはじめる。

「でもそれは命令されたからでしょ？わたしはわたしの為に人を殺した！遊び半分で」

「同じだよ。ミゲルって人をビームで焼いた時、何も考えてなかった。死にたくない。って思ったら、ジフレドちゃんが動いてくれたの。無意識で人を殺したのはマチュと同じだよ」

ニヤアンは語る。ジフレドに芽生えた自立プログラムはニヤアンを母親のように慕っていた。

そして、双つの月の使い「ルナ」と「アルテミス」は働いてくれた。

だから、今ニヤアンは生きている。それはとてもすばらしい事。

「殺したよ……だけど今エグザベくと幸せになったよ……わたしも幸せになっちゃダメなの？」

ニヤアンは問いかける。私はエグザベくとニヤアンの祝言に水を差したくない。

「そんな事ない！ニヤアンは幸せになっていいんだよ！これからニヤアンには幸せしか待っていないんだよ！これから幸せな事だけ受け入れる入れ物なんだよニヤアン。不幸はもうない！私が保証する」

なんだか錯乱していた気分が落ち着いてきた。寄り添ってくれるニヤアンのお陰だ。

「ニヤアンを幸せにする」

この島にいる誰ものが、そして今も宇宙を泳いでいるエグザベくんも同じ意識で動いていた。

「それと同じだよマチュ、マチュも生きるためになんでもした。けど幸せになっていい権利があるんだよ」

ニヤアンは淡々と語った。さも当然かのように。まあ当然なのだが、私が一人相撲をしているだけで。わたし自身、幸せになっちゃいけないなんて事はなかったんだ。

「そうかな…そうかな」まだ困惑している自分がいる。

「そうだよ。じゃないと嘘だよマチュ。おねがい、シュウちゃんを幸せにしてあげて。私からお願い。」

ニヤアンの言霊からは何か計り知れない物を感じる。ニヤアンなりにもシュウジへの想いがあった事は知っている。それで、ニヤアンとちよっとこじれた事もあった。けど今はニヤアンはエグザベくんのおよめさん。幸せになったんだ。

「そうだね…シュウジを幸せにしてあげないとね、アイツもなんだかんだで苦労が多かったみた

いだから」

「そうだよ、頑張って張り切って悲しいことや苦労があって今があるんだよ、シュウちゃんもマチュも一緒。だから幸せになって」

ニヤアンも思わず泣き出してしまった。

「ニヤアン、泣かないで」何度もそう呟いた。けどニヤアンは泣き虫さんだ。泣いちゃう。

イズマコロニーでのニヤアンは一切泣かなかった。悲しい心も嬉しい心も押し殺してたんだ。

だけどこの島でニヤアンとマブになってからニヤアンの表情は豊かになった泣き虫さんにもなった。泣き虫さんなニヤアンの事も好きだ。

「わかった：わかったよニヤアン、わたし！ちゃんとシュウジのおよめさんになるから、だから泣かないで」

「ちゃんとなれる？」 「なれるよ」 ここは声高に強調。

「およめさんになってマチュ：シュウちゃんを幸せにしてあげて」

「シュウジも幸せにするし、わたしも幸せになるよ！わたしってこう見えてヨクバリさんだからさ、諦められないんだ！」

そこにしなやかさを秘めた強い心が生まれ落ちた。アマテ・ユズリハ。およめさんになります。

「マチュはいいいおよめさんになれるよ」

ニヤアンはそう言ってわたしの手と空の洗濯カゴを引いておうちへ帰った。

「なる、ぜったいにおよめさんになる」そう口ずさんでいた。

あえて二度言う。そこにしなやかさを秘めた強さが宿っていた。

——マチュはいいいおよめさんになります。

時刻は正午、すこし前を指していた。洗濯モノはもう乾いていた。

藪の方からガサガサと音がする！？蛇！？イノシシ！？と少女二人は怯える

シュウジだった——シュウジ帰宅。

「いやあすごいね自然って、あとこの森には虫さんがいっぱいいるね、虫刺されまみれだよ」と全身虫刺されと日焼けによる焼けタダレで肌が真っ赤に変色していた。

シュウジと一緒に入浴。後に救急箱にあったムヒを全身に塗ったくる。

又テ又テとした光沢を持つシュウジが「おちんちんのあたりは痛いからやめて」と懇願

ニヤアンは黒電話でヒゲマンに病院船を手配。虫を媒介して何か病氣にかかってたら終わりだ。シュウジはワクチンなんて打ってるはずもなかった、赤痢もマラリアもインド熱も黄熱病もすべてに対して抵抗がないはずだった。風邪で倒れるくらい華奢な身体病魔に耐えられるはずもない。一日後、病院船到着。お医者さんいわく「いたって健康ですね」との事。大量の軟膏と飲み薬。そしてワクチン摂取。

いったいどんな身体してるのよシュウジ！？ほんとに地球人なの？

謎の超人シュウジ・イトウと籍をいれる事になってしまった！わたしの明日はどっちだ！？

マチュビームその⑤

前回…シュウジのおよめさんになりました。結婚しました。

と言ってもその「結婚」したという事実を知るのはシュウジとニヤアンとわたしだけ。

証人はニヤアンがいるし、これでＯＫじゃん！って思うんだけど。わたし一応女の子ですから、女の子として育てられていますからあ？憧れるじゃん！

『結婚式』

今日はそんなお話。

シュウジと毎夜の「粘膜交換」終了。共に果てる。窓から流れこむ夜風がまた涼しいッ！

「ねえシュウジ？」わたしが伺う。

「なんだい？」とケロっとした顔で答えるシュウジ、その瞳にもう赤い暗さは存在しなかった。純粋な瞳だけが存在する少年だった。しかし、ついさっきまで快楽に溺れながら絶頂を我慢して

いた乱れた顔をしていたのだ。嘘じゃないよ？結構必死に愛してくれるんだよシュウジはさあ。

「わたしはシュウジのおよめさんじゃん」

「そうだね、およめさんだよマチユ。マチユはかわいいね」

平気な顔でこういう事を言うのがシュウジと言う男である。「かわいい」なんて言われたら嬉しいに決まってるじゃん！ふつーだよふつー眼の前の青髪の美少年に言われたら誰だって赤面するって。今はその話じゃないの。もっと重要なことがあるの。

「『式』挙げたいじゃん」

「しき？」

「結婚式に決まってるじゃん！ちゃんとおよめさんにさせてよねえ」ニタニタしながら話す。

「結婚式：ってなんだろうね」シュウジが問いかける。

「そりゃあ…わたしとシュウジが夫婦になりましたっていう事実を他人に知らしめるイベントだよ、派手にやろう派手に！」

『でっかい披露宴会場で、すっごい式をあげてえ』汚い言葉になるけど旧世紀から今まで脈々と受け継がれる「女の子の欲望」であった、客は多ければ多いほどいい！聞いた話ではエキスト

ラを雇って空席を埋める式まであったそう。旧世紀の結婚式やばッ！

今シュウジとこうしてネンゴロになっているフランス領赤道ギアナ。フランスの古い法律では両親の了解を経て、ちゃんと形式だった結婚式を挙げないと政府が戸籍での婚姻を認めてくれないと言う話を聞いた、お互いのご両親の反対された夫婦は「事実婚」しかできないと言う悲しい歴史があることを映画で知った。タブレットでニヤアンと見たわ。ニヤアン泣いてたなあ。

結婚。どうなんだろう…わたしの戸籍って今どうなっているの？そもそもシュウジって戸籍あるの？世界線を跨ぎ、そして破壊を繰り返した終末装置に戸籍あったら逆に変じゃん。

どうなっているんだろう…けどまあ結婚式くらいあげられるでしょ！

「祝言（しゅうげん）を挙げたいんだね」

「そうそう！お嫁さんになるの、祝言かぁ白無垢もいいねえ」

しみじみ想像する自分がいる。白無垢の角隠しにわたしの赤髪がまた映えてさあ…シュウジに和装って似合うのかな？似合いそうじゃん。白無垢で決定！

「それに意味はあるのかい？」

シュウジからまさかの発言が飛び出してきた。いやッ意味あるでしょ！結婚式だよ？

「意味あるよ、みんなに『祝福』されたいじゃん」

「ボクはマチュと結婚したという事実があればそれで一生、愛を背負って生きていけるけどね」らしい事言ってくれるじゃないの。まるで極東アジアの古いドラマを見ているかのようだ。

シュウジとの褥。まさにメロドラマめいた現場にわたしはいる。正直にメロメロになってもいい。いいはずなんだが：それと式を挙げる事は違わない？

「でもさあ：式のない夫婦なんて淋しいよ、形だけでもいいから式挙げようよ」

「じゃあ明日ニヤアンとやろう、証人はニヤアンだ。指輪はないけどごめんね」

「指輪必要じゃん！人妻に裸の薬指で過ごさせて言うの」

「あんなもの、形でしかない。僕達が夫婦（めおと）である事には違いないんだから」

シュウジも言ってるのけるねえ：ちょっと前までララアを愛でるか殺すかして生きていた男だ。リアリストである。もっとロマンに生きてると思っていたけど結構乾いていた。

「形でも欲しいじゃん、シュウジこれからアンタのおよめさんになるんだよ？ちょっとカミさん孝行したらどうなの？結婚式は重要じゃん！」

「注文の多いおよめさんだなあ」シュウジも困り顔だった。

「明日ヒゲマンに聞いてみよ。今日はもう寝よう」「もう一回したいなあ」「いいよ」
今宵のシュウジはちょっと元気だった。

翌日。

「もしもしい？ヒゲマン？元気い」

黒電話の螺旋状を描く配線を指に絡めながらわたしは受話器に話しかける。相手はジオン軍で一軍を構える将である。

「息災ですよ、あなた達も元気そうですねによりです。」

シャリア・ブルであった。現在には准将である。アルティシア法王が統べるジオン『法』国を守るべく動く男であった。「大佐より出世してしまいましたね」と笑っていた。仮面は似合わない。

「ニヤアン君は母子ともに健在ですか」「健在も健在、元気に掃除機かけてたわ、替わる？」

「いえ息災であればそれでいいのです。エグザベ少尉が寂しがってましたよ」

ニヤアンは旦那さんの無事を信じている。だから無闇矢鱈に連絡は入れない。ミノフスキー粒

子による電波障害もあり、宇宙空間を航行中の戦闘艦は通信が制限されているのだ。船乗りの夫を待つ奥さんのイメージであっている。

「ちょっと聞いてヒゲマン」「なんでしょうか？」

きっと電話越しに整った髭を撫でる姿があるだろう。

「シュウジさ、帰ってきたよ」「知っていますよ」「ヒゲマンあっさりと答える。

「なんで!？」素っ頓狂な声が聞こえる。

「マチュ君とシュウジ君のゼクノヴァがサイド3の研究所から観測されました。随分と愛し合っているようです、監視衛星からも彼のバイタルサインを確認しています。ご顕在でなにより」
シュウジと夜を過ごす、夢枕の中ではずっと「キラキラ」につつまれていた。翠色の光の中でシュウジと二人で泳ぐ。「ちかくにいるよ」とシュウジはわたしに囁いてくれる。

キラキラの海を泳ぐのは大好きだ。オトナ達はそれを「ぜくのづあ」と呼称している。

「逢いたい？シュウジに？」本題を切り出す前に聞いてみる。

「逢ったら消えてしまいそうで怖いですね」とヒゲマン

「シャアさんもいるんだから、シュウジだって消えないよ」と一言付け加える。その一言で救わ

れるヒゲマンがいるのだから。シャアさんは今頃ラアさんと地球を歩いているだろう。

「そうですね、この世界の片隅にあの方がいるのであれば私は幸せです。マチュ君にとってのシユウジ君みたいなものですよ、オカエリナサイ。シユウジくん」

ヒゲマンの言葉に感情がこもっていた。愛とか憎しみとか希望とかそういう複雑な感情がこつた煮にされた複雑な感情に違いない。ニュータイプの感性に頼らなくても、わかるよそれくらい。

「そのシユウジさんだけどさあ…」

「なんですか？」

「わたし、およめさんになっちゃった。シユウジのおよめさん」

ヒゲマンにも教えとかなないと！わたしはもう世間を知らないオテンバ娘なんかじゃないって事を。人妻、人妻ですから。

「おめでとうございます。幸せな夫婦生活はわたしが確約しますよ」ヒゲマンは冷静に答える。

「ありがとヒゲマン…それでさあ、話があるんだけどお？」

「なんなりと、あなたの願いはできる限り叶えたいですね。この地球を救ってくれたのはあなたなのでから」

——わたし、アマテ・ユズリハ。一応地球圏の未来を救ってますから。ちょっと誇っていいよね？あの時シュウジがララアを消そうとしたらこの世界は今頃無くなっていたんだよ。ちょっとは褒めて欲しいな。まあ褒めてくれるのはヒゲマンくらいなものだ。

「結婚したんだからさあ…式を挙げたいんだよね。結婚式」

「ほお…式ですか、いいですね」ノってくれた！こういう時のヒゲマン助かるう。

「いいですが…その島で細やかに行うのがベターだと思いますよ」

なんで！？ジオンで盛大に祝ってよ！

「なんでえ。祝ってよ。わたし一応世界救ったんじゃないん」

「ええ、そうですねあなたがこの世界を救いました。シュウジ君とニヤアン君の協力もありましたね。ですがそれは秘密裏に処理された歴史なのです。地球人類はその事実を知りませんし——」

「知りませんとは？」

「マチュ君、キミは中立コロニー連合から指名手配を受けたままなのです。宇宙に上がった瞬間

間宇宙国際法執行機関により逮捕、拘束されます」

蒼天の霹靂だった。『おたずねものの』わたしって、まあその程度の触法行為は行ったアラなあ：クラブという違法賭博関与、強盗。殺人未遂。刑務所行きも仕方がないかなあ

「そこはなんとかしますよ。もう少し時間をください。相手は中立コロニー全体ですからね、説得も大変なんですよ。かといってイグオマツソ紛議について突かれると痛いですからね、我がジオンは」

ギレンさんとキシリア様の兄妹喧嘩で数万人の犠牲者を出したイグオマツソ紛議。紛議と言っているのが内戦に近いものだった。わたしはヒゲマンとの特訓でしか関わってないけどニヤアンはその紛争の犠牲者の一人だ。

「わかった、待つよ：でも式くらい派手につて：わたしおたずねもののかあ：」

「そうですね、己が犯した過ちを少し反省しなさい。17歳といえども普通裁判にかけられてしまう罪ですよ」

「友達とか式に呼びたかったなあ。おかあさん」

そうだ、この時までずっと忘れていた。おかあさんとおとうさん。元気にしてるからなあ

「おかあさんは元気？イズマコロニーはどうなったの？」

「サイコガンダムによってかなり破壊されましたが、復興しています。お父上とお母様も元気ですよ。」ヒゲマンの一言でホッとした。おかあさんが無事でよかった。

あのイカれた黒い悪魔たるサイコガンダムの熱線で灼かれていたらどうしようかと思った。クラスメイトも無事かなあ。

「わかった、島で結婚式挙げるよ。『仮』の結婚式ね。わたしの身分がちゃんとしたら、盛大にやってもらうから」

「もちろん、国を挙げて祝福させていただきます。エグザベ・ニヤアン夫妻も同様にね法王もご出席されますので、節度を保ってくださいね」

「そういえばニヤアン結婚式挙げてないや！というかわたしの戸籍どうなってるの？シュウジに戸籍あるの？」いろんな疑問符が湧き出てきた。

ヒゲマンは公務で忙しい中、ひとつ、ひとつ答えてくれた。

オリベ夫婦、エグザベくとニヤアンの式はジオンを挙げて執り行われるらしい。ニヤアンもエグザベくんもジオン本国じゃ英雄だ。わたしと違ってニヤアンの存在は公言されているらしい。

一方わたしはというと、イズマコロニー戸籍を持つ一少女のままであった。しかし、都合が合わないでジオンでの戸籍を作っている最中だそうなのでサイド3ズムシティに本籍を持つ名前は「マチュ・ユズリハ」だそう。すぐに「マチュ・イトウ」に替わるらしい。あだ名がそのまま名前になってしまった。シュウジの戸籍もジオン本国の戸籍になるみたい。

そして、肝心の島の結婚式。島にそびえる古い有人灯台がある。時々ニヤアンが一人になりたいた時や、エグザベくんといチャイチャしたい時に使う小屋がある。チャペルめいた聖堂があった。大分傷んでいるけど。

「あの灯台で簡素に式を挙げたらどうでしょう」というのがヒゲマンの提案だった。

「私はもちろん参列します。エグザベくんもね、ニヤアン君を含めて見届けるのはその三人。淋しい式かもしれません。儀式というのはやる事に意味があるのです。証人を前に近いを立てて、指輪を交換する。その儀式に意味があるのですよ、わたしは異性愛者ではありませんから結婚という願望はありませんが……」ヒゲマンの性自認がちよっと漏れる。別に愛に性別なんか関係ないじゃん！

「まあ：許してあげるわ、祝ってちょうだい。あとあのボロ灯台直してね」

「それくらいの事はしますよ、長電話になってしまいましたね。これくらいにしましょう」とヒゲマンが切り上げる。

「シュウジ君によりしく伝えて置いてください。」「わかった、よろしくね」

「それではまた」

ガチャンと電話が切れた。南の島で結婚式かあ：それもありだな、なんだかセレブみたい。何事も肯定的に考えようと自分を鼓舞する。ポジティブシンキングじゃーん。

晩御飯の時間、シュウジとニヤアンにヒゲマンと話した事を話す。

「よろしくってさ」と言われた通り告げた。

「シヤリアが元氣そうでよかったよ」それだけだった。

「ステキな式に：したいね」とニヤアンが乗り気だった。

これから私はどうなるの？ちゃんと式を挙げられるの？不安は残るが、眼の前のカジキマグロのステーキを平らげる程度の図太さが私にも存在した。

最近、やたらと飛行機が飛んでくる。低空飛行で。なんだろう？まあいいか！よろしくね。

マチユビームその⑥

前回…シユウジと結婚した。「結婚式」を挙げる事になった、

身内だけの細やかな式になりそう。

けど、幸せだった。

ヒゲマンがわたしとシユウジの結婚式を確約してくれた。それから毎日忙（せわ）しくなってきた。まずでっかい船がやってきた。いつもの小型艇や病院船じゃない。でっかいお船だった。この島にはなんだか叩いたら壊れちゃいそうな栈橋しかないから沖に停泊していて、わたしとシユウジとニヤアンはタツカーと呼ばれる小型船で大型船に乗り込んだ。

タラップから大きな船へ入る。分厚いドアを開けた先には赤絨毯が広がっていた。ヤバかった。——おおきな船の正体は豪華客船だった。

「ニヤアンヤバくない」わたしは大はしゃぎ。地球に来て大きな船に乗るのはじめてだし。なに

より夢の豪華客船だ。地球連邦のお金持ちが乗る奴じゃーん。一生乗れないと思っていたわ！

「すごいね、キシリア様のおうちみたい」とニヤアンは関心していた。

「シュウジ、豪華客船乗ったことある？」とシュウジに聞いてみる。

「艦船は随分沈めたけど、乗るのは初めてだね」とあっさりと答えた。

そうか、シュウジは沈める側だったもんね。わたしもソドンとかいう物騒なお船には乗ってたけどなあ……でもこれはちよつと別だよ。

「身軽な格好で来て下さい」とヒゲマンは言ってたけど。どう考えてもドレスコードが必要な船じゃん。ニヤアンはマタニティワンピースにスカジャンを羽織っている。大きなお腹はもうすぐ産まれそう。7ヶ月だって。わたしはいつものスライジャケットにゆるいTシャツ、下半身はホットパンツ。シュウジはいつものツナギ……というかこの男、服はこのツナギしか持っていない。

少年少女3人組。身分不釣り合いの豪華客船に載せられる。

「お待ちしていましたよ」

緑の仮面の男が登場。ヒゲマンの仮面はまったく似合っていない。コスプレの域だ。

「まあこれはコスプレみたいなものですからお気に目せずに」とヒゲマン。

わたしの心は読まれていた。うかつに考えることすらできない、ニュータイプとは恐ろしい。

「人の心を覗きすぎるのはよくないな」

シュウジから珍しい一言が生えてきた。わたしと心を交わし。そして掴んでそして離さないシュウジから出てくる言葉とは思わなかった。

…まさか、わたしの心が読めるヒゲマンに嫉妬してるのシュウジ!?。やだちょっと恥ずかしいじゃん!

「そうですね、悪い癖になってしまっています。マチュクんの心はとても健やかですね」

ちよっとトキメキしているわたしを無視して会話はすすんでいく。とりあえずニヤアンの袖をひっぱった。ニヤアンはニツコリしてわたしの事を見つめてくれた。

ニヤアンの心はいま、二つある。母親であるニヤアンと赤ちゃんの心だ。赤ちゃんの心はいつも健やかだってニヤアンは離している。そう語るニヤアンの心も穏やかで力強かった。「母親」って感じるなあ…話が逸れてるじゃん。

「こんなおっきい船で何をするの?旅行するなんて聞いてないよ?何ももってきてないし」

素朴な疑問だった、このままクルーズ船で旅行なんていってもバッグも持っていないしスマホと

財布しか持ってないし、財布の中身も地球じゃ使えない1万ハイト札が数枚と、使い物にならないハイバリー学園の学生証しかないよ！ニャアンとシュウジに至っては何も持ってない。コンチとハロしかないよ。どうすんのよヒゲマン。

「結婚式の準備ですよ。挙げたいって言ってたじゃないですか」

「結婚式の準備に豪華客船？」マチュは訝しむ

「なんならここで式をあげてもらおうよ。その方が楽だよ」シュウジ

「シュウちゃん…式はちゃんとした所であげたいんだよ…マチュだってそう思ってる」ニャアン
「式は島の灯台で挙げましょう。その格好で挙げるのならすぐにでも式を執り行いますが、そうはいかないでしょう？」

ヒゲマンは何かを含むような言い方で話す。

「それもそうだね。わたしだってウェディングドレスくらい着たいじゃん。シュウジのスーツ姿も見たいじゃん。ああ白無垢もいいかも！角隠しの赤髪はバエる感じがしてさあ…」

「残念ですが和装は準備できません、ドレスでお願います」

一人でワクワクしている自分がいる、シュウジとわたしの結婚式なのにわたしだけハシャイじゃって。

「選ばせてよ……って贅沢言えないか」

「ステキな式にしたいのですが……あまり時間がありません」ヒゲマン申告な趣で語る。

「じかん？」

「最近、カタツムリみたいな飛行機を見ませんか？普通の旅客機ではないような、どこかもののしい感じの」ヒゲマンが問う。

「うん、飛んでる、ニヤアンが怯えているからやめてほしんだけど？何？演習か何かなの？」

「ええ、演習というより実戦でしょうね。あのカタツムリは連邦軍の対潜哨戒機です。ドン・エスカルゴ型対潜哨戒機といいます。最近このギアナ租借地がキナ臭くなっています」

「詳しく教えてよ！？」なんだか訳がわからなくなってきたぞ。

ヒゲマンによる連邦とジオン軍の軍事バランスのお話はかなり長いお話だったのでかいつまんで要約します。

私達の島はジオンの租借地、領土なのですが連邦はよく思っていないみたい。島の周りにはユ

ーコンという潜水艦とズゴックというちょっとマヌケな顔をしたモビルスーツが常に警戒している。そんなヤバめな島で生活しているのですが。最近連邦がシャシャリ出て来たみたいで私達的身も危ないかも…っていうのがヒゲマンの言い分

「連邦はあの島が欲しい訳ではなく、あなた達を狙っている可能性があります。あなた達は真のニュータイプですからね、お忘れなく」

「でも島でのんびりさせてくれる約束じゃん、わたし達なんか世界救ったんでしょ？」

「ぼくものんびりしたいなあ…あの島は魅力的だ」シユウジもそうだとはいっています。

ヒゲマンしばらく黙る。ニヤアンがたちっぱなしでつらそうなのでどこか座れる所で話そうと提案、豪華絢爛なエントランスのソファでちょっとゆっくり。険しかったニヤアンの顔が緩んでホッとした。コンシエルジュみたいなお姉さんが冷たい飲み物を差し出してくれた。

「ニヤアン大丈夫？」「うん、ごめんね難しい話してる最中に腰が楽になったよ」とニヤアンニヤアンには今2kgくらいの小さな命と羊水がみっちり詰まっているんだからね！そこらへん気を使ってほしいなヒゲマンはさあ。

とコンシエルジュさんが呉れたオレンジジュースをチューチュー飲む。

「もう怖い思いをしたくない」とニャアンは怯えていた。そりやそうだ。戦争ごっこなんて二度とゴメンだ！

「連邦の動きは我々で封じます。早めに式を挙げてしまいましょう」

「式の後には？島に住んでいいの？」

「ボクもあの島がいいなあ」シュウジはのんびりしている。

「危ないようでしたらちよっとお引越しも考えないといけませんね」ヒゲマン

「引越すってどこにさ？」

「まあ頭の片隅に入れておいてください。サイド3になりますね。ズムシティが貴方を歓迎します」

「——ズムシティ！？ジオンの首都じゃん。悪の秘密結社めいた公国庁舎をネットで見たことある！？あんな所に住むの！？」

「まあまあ…難しい話ばかりが続いて申し訳ありません、あなた達二人はこれから幸せになるですから明るい話をしましょう。式の準備ですよ」

ヒゲマンしばらく黙り込むと謎のスーツ軍団が私達をとりかこむ。ヒゲマンはアイサイン

「お願いします」

「『おねがいします』ってナニサ」思わずつつこんでしまった。

「ドレスを着るにもサイズを測らないといけませんよマチュくん。ウェディングドレスはオートクチュールですからね、太ったり痩せたりしないでくださいね」

オートクチュール：一点物じゃん。よくネットの動画でモデルさんがキャットウォークで歩いている時に着てる奴じゃん。パリコレ！？

「採寸しますので別室へ」と誘われるようにどこかへ攫われていくシュウジとわたし。もう拉致じゃん！

ヒゲマンはニヤアンと二人。エントランスにいた。

「幸せですか？」と聞く

「はい、とても幸せです。赤ちゃん…絶対産む」

とニヤアンは強く答えていたそう。黄色い瞳に宿る新たな命をヒゲマンも感じていただろうなあ。

一方わたしとシュウジはやたらめったらメジャーで測られまくっていた。身長、足の長さ腰ま

わり。胸のサイズから頭のサイズ。指のサイズまで全部だ。

「指はなんで図るんですか？」とスーツのお姉さんに聞いてみた。

「指輪？ いらなんでしょうか」とサッパリ目に答えた

…ああっ！ 指輪ね。指輪大事だわ。結婚指輪じゃん。はだかの薬指とは卒業だ。

「宝石とかいらなんでしょう。普段からつけていられる指輪にしてください」

と思わず口に出てしまった。

「金属かぶれとかありませんか？」とお姉さん。

「ありません、ピアスもカブれた事ありません」と正直に答える。

「ルナチタニウム製のリングだとシャリア様から伺っています」

「なにそれ？ おたかい奴なの？」

「ガンダムに使われている軽合金だそうですよ、軽くて丈夫で指輪にぴったりだと」
ガンダムのきんぞくう？ なんかさげえヤバそうじゃん。

——ジークアクスには感謝している。わたしの我儘を全部聞いてくれたから。

はじめて軍警と斗（たたか）った時も。

はじめてシュウジとクラブでマブになった時も。

シイコさんに殺されかけた時も。

ニヤアンを乗せて、護ってくれた時も。

大気圏を単独で突入した時も。

シュウジがどうにかなくなってしまった時も。白いガンダムが出てきた時も。

全部、ジークアクスが護ってくれた。一緒に斗ってくれた。あの腕（かいな）に抱かれてわたしは前に進むことができた。

あのジークアクスの肌触り。シュウジとニヤアンとすっぽんぽんで寝そべった時は冷たくて気持ちよかったけど。コクピットに座っている時はどこか、暖かさを感じたあの金属が。指に宿るんだあ。うれしいなあ。ジークアクスとずっといっしょ。

そう考えると多幸感でいっぱいになった。

どうやら薬指のサイズは6号らしい。ちっちゃ！でも指の型を取ってオーダーメイドで作るらしい。

：そういえばウェディング系の○でカップルで指輪づくりやってるの見た！木の枠に指輪をハメてトントン金槌で叩いている様子が映像に映っていた。ちょっとうらやましかった。やりたかった。

「指輪づくりってわたしとシュウジじゃできないですか？」聞いてみた

「ルナチタニウムってすごい固いらしいですよ」とだけ返事が帰ってきた。

当たり前だよな。わたしを大気圏の摩耗から護ってくれたガンダムの皮膚であり骨だもんな、シュウジの事もずっと護ってくれた大切な金属ちゃん。素人に加工は無理だろうな。

そんなこんなで採寸タイムは終了

「1週間後には出来上がってますよ。また着ますので袖通ししましょうね」とお姉さん

「1週間でできるの?!」マチュ驚愕。

「この船に材料もありますし工房もありますからね。リングもドレスもティアラもご用意いたします」お姉さん淡々と答える。

…至れり尽くせりだなあ。ヒゲマンがここまでしてくれるとは思わなかった。

「おつかれさまでした」お姉さんが優しく送り出してくれた。シュウジも採寸が終わったようで廊下にはっぱり出されていた。

「すごいね、からだじゅう調べられたよ」とシュウジも疲れた様子。なんだか様子がおかしい。服が違う！ツナギじゃないシュウジはじめて見たかも！

ダークカラーのジャケットに暖色の「シャツ」。ノータックのスラックスの裾は2つ折りされている。厚手の白い靴下が覗き見えていて「チップ」が光る靴がおめ見てしている。

なんかデキる感じの旦那さんって感じた。SZのの広告で投資話を持ちかけている怪しい男の人っぽい感じもする。とにかく新鮮なシュウジだった。ちょっと前までキ○タマの裏まで虫に刺されて死にかけていた男とは思えない。

「似合っているよシュウジ♪」思わず声がうわずってしまふ。

「なんだか落ち着かないよ…せめてブーツは返して欲しいなあ」とシュウジ

「シュウジのブーツちよっとおってたから替え時だったのかもね」

「ボクは無味無臭さマチュ、なんかシューズは靴底をあたらしくしてくれるらしい」

無味無臭な訳ないじゃん。わたしは毎晩、獣のように襲われている身だけど、シュウジの獣欲は匂いでわかる。首筋のあたりから「おとこのこ」の匂いがしてくる。絶頂の果てにでてくる体液も栗の花の香りがする。栗の花の匂いなんて嗅いだ事ないから、正直わからないや。とにかく若々しい青葉の香りと言ったらない。シュウジは匂いがする男の子だ。汗臭さも好きだし石鹸の匂いがするのも好き。シュウジの全部だいすき。おならとかは好きじゃないけど……そういうばシュウジのおならって聞いた事ないな。毎晩一緒に寝てるんだけどな、まあ、おならの話はいいの。「シュウジはシュウジの匂いがしているよ。安心して、シュウジも私達と同じ人間だよ」わたしは背伸びしてシュウジの頭を撫でる。

「そうだといいんだけどね、ありがとうマチュ」
とシュウジもわたしの事を抱きしめてくれる。

唇と唇、目と目と手と手。神様は何も禁止なんかしてない——愛してる。
してるわ。ここ公共の場だからねシュウジ！キスは禁止。

お預けを食らった唇は宙に浮き。

「ニヤアン達の所へ帰ろうよ」というシュウジの言葉で豪華客船内を歩く。客船内は広すぎて迷

子になった。三十分ほど彷徨った末。

（「こつちですよ」）というヒゲマンの導きで無事エントランスへ帰る。

コンチとハロとニヤアンがお出迎えしてくれた。

「式は来週でいいですね」とシャリアが言う。

「いつでもいいよ、私達ヒマだし」

と答える。まあ島で毎日のんびりしているだけだしね。

「吉日でおねがいします」とシュウジ。

きちじつ：なんか聞いた事あるな、カレンダーに書いてある奴。ハレの日とケの日があるっておかあさんが言ってた気がする。おかあさんも式に呼びたかったなあ。

「じゃあ12月〇〇日に執り行います。灯台の修繕工事はそれまでに行いますのでよしなに」
すべてヒゲマンの予定通りに動いている。まるでウェディングプランナーだ。

まあいいや。難しい事考えなくていいし。ゼ○シイ買う手間が省けるってもんよ。

「おうちにかえりたいね」とニヤアン。えっもうそんな時間!?

「オソトマックラ！オソトマックラ！」ハロが吠えている。コンチが今、午後7時半である事を

教えてくれる。やっぱもう夜じゃん。

「とまっていこうか？」とシユウジが言う

「そうしてください。豪華客船で宿泊なんてそうそう味わえるものじゃありませんよ」

ヒゲマンは優しく言ってくれる。

「ごちそう食べたいなあ」とハラヘリムシ。自重しなさいよここまでご丁寧に扱ってくれたんだから。ニヤアンのお腹が「ぐう」となった。わたしのお腹もペコペコだった。

「食事は用意していますよ。簡単なビュッフェですが」ヒゲマンはナイスな男だ。惚れる。

その夜、私達三人は産まれて初めてビュッフェなるものに出会った。食事がズラッと並ぶ中、好きな物を取っていいらしい。ステーキなんて眼の前で焼いてくれる。コロニーでも味わった事のない会食であった。場違いな格好の少女二人とビジネスカジュアルな少年一人がポツンとビュッフェ・ダイニングを独り占め。

「エグザベクさんと出席したキシリア様の晩餐会はこんな感じだったな」とニヤアン。

「慣れてるの？ニヤアン」

「緊張で何も食べられなかったよ。お酒も飲めないし、エグザベくんはオトナ達の接待で大変そう、ジオンの偉い人の目が怖かった…みんなわたしを蔑んで見ているように感じた…イヤだった」

ニヤアンは淡々と語る。ニヤアンはエグザベくんのお嫁さんであるからそういう催しにも呼ばれる事があるみたい。グラナダでのお話らしいから詳しくは知らない。けどあまり善き目でニヤアンを見ていない事だけわかった。

「けど、ここは安心するよ。マチュもいるし、シュウちゃんもいるし、食べよう」

とニヤアンはサラダからパクパク食べ始める

「そうだね、いただきます」と取ってきた食物どもを咀嚼し、嚥下する

「お肉はおいしいねえ…牛さんに感謝しないと」とシュウジはステーキを随分とたいらげていた。取り皿も全体的に茶色いというか炭水化物とタンパク質ばかりであった。

「野菜も食べなさいよ！島じゃ生野菜貴重なんだから」とわたしは野菜中心に食べる。エビのスープをフォカッチャ（イタリア風パン）で掬ってたべる。こりゃおいしい。

しぶしぶサラダを取りに行くシュウジ。山盛りのクレソンをパクパク食べ始めた。

「うしさんの気分だよマチュ」

その姿を見てニヤアンと二人。笑った。

ステキな夜だった。海を眺めながら、三人楽しんで過ごした。きっとヒゲマンがくれたステキなバカンスなのかもしれない。新婚旅行は行きたいけど：「連れて行ってくれ」と言える身じゃないから。この一夜を新婚旅行という事にしよう。ニヤアンもいるし、幸せだわ！

ほんとうにこの海の底に潜水艦が蠢いているなんて想像できないくらい静かな海であった。遠浅が続くサンゴ礁に出来た環礁の島。潜望鏡の変わりに南十字星が見える。

ステキな夜だった。

ここで終わらない。部屋はシュウジとわたしの部屋とニヤアンの部屋。しかし、どう考えてもスイートルームだった。ホテルの部屋に応接間いらないだろ。ってくらい大きい広間とベッドが5つもあった。まあ使う部屋はベッドルームしかないんだけどね。

冷蔵庫にお酒があった。シャンパンなのかな？なんか高級そうなやつ

「開けてみよっか？」

「シュウジお酒飲めるの？」

「飲んだことあるけどあまり美味しいものではなかったな」

あのハラヘリムシがそういうのだから、美味しいものではないようだ。家でおかあさんやおとうさんが飲んでいる姿を見たことはない。ニヤアンは無論妊娠中だから飲めないし。

「おいしくないならいいや」とミネラルボトルを手にする。

「それに、ボクたちまだ18歳なんだよ。お酒は二十歳と国際基準で決まっているらしいよ？」
シュウジがしげしげと言う

『お酒は二十歳になってから』たしかにコンビニとかでよく聞く言葉だ、火遊びで飲んでみようなんて考えた事がないので興味はなかったけど。二十歳かあ…2年後かあ

「まあお水でいいじゃん。お水が一番健康的だよ」

とシュウジにミネラルウォーターのボトルを手渡す。

「あまりサマにならないけどさ、これで乾杯しようよ」

「何に乾杯する？」

「もちろん私達の門出に乾杯だよ…やっぱりペットボトルじゃ淋しいかなあ」

「マチュと一緒になんでもステキに感じるよ。乾杯しよう」

無機質で産業的すぎる石油加工製品たるペットボトルを二人。交わす。

これが新婚旅行とはね：まあシュウジと一緒だからいいかあ。

その夜。大きなベッドの中で婚前交渉の限りを尽くした。互いに愛を啄みながら体液を交換する作業。作業なんかじゃない愛の証を立てる行為だった。

さて、婚前交渉なんて考えた事もなかったな。シュウジとイズマコロニーの隠れ家で楽しく暮らしていた頃から身体の繋がりはあったし。別に神様も聖書も信じてないから。清らかな身である必要もなかった、まあ、シュウジと出会う前はステキな旦那さんに巡り合ってちょっと乙女に初夜を過ごすのかな？と思ったけど。眼の前のシュウジのシュウジにメロメロな自分がいる。

なにより、キラキラがヤバイ、ヤバいのだ。翠色の世界がわたしの脳ミソを絶頂させてくれる。シュウジと一緒にいるだけで幸せなのだ。

事後、ちょっと聞いてみた。

「シュウジ、婚前交渉っていい事なのかな？」

「ボクたちもう結婚しているんじゃないったっけ？」とシュウジはケロっと答える。

「そうだった、忘れてた。結婚してるんだもんね：わたしたち」

「そういう事だよ。僕は好きな人と結ばれるのに作法は必要ないと思っているよ。略奪婚とかはいけないかも知れないけど。お互い愛し合ってるなら無作法に繋がりが合う。そして番になる。人類は霊長の長と言ってるけど、性愛に関しては動物と同じなんだよ」

シュウジが語るとまたサマになってる感じがして憎らしい。

「わかった、まあシュウジとは繋がりがなさだからね、結婚サイコー。お風呂入ろう。なんかでっかいお風呂がすごいらしいよ。」

スイートルームのお風呂はでっかく、泡が出てくるすごい仕様だった

シュウジとわたし、二人で入ってもまったく狭くない。けど、抱き合って身体を重ねるように湯を浴む。

これが新婚旅行のかわり、あとは何もいらないや。

マチュビームその⑦

前回…シユウジとの結婚式。当日になってしまった。

ここ一週間。島の向こうではなんだかトンカチの音がガンガンと聞こえてくる。島の灯台を直しているみたいだ。豪華客船から無事島に戻ると重機のキャタピラの後が砂浜を荒らしていた。綺麗なサンゴの白砂を汚すなよなあ…まあ私達との挙式の為にあのボロ灯台を直してくれるんだからありがたい訳だ。

もう一つ、ニヤアンの明るい声が電話口から聞こえる。

「帰って来るのですねマチュもシユウちゃんも元気だよ。もちろん赤ちゃんも。待っています」
電話口からは橙色の声色が聞こえてくる。

「『あなた』いつもありがとう」そう言って電話が切れた。
エグザベくんが式に出てくれるらしい。

ジークアクスでコロニーを暴れまわり。私達を破片で殺しかけてかつ、改札前でわたしのクラブ参加を阻止したナンパ野郎にはあまりいい思い出はないけど、ニヤアンの旦那さんとなれば話は別だ。エグザベくとニヤアンの愛物語はわたしのちっぽけな頭じゃ綴りきれないくらいの大ロマンスだった。足繁く島に通うエグザベくんの姿は微笑ましかったし、その姿を砂浜で待つニヤアンは幸せそうだった。また別の機会に話せたらいいね。とにかくニヤアンはエグザベくンを好きになっちゃった。

「エグザベくん？」

「そう、元氣そうでよかった」

「エグザベくんも式に出るの？」 「うん、よかったねマチュ」

「うん、祝ってくれる人は多いほうがいいじゃん」

「そうだね」とニヤアンは蛋白に返す。

「ニヤアンはうれしくないの？エグザベくん帰ってくるんだよ？何ヶ月ぶり？」

「二ヶ月ぶりかな、まだこんなにお腹大きくなかったな」とニヤアンは膨らんだ羊水袋を撫でる。
新しい命のゆりかごだ。

「うれしい、うれしいよ。けど帰ってこなくてもあの人とわたしは結ばれている……んだと思う、シユウちゃんやマチュミたいに難しいことはわからないし、あの方は『キラキラ』が見えない、けど何かが結んでくれている。それだけで十分」

そう言ってニヤアンは胸元にきらめくアルミ製のプレートを指で撫でる。グラナダ部隊に配属された時のドッグタグ（標札）だ。三日月のチャームがグラナダ直属部隊である証拠らしい。ニヤアンはキシリア様に従えていた頃の話をする時に、ちよつと雄弁になる。

「あの方は不思議な人、ちよつとよくわからない」

ニヤアンはエグザベくんの事を「あの人」と呼ぶ、どこか他人名義であるが近い仲をも感じさせる不思議な呼び方だ。

「でも好きなんでしょ？」 いじらしく聞いてみる

「うん」 静かにニヤアンは答えた。ニヤアンはエグザベくんの事が好きだ。

その証拠が今ニヤアンのお腹の中でスクスクと育っている。それだけでわたしは幸せだ。ニヤアンが幸せになれた、それだけで十分です。

……いやわたしも幸せにならないといけないじゃん。式はどうなったの？

毎日トントンと騒音が聞こえるが、ジェット機の爆音は消えた。

白いカタツムリ。ドン・エスカルゴとかいう連邦の飛行機は飛ばなくなった。

「期限付きの休戦協定を結びました」とヒゲマンから連絡があった。

式まであまり時間がない事だけ知らされた。どうなるんだろう。

結婚式自体は一時間もしない内に終わってしまうという。

神聖な数十分までの時の刻みは短い。

マチュビームその⑧

宇宙世紀0086 某月某日。大安吉日。いつもと変わらないなんて事のない朝を迎える。

強いて違う所を言うなら、シュウジとの愛を確かめ合う契りを交わす。それだけの事だった。けど一生忘れない。大事な日になる、そういう日になると思っている。

体調万全。朝からお通じ、調子がいい。シュウジとの性交渉はしなかった。

新婚前夜気分を味わいたかったし。夜通し愛し合って。結婚式当日、目の下にクマが出来ている新郎新婦なんて恥ずかしいなと思った。だから抱き合ってキラキラを見るだけで夜を過ごした。いつもキラキラの中ではおしゃべりなシュウジだけど、言葉数が少なかったのを覚えている。シュウジでも緊張する事あるんだ。きっと緊張している。顔には出さないけど緊張しているんだ。翠色の海を、双り泳ぐ。「もっと自由に泳ぎなよ」とシュウジにハッパをかける。式の前日にこんなにガチガチになってたらきつと当日なんて大変な事になるだろう。まあそういうシュウジの姿も見てみたいけど、わたしとしてはいつもど通りのシュウジに立ち会ってもらいたい。だから

緊張しないでシュウジ。

「そうだね、キラキラの中では自由じゃないとね」

とシュウジが答える。よかった、いつも通りのシュウジだ。

そんなシュウジがベッドから起きる。

「おはようマチュ」

いつもの挨拶が帰って来る。うれしい、特別な日だけど今日も明日も明後日もわたしとシュウジにとってはなんてことない一日であつて欲しい。

ちよつとシュウジの様子がおかしかった。ギコチない様子でトイレに行き、用を足して、手をちゃんと洗っている！いつもはトイレに入っても手を洗わない事で有名なシュウジが手を洗っている！「これは儀式的なものだよ、おしっこの後の手洗いなって水の無駄だよ」と言い切るシュウジがなんか弱ってる。様子がおかしい！大きい方だとちゃんと手を洗うシュウジには衛生面でのモラルが残っていた。

シュウジを見つめているとずっと手を洗っている。

「シュウジィ？」

洗面台で手を洗うシュウジを覗き込むと。震えていた。何かにおびえているかのように震えていた。シュウジは緊張していた。あの、いくつもの修羅場を乗り越え。世界線を股にかけるシュウジが震えているのだ。

「大丈夫だよ、シュウジ大丈夫」

わたしは後手でシュウジをだきしめる。本当は頭も撫でてやりたかったけど、シュウジって背が高いじゃん、ニヤアンより小さいけどさ、チビのわたしにしたら、結構高いんだよ。シュウジの頭まで手がのびない自分が悲しかった。

こんな時、シュウジが震えている時、支えて上げる存在になりたかったなあ…今からシュウジの奥さん「およめさん」になるんだから、支え合う存在になりたかったなあ。けど手が届かないや。困ったなあ…もうちょっと大きく産んでほしかったなあおかあさん…

「ごめんね、ごめんねマチュ」とシュウジは濡れた手でわたしの手に手を重ねていく。震えが次第に止まっていく。よかった、わたしという存在でシュウジが落ち着いてくれる事が、何よりうれしかった。支えられるんだ。シュウジの事。うれしいなあ。

弱っているシュウジを眼の前にわたしは変な事を考えてしまうのであった。

——そう。——『およめさん』っていいなあ…

お嫁さんっていいなあって本気で思い始めている自分がいた。

だって弱っている旦那さんを支えてあげられるんだよ？すごくない？

これがもし、「パートナー」という横文字だったらどうだろう。婚姻関係とかはないけど互いにイーブン、対等な関係であるパートナーであつたら。

きっと必要以上に愛を注げないと思う。いま、わたしがシュウジを支えているのは『愛』なんだと思う。キラキラとかゼクノヴァとかミノフスキー粒子がどうたらってヒゲマンやシャアさんが言うけど。そういう話じゃない。男と女という小さいお話だと思う。

「パートナー」じゃなくて「婚姻関係」婚姻届で紐づけられた夫とおよめさんという関係だから、きっと支えられるだと思う。尻に敷きたい。という訳ではない。

これがもしヒモ男だったら別だと思う。ヒモなんて飼った事ないからわからないけど。

男を支配して喜んでもうような関係だったら、きっとこんな気持ちにならない。

庇護欲でもない。そもそも、わたしに母性があるかわからない。

とは言ってもシュウジはヒモみたいな存在だ。パトロンがいないとナニもできない芸術家だ。

しかし、ガンダムに乗せるとピカイチで世界線を跨いで飛んでいた男だ。

経済活動では何も産んでいないが、すごい男なのである。ヒモじゃないヒモじゃないし、私はシュウジのラクガキに『キラキラ』以外の美的センスを見いだせないから芸術家を飼うパトロンさんにはなれないと思う。もうちょっと学校で美術の勉強しておけばよかった。シュウジのラクガキも美術の一つであるって中学の参考書に書いてあったなあ……

随分と話が反れてしまった、とにかく夫婦である事が必要なの！友情よりも愛情よりも固い絆で結ばれている事が重要……なんだと思う。今日はそれを確認するための儀式に過ぎない。

シュウジと手と手を交わす。するとシュウジのこわばりは緩やかに柔らかくなっていく。

「ありがとうマチュ」とシュウジ

「いいんだよ。わたしだって怖いよ『けっこんしき』」

「マチュはあれだけ式を望んでいたのに怖いのか？」

「遠くにある願いであったから怖くなかっただけで、眼の前にあると怖くなっちゃた」

「おんなじだね」

「おんなじ、どうしてだろうね」

訝しむ。ちょっと誓約して指輪のやりとりするだけなのに。ちょっと緊張している…結構緊張しているかもしれない。シュウジの緊張が伝染（うつ）ったかもしれない。

「周りの目とかかなあ…ニヤアンとエグザべくん位しか参列者はいないけど」

「これは文字通り儀式だよイニシエーションだよマチュ、何事もなければすぐ終わる」

「そうだね…なんか式なんて数十分みたいだね」

「その数分から僕達の永遠が始まるんだ…離婚も相互同意がないと成立しないからね」

「やめてよ結婚式早々に離婚の話なんて！」

ちょっと怒った、わかって欲しい。シュウジ時たまそういうズケズケした所ある。

「僕はマチュを手放したくない。ずっと傍にいてほしい。これは人生という単位ではなく、100年、いや1000年単位だと思って欲しい」

「そんなに長生きできないし」

「遺伝子単位で愛し合おうという事だよ、相互同意がなければ離婚は成立しない。僕は一生、いやそれ以上の歳月をかけてマチュを愛してあげる。それだけだよ。僕から離婚を届ける事はない」

随分と遠くの話をしている男だなあ：私の旦那さんに相応しい一言だった。

「その台詞、式の最中に聞きたかったなあ」とボツリ。

ここは式場でもなんでもない、南の島の小屋のさらに奥にある脱衣場兼洗面台の一場面にすぎない。遺伝子がどうか、式の最中まで取っておいて欲しかったなあ。なんでそういう事考えないかなあこのハリヘリムシは！

「台詞じゃないよ。僕の願いだ。遺伝子レベルで愛し合う『番』になるのだからさ」

「もう戻れないよマチュ？」

マチュ沈黙。

「怖くなった？」

心はすこし迷ったけど、口ではすぐに解答する。心ではなく、肉体が動いていた

「怖くない！！！！」

元氣いっぱいに叫んでみせた。リビングでのんびりしていたエグザベクんとニャアンがびっくりにしてこっちに来た。

「元氣なマチュがだいすきだよ」

シュウジはそうとだけ言ってくれた。

挙式前のこんなやりとり。小さいやりとりだったが。幸せだった。

遺伝子レベルで『愛』って奴を刻んでやりますか！

太陽系第三惑星『地球』旧赤道ギアナジオン租借地、某島。

下半期だというのに午前七時前にはもう東から南へ昇ろうとしている。

不気味な静寂が流れた。

かくしてマチュとシュウジにはそのいちばん長い日が始まろうとしていた。

マチュピームその⑨

シュウジと私が洗面台でイチャついてる頃、エグザベくとニヤアンはもう起きていた。

というかエグザベくんが島に帰ってきた。つい一昨日まで宇宙で外洋任務についていた男であり、ニヤアンのステキな旦那さんであり。お父さんになる事を約束された男であった。ニュータイプとしてはポンコツらしいけど。ニヤアンが好きになる理由がなんとなくわかる実直なナンパ男であった。

そんな二人の話を始めたら長くなる。つまり私の式の為に地球に帰ってきたのだ。ニヤアンも嬉しかった。軍の行動というのは機密に関わるので、エグザベくんの寄港日も地球へ帰ってくる日もわからない。ニヤアンはきっと出産にも立ち会えないという事を知っていた。だからこの再会は濃密なものであって…ニヤアンとエグザベくんについてはまたの機会にお話しようと思う。

「シュウちゃん、マチュ。ごはんできてるけど…」とニヤアン

トーストが焼きたい匂いがする、エグザベくんは朝餉を済ませてリビングでのんびりしていた。

検閲によりスマホでは見れない地球圏のニュース番組を見ていた。

「おはようマチュくん」

「おはようエグザベくん」

なんて事ない気さくな挨拶。あのア・バオア・クーでの紛議と称される殺戮の宇宙、もしタイミングを逸していたら殺し合いになっていた男と会話しているのだから不思議である。

このナンパ男がああヒゲマンを倒すんだからねえ世の中わからねーわ。けどそういう強さはありそう。

「シュウジくん、マチュくん。おめでとう」

改まって言われるとなんだか恥ずかしいなあ数少ない参列者の一人から言われるんだからまあ貴重な一言だ。

「ありがとうエグザベくん」「ありがとうエグザベくん」

5歳も年上の男性を「エグザベくん」と呼んでいいのだろうか？ニヤアンですら最近まで「エグザベ少尉」って呼んでたのに：お腹に赤ちゃんできたの分かってから「エグザベくん」呼びになった、なったよ。

——もしくは。

『あなた』

そう呼んでいる。夫の事を「あなた」って呼ぶのは最高に夫婦してる、うらやましい。

エグザベくんがいない時でさえ「あの人」って呼ぶからねニヤアン。完全に奥様だ。

飯事遊びじゃない、完全なる飯事が繰り広げられてた。

「ニヤアン達も挙げなよ式」

テーブルへ腰掛ける。朝食はグラノーラとパン半分と決めている。生野菜のサラダを食べたいのだが、離島における生野菜。かなり貴重である。冷凍保存が効くブロッコリーとかはいいけど、まあグラノーラは腸にも優しいしビタミンも取れるだろう。

シュウジは毎日ドンブリ一杯食べる。しかし今日は式がある、ウエストが膨らんでスーツが入らなかったら肝心の式も台無しだ。

自制するようにこのハラヘリムシに言う

「ぼくはやる気を出す為におなかいっぱい食べたいけどなあ」

とこぼすが

「パン二枚までは許す」

とニヤアングがよそつてくれた小盛りのグラノーラと1ガロン入りの牛乳を手渡す。

地球の牛乳は紙パックじゃない。無機質なプラスチック容器に入っている。量もガロンだ、ガロンなんて聞いたことない単位だ。容器もゴツくて、学校の掃除やシュウジの部屋で見た業務用洗剤みたいな容器に入っている。シュウジがいなかったら確実に賞味期限以内に飲みきれない。

「これだけじゃ式の最中バテちゃうよ」

「シュウちゃん？披露宴って程じゃないけど昼食会でケーキ出るんだよ？ケーキ食べたくない」

「たべたい、朝ごはんもケーキも食べたいなあ」

シュウジは欲しいものは手に入れるほしがりさんだ。

シュウジは牛乳で食べているが今日はおなかを壊したくないからヨーグルトでグラノーラを食べる。

シュウジの心配ばかりしているが、私こそウェストはかなり気にしているので小盛りのさらに

半分の量を食べる。ヨーグルとはカレースプーン3杯程度。

昨日の晩、ウェディングドレスが完成したので袖を通した。まあ袖なんかないんだけど。

完璧だった。わたしのボディラインを完全に縫うように仕上がっていた。クラブの時に着いたノーマルスーツのようにびったりだった。こりゃ体型維持に努めていて正解だったなあ。とシゲゲ思ふ

昨日の晩にヒゲマン達を乗せたでっかい船が到着。客船じゃなかった。どうみても強襲揚陸艦であった、「ソドン」じゃん！

なんか連邦とジオンがバチバチになりそうなのこのジオン租借地にでっかい戦艦でやってきて大丈夫なの？って不安になったけど。ヒゲマン曰く

「これくらい見せとかないと。連邦に何をされるかわかりませんからね」との事

独房と着艦ハッチしか知らないソドン艦内でウェディングドレス試着。シュウジやニヤアンと一緒に当日の流れを教わる。島のボロ灯台はまあボロ小屋からリノベーションされた程度に改装され、式に不釣り合いではない様相を見せていた。トイレが綺麗になったのマジで大きい。便座に穴が空いていて下から海が見えるというダイナミックすぎるトイレからかなり進歩した。

そこで式を挙げるのだ、わたしは幸せものだ。

ヒゲマン達はソドンで寝泊まりしている。どうやら何人か来賓がいるらしい。ダレだろう

「エグザべくんもニヤアンも式挙げなよ？絶対楽しいよ？」

「うん、挙げるつもりだよマチュ」とニヤアン

「挙げるよ。僕もニヤアンも孤児だから誓いを立てる両親もいなければ保証人はいないけどね」

ここでスペイン系ドイツ人である複雑な経緯を持つエグザべくんに欧州の婚姻事情を教わる。婚姻には男女両名の両親の承諾が絶対必要でそれがないと婚姻として認められないそう。

ちなみにそれはフランスの例で他にも諸国にいろんな制度があるんだって。地球じゃまだ同性婚が認められてなかったり、まあ複雑らしい。…と言われまして私もニヤアンもスペースノイドですけどねえ？

「シユウジも両親いないよ？わたしもおかあさん…いるけど式に呼べないし。保証人は私達がなつてあげるよ」

「ありがとう」ニヤアンは答えた。ニヤアンの掌はエグザべくんに握られていた。

「ほんとうに式を挙げるんだよ？」とニヤアン「ほんと！？」と浮足たった声が出てしまう。

「もちろん挙げるさ、ただし大掛かりでね…法王がご出席される国家単位の式になるみたいで」
「法王ってシヤアさんの妹？」公然の秘密を暴露してしまう。ジオン法国、法王アルティシア法王は赤い彗星ことシヤアの実妹である。シヤアもシロウズも仮の名前でしかないらしい。なんとか？レム・ダイクン？って名前らしいけどその辺の話はいいや！

「わたしはこの人と一緒になれるなら細やかな式で十分なんだけど」とニヤアン
「それを国家が許さないんだ。ニヤアンも僕も一応本国じゃ英雄だからね」

今はニヤアンの寝室でナフタレン（防虫剤）に包まれているニヤアンの軍服。エグザベくと同じ様に「十字勲章」が飾られる、すごい勲章らしい。軍装する時や公的な式典に出る時、その勲章絶対つけなきゃいけないみたい。「エグザベくとジフレドちゃんくれた立派なバッジなんだよ」ってニヤアンが誇らしく言ってたっけ？キシリア様に想いを馳せる時にこの十字勲章を見つめるらしい。

勲章は普段、ニヤアンの化粧棚の一番奥で格式高いジュエリーボックスの中に眠っている。

「君たちも世界を救った英雄だ。いや君たちこそがこの世界を救った英雄なんだよマチュくん、それにシュウジくん」とエグザベくん

「僕が救ったんじゃない、マチュが救ったんだよ」とシュウジはパンを齧りながら答える。

「同じようなものさ、だから君たちも国が婚姻を祝ってくれるはずだよ。ジオン全国に生中継されるような披露宴があるだろうね」

「マジで！？ジオンそんなによくしてくれるの？」

「そこまでされると恥ずかしいよマチュ」シュウジたじたじといった様子。

「ジオンに行こうねマチュ、もう戦争はいやだけど迎え入れてくれるって」

ニヤアンの声が明るい、きつといい場所なんだろうなあジオン

「イズマコロニーより古いコロニーだけど。住心地はいいよ。いつか君たちもおいでよ」

エグザベくんも続ける。なんか様子が変だぞ？

「まあ僕とマチュが決めるよ。ごちそうさまニヤアン」とシュウジが珍しく自分で下膳している。

：珍しくもないけど、たまに下膳をサポートする姿がある。上げ膳据え膳とか奥さんじゃないんだから！と思いがちでもシュウジの食器を洗っている自分に自惚れている感じはした。ニヤアンも不自然な様子はなくシュウジの食器片付けているし。これは男尊女卑とかそういうむずかしい話じゃない。きつとママゴトだ。ママゴトごっこ。ママゴト遊びなんだよきつと、けどなんか満足し

てる。たとえば今日料理当番で、シュウジやニヤアンにご飯作ってあげてさ「おいしい」って言うてくれるとうれしいじゃん。その延長なんだよ。下膳一つにとつても。下膳も料理のうち！

まことに悲しいお話をするが、シュウジは料理ができない。隠れ家時代は何を食って行きていたんだ？と不安になる位だ「リトルチャイナの飲茶、あとリンゴ」と平然と答える。

これから夫婦になるんだよ？家父長めいた旧世紀じゃあるまいし、旦那さんにも家事してもらいたい節はある。こんどからシュウジにも料理作らせよう。どんなにマズくても「おいしい」って言うって食べることにしよう。シュウジがそうしてくれたように。

のんびりしていたら

『ムム』

玄関をノックする木の音色が聞こえた。

「準備——できましたか？」ヒゲマンだった、タキシード着ていた。

「ちよつとまって今行くから！」とダッシュで支度。ドレスもスーツも向こうにあるので四者四様。ノーメイクで外に飛び出す。ヒゲマンとコモリンがエレカが迎えに着ていた

「やっほ！コモリンおひさ〜」

「オヒサじゃありません！式の時間になっちゃいますよ！」

「いいじゃん！どうせわたしとシュウジの式なんだし、時間通りじゃなくてもさー！」

「ダメです！！」コモリン厳しいなあ

かつては舗装されていたけど今は砂利で凸凹している道をエレカーが走る。式場まで車なら5分もかからない。

「緊張する？」シュウジに聞く。

「マチュが傍にいてくれたら大丈夫かな」とシュウジ

朝とは「顔つき」が違っていた。覚悟していた何かを秘めた顔になっていた。

普段は愛媛みかんの段ボールを頭に乘っているフニャフニャ顔のシュウジがちよっとキリっとしている。

「ジジジジジッ」ニヤアンに抱かれたコンチがなにか話しかけている。

「そうだね、シュウちゃん男前だね、かっこいいね」とニヤアンがコンチと会話している。

この電子音しか奏でないコンチという黄色い箱。なぜかシュウジとニヤアンとは会話できるのである。ニヤアンはコンチの言葉がわかるらしい。まあつらい時期を共に過ごしたからね

あれ？　そういえば昨晚からハロがないなあ……どこ行っただろう？

考えてる暇もなく、式場の灯台到着。飾られた白い布が風を浴びて帆のように膨らみを帯びている。小さい色とりどりの旗が靡いている。ヒゲマンの演出かな？

「あの旗なあに？」

「満艦飾ですよ、ジオン軍にできる精一杯のおめでたい雰囲気です、儀仗隊と鼓笛隊もつけてあげたい位ですが」

鼓笛隊って何だよ……スマホを手取る。街でやってるマーチングじゃん。ハズいよヒゲマン！
「パレードじゃないだよヒゲマンさあ……けど、ありがと。うれしいよ」感謝の意は告げる。

意味はわからないが色とりどりの信号機がはためく。かくして式が始まろうとしていた。

わたしとブライダルコンシェルジュさん。介添人さんが数名。あとはエグザベくんヒゲマンコモリンそしてニヤアンとシュウジとわたしだけ。両手で数える位しか人のいない。

細やかな式が始まろうとしていた。

挙式会場、これは灯台がよく見える草原だった。ベンチが数席と学校の教壇めいた台が一台、多分牧師さんか神父さんの前で誓いを立てさせられるやつじゃーん。

灯台小屋の中にはおいしい匂いが立ち込めていた。きっと披露宴の昼食だ、もう準備を進めているらしい。そして、簡単に区切られたスペースにはでっかい姿見とメイク台があった。

ほんとうに小さな式だった。村の結婚式でももうちょと派手にやりそうだが。まあこれでいい。まず着付け。先にシュウジから

「ボクは普段のボクのままでいたいけど、こういう場に出るときにはおめかししないとね。それくらい分かっているつもりだ」とシュウジはメイク室へ。

黙って待つ。いまごろシュウジは介添人によって改造されている最中だ。まな板の鯉だ。

「シュウちゃん、どんな姿で出てくるんだろうね」ニヤアン

「普通のスーツでしょ。サマになってたらいいんだけどなあ」特に期待しないで待つ。

「次、アマテさん」と呼ばれる。シュウジが戻ってこない

「あの…シュウジは？」

「お互い、着替えてから逢う方が幸せになるんですよ、アマテさん」と介添人のお姉さん。

「そういうものですか」「そういうものです」「じゃあしょうがないよね、おねがいます」とメイク室へと足を踏み入れる。三面の鏡台がわたしを照らす。こんな風景見たことがなかった、

きらびやかな「ティアラ（冠）」がメイク台へ中央に鎮座していた。

神様、わたしの話を聞いてくれますか？わたしことアマテはこの結婚式で十分です。

大仰しすぎてもいけません。細やかすぎもいけません。この結婚式がベストです。これ以上足しもせず減らしもしないでください——そう願いたくなるような神聖な時間であった。

つま先から頭のとっぺんまで。すべて整うように装飾されていく感じがとても気分を高揚させてくれる。まるで絵本の世界のお姫様になった瞬間だった。

「おひめさま」になれるんだ……こんなわたしでも。三面鏡に映る自分の姿がどんどん綺羅びやかになっていく。「おひめさま」になってるじゃんわたし！なっちまえばいいんだよ「お姫様に」

わたしはどう足掻いたって「おひめさま」にはなれないと思っていた。どんなに勉強を頑張ってもクラブを頑張ってもニュータイプになってみてもお姫様って柄じゃなかった。

だけど——なっちやえばいいんだよ『おひめさま』に！わたしは夢を叶えたんだ！

普段はナチュラル志向のメイクもガッツリした。アイラインが少女漫画めいている。リップもすごい濃い赤だった、ラメが光っているのがわかる。だらしない言葉を使ってはいけなさとわ

かっていたが、マジでお姫様だった。試着の時には味わえない恍惚とした心象風景がそこには存在した。

「ステキですよ、アマテさん」介添人たるウェディングコンシェルジュさんが囁いてくれた。

「こちらこそ…こんなステキな「お嫁さん」に着飾ってくれてありがとうございます」

恐縮するしかない。鏡の向こうにいる自分がまるで自分じゃないように見えた。

「『お嫁さん』になるのはこれからですよ、さあ未来の旦那さんにその姿を見せに行きましょう」

ハイヒールなんて履いている。履き慣れないけどドレスを引きずるよりマシだ。引きずる奴も好きだけど。まあ仕方がない。ちっちゃい軀（からだ）に白一色のドレスが撫でるようにボディラインに刻まれている。下半身は薄いレースが何枚も飾ってくれるスカートが揺れている。足のラインがちょっと見えている。恥ずかしい…この日の為にボディメイクしておいてよかった。ニヤアンとのヨガも毎日続けてよかったなあ…

鏡の向こうにも、この世界。見せてやらないと。メイク室からは直接外へ出る事が出来た。シューウジがいた。

灯台小屋の中庭。亜熱帯らしくない楓めいた広葉樹の枝葉が彼に影を刺していた。木漏れ日の中にシュウジがいた。

海と大地の色、青空と砂浜の白と彼の姿が重なった。

白無垢としかいいようがない白のタキシードに青い髪が揺れる。ドウランと言うほど派手じゃないが、軽めのメイクを施された顔はいつもの落ち着きと美貌を要している。そして、その中にわたしだけが知っている。等身大の17歳の少年の憧憬が、そこに広がっていた。

迷い無き、好漢（こうかん）がそこにはただ、佇んでいた。

お互い、ただ無言な時間が数秒ほど続く。お互いの姿をただ、見つめていた。

翠色の世界が開かれようとしていた。『キラキラ』が開かれた。

——綺麗だよ、マチュ

——シュウジもすごいよ、シュウジじゃないみたい。

——ボクはボクだよ。

——キラキラもいいけど。みんなにこの姿見てもらおうよ。

——そうだね、みんなに見てもらわないとね。誓いを立てないと。

キラキラの中で愛し合うのもいいけど、今日は別、みんなの前で夫婦になる『儀式』なんだから。キラキラなら帰ったらベッドの中でいくらでも見れる。

その時、ニヤアンもエグザベくんもヒゲマンもコモリンでさえ、ゼクノヴァの気配を感じたらしい。コモリンにも見えるんだ『キラキラ』。

「これがあなた達の愛なのですね」ヒゲマンが後ろにいた

「そうだよヒゲマン、これが私たちの愛って奴よ」「誰かに干渉される事のない、間だよ」

双り、声が揃う。

「いいのですが、連邦の気が立つのがわかります、こうも簡単にゼクノヴァを起こされたら観測も干渉も、したくもなります。ソドンからゼクノヴァの観測を確認されました」

「コロニーに穴明けたりする訳じゃないからいいじゃん」

「ボクはもう世界には干渉しないつもりだ、マチュがいるからね。この世界を大事にしたいんだよシャリア」

「わかっています。ステキな花嫁さんになりましたねマチュくん」

「あつたり前じゃん」

「マチュくんを幸せにしてあげてくださいシュウジくん」

「もちろんさアタリキだよ」

「言ってくれるねえ…まあ幸せにしてよね！」シュウジの背中をコツンと叩く。

そして、二人。手を握り合う。ちょっと緊張してるけど手汗はかいていない。

「地球上でシュウジくんを幸せにできるのはマチュくんしかいませんし、逆もまた然りです。人類全体を考えて、おしどり夫婦でいてくださいね、さあ、式が始まりますよ」

カランカランと灯台楼閣のベルが鳴り響く。白い灯台がわたしたちのチャベルだ。別にキリスト様は信じていないけど。幸せな時は宗教にあやかっておけてアンキーも言っていた。

式場。と呼ぶには小さすぎる芝生と座席に座る少なき参列者達、新緑の芝生に赤い帯めいたレッドカーペットが敷かれている。ニヤアンもいる。そしてコンチも手をふっている。ニヤアンはどこでおめかししたのか礼装めいたマタニティドレスを纏っていた、伴侶たるエグザベくと並んで座っている。エグザベくんは軍服だった、ジオン十字勲章が二人の胸に輝いていた。

「僭越ながら私が司会進行を任せました、シャリアブルです、どうかよろしく」
ヒゲマンが司会なの！？マジでッ！？まあ小さい式だから当たり前か。

どうりで今日は変な仮面付けてないなと思ったわ。彼の顔は裸であった。

「みなさま、おまたせしました。新郎新婦の登場です。拍手でお迎えください」

パチパチという盛大ながらも小さい拍手の中、シュウジと手を繋いで登壇。

スカートだしハイヒールだし歩きづらいしと思っていたらシュウジがエスコートしてくれた。シュウジに手を引かれて歩くんなんて産まれて初めてかもしれない。

「だいじょうぶ？マチュ」

「うん、ありがとねシュウジ」

キャットウォークとは言えないが、シュウジの手引で教壇前まで蹟く事なく踏破。

——これは式の後にわかった事なのだが、シュウジが手引してくれるのは人生で妊娠中と産後すぐと、この式典だけであつた。けっこうあるじゃん。なんかおかあさんになるらしいよ？わたしが？

教壇前に二人並ぶ、参列者に軽く手を降る。

「綺麗だよマチュ」とニヤアン。浜風が注ぐ灯台、風に負けないくらい大きな声で言ってくれた。うれしかった。

「ありがとーニヤアン！」と大きな声で返事をした。奥の方に知らない人も参列している。影に

なって見えないな。誰かな？ シュウジの親戚かな？ それともただのヒゲマンの部下？ SP？

「来てくれたんだ」とシュウジが呟いている。誰だろう。

「すてきな衣装ですね」

「『馬子にも衣装』なんて言わないでしょうね」牽制。

「ニュータイプ同士嘘はつけないものですね」ヒゲマン。

「もちろんだよ、夫婦にも嘘はつけない」シュウジ。

「ステキな夫婦になってくださいね。ここに細やかながらイトウ家、ユズリハ家による誓いの義を始めたく思います。盛大な拍手と祝福を！」

パチパチと小さいけど大きな拍手が崖に立つ灯台を囲むように奏で始める。

「では、早速誓いの言葉なのですが…どちらから始めます？」

まさかのフリートーク。忘れてた。事前に誓いの言葉を考えるの忘れてた。ヤバイじゃん。けどシュウジへの愛の滾りを話せばいいって事だよな。

「ハイハイ！わたしから！わたしから！」

学校の授業みたいな元気のいい挙手するのはわたくしこと、アマテ・ユズリハであった。
ノースリーブドレスだから腋なんか丸見え、なんちゅう恥ずかしい格好をしているんだ。

元気がよすぎて、せっかく介添者さんがつけてくれたティアラが地面に落っこちそうになった。

「ハイは一回でいいんですよマチュくん」

先生のようにヒゲマンはたしなめる。

「どうぞ、言葉の限りを紡いでください」

そう言われると、語りたくなっちゃうじゃん。

「わたしとシュウジはクラブで出会いですけど……その前から運命的な出会いがあって——」

台本なんてそこには存在しなかった。ブックなき、ガチトークが始まる。

「実はあの時ジークアクスとの乱闘で落ちてきた破片から私を護ってくれたのがシュウジでえ……その後、高架下に描かれたグラフィティで出会う事になりました。その間を持ってくれたのが当時運び屋だったニヤアンで、きっと私たちにとっての仲人はニヤアン、ニヤアンなんだよ」

ニヤアンの瞳がウルッと来ているのがわかった。そうだよ、ニヤアンがいないと私たち出会ってもしなかったんだよ。ニヤアンがいるから私たちこうやって愛し合えたんだよ。

ときには仲違いもした。自分勝手な理由で怒った事もある。喧嘩になりそうな事もあった。あやうく殺し合いになる所まで行った。けど今はわたしの一番の友達であり、MY LOVE である。

「ありがろう！ニヤアン！ありがとう」

きつとニヤアンもシュウジの事好きだったんだと思う。そういう感じてた時あった、けどニヤアンは愛情よりも三人の友情を取ってくれたし、なによりエグザベくんという旦那さんとお会いすることができた。赤ちゃんもいる。ニヤアンは幸せになった。

ニヤアンはいいおかあさんになれるよ。

それからまあツラツラとシュウジと私のエピソードトークを語りまくった。一緒に葱油餅を食べにいった話が初デートかな？熱出して倒れた時のほだかんぼうエピソードも赤裸々に話した。そして、さっきも触れた仲違いとすこしのお別れのお話をして――

「キラキラの中でシュウジが私にお別れを言おうとしたの、だけど――」

「キスで抱き止めました。今シュウジはここにいます。これが結ばれた経緯です、これが私たち

です」

「シュウジくんとはどうやって再会したのですか？」ヒゲマンが問う。

「ひみつ、合う時は合うもんなの。それに再会は約束されたものだからってジークアクスも言っている」

わたしは密林に苔むしるジークアクスを見つめる。あの獣のような瞳と牙が、すこしだけ光ったように思える。

ありがとう、ジークアクス。

「愛の物語でしたね。そろそろシュウジくんに代わってもいいですか？」ヒゲマン

「まだ語り足りないな！」

「いくらでも語ってください。夕方になっても日が落ちてても、朝日が登っても聞きますよ私たちは」

「…このへんでやめとくかな」自制した。

「とにかくシュウジがだいすき！およめさんになります！以上です」恥ずかしい告白をした。

「シュウジ、聞かせて？愛のおはなし」

シュウジにマイクを渡す。シュウジちょっと緊張しているのかマイクを落としそうになる。緊張しているシュウジの姿なんて多分一生見るか見ないかだ。けど今朝方の洗面台で見た悲しい緊張ではなかった。初々しい彼の顔を見るのが、わたしは好きだ。

「おはなしします」シュウジは淡々と語りはじめた。

「これは『愛』についてのおはなしです。ボクはずっと愛を求め彷徨っていましたが、いろいろな世界を旅していました。誰かの『幸せ』の為に」

シュウジはラアさんの事を語り始めた。

「誰かの幸せの為にボクは動いていました。しかしそれがエゴイズムで動いている事を知っていました。悲しかったです、不幸せな結末を迎える彼女を殺し続ける自分の存在ではなく、それがエゴだと知った時にです。歴史とは終わるまで続くゲームだと思いました。きっとマヌケなサルが始めたに違いありません。ボクの人生は恒久的だった。終わりは見えなかった。マヌケなサルがはじめた劇に付き合わされているだけに違いなんて。『昔へ戻れ』と言われても、道は一本きりしかない。毎回ラアさんが死ぬ姿を黙って見る事しかできなかった」

シュウジが語るお話はどう考えて式には重たかった。シュウジの過去はうっすらと知っている

つまり、シュウジが語ってくれる限りの部分では知っていた。

「大丈夫よ、私は今幸せだから」

声がした、やさしい声がした。南インドの香りがするオリエンタルな声色だった。

「気にする事はない、今がすべてだよ」

なんか爽やかだけどウサンクサイ声が聞こえたぞ。

ウサンクサイけど悪くはない、幸せな声がする。

後ろの物陰に見えたのはシャアとララアさんだった。数少ない来席者の一人が、ララアさんとシャア・アズナブルだった。

「大佐、シュウジくんのスピーチの最中ですよ」ヒゲマンが小言、だけど嬉しそう。

「ありがとうシャア」シュウジ謝辞を入れる。シャアは軽く会釈するだけだった。

「――そしてボクはマチュに気付かされた」

シュウジは続ける。

「ボクがどうあるべきか。どうありたいべきか。自分がどうい『立場』でどう『ありたい』のかを知る事ができた。ボクはマチュに恋をした。ずっと一緒にいたい！そう思った。だから今のボクがあるんだよ。マチュそれにみんな。ありがとう、この世界にボクの居場所を用意してくれて…本当に本当に…ララア…ララアさん…」

シュウジの瞳から、涙が溢れていた。いいんだよララアさんシュウジの事許してくれたじゃない。泣かないでシュウジ、祝い事なんだら」一喝。けど優しく言ったつもりだ。

「嬉しいから泣いているんだよマチュ。ありがとうこの世界にボクを見出してくれて幸せにする。約束するよ。一緒になろう」

「うれしい！シュウジうれしい！」

場も考えずに抱きあってしまった。一点物のウェディングがシワクチャになったって構わない。抱き合って。そして抱き合った。言葉はいらぬ。

「もう彼らに言葉は必要ないそうですね。誓いの言葉やりますか？」

「いいよ！神様に誓わなくて私たち夫婦だもん！病める時だろうが健やかな時だろうがずっと一

緒！シュウジと一緒にだ！」

「神に誓う契りはいらないよシャリア。ボクにはマチュがいる。ボクはマチュが好きだ。これほどうれしい事はない、今日はそれを再確認する儀礼に過ぎない。法的根拠を記すだけの日さ」

わたしはシュウジの事が好きで、シュウジはわたしの事が好きなの

それは何時までも変わらない事なの！今日はそれをみんなに確認してもらっただけの日」
なんて事ない日なんだ、今日がどんな日であっても、世界最後の日でもこの惑星が爆発しちゃう日でもきっと『吉日』。吉日なんだ。

「あなた達らしくていいですね。ではサクッと指輪交換しちゃいましょうか？」
ヒゲマンのいうと、絨毯からコロコロの丸い薄緑のタマが転がってくる。

「メデタイ！メデタイ！」

電子音を奏でながらヴァージンロードを転がる軽快な球体、ハロだった。

「マチュ、オメデトウ。シュウジ。オメデトウ」

遠くのだこか、誰に祝言を挙げられているような感じがした。ハ口って時々そんな感じがする。

「ユビワ！ウケトレ！ユビワ！ウケトレ」

足元まで満足げに転がった後、口が開く。中には二人ぶんの指輪が納められていた。

ペットリングという言葉聞いた事がある。飼ってる犬が結婚指輪を運んでくれるイベントだ。ハ口がそれをこなしてくれた。

「この指輪はガンダムと同じルナチタニウムできています。あなた達の絆と愛を結んだガンダム達を護った厚い装甲材の一種です。ジークアクスに、そして赤いガンダムに想いを馳せながら交換してください。悲しい斗いでしたがその斗いがあったからこそ、君達は結ばれたのです」

ヒゲマンが語る。ガンダムには感謝しないとね。ありがとうガンダム

一つの箱に指輪が2つ。入っていた。わたしのちっちゃいのは6号。シュウジのは15号だった、シュウジの掌は大きい。

指輪交換。神聖な瞬間であっただけど、あつと言う間だった。

サヨウナラ、裸の薬指。

アリガトウ、ガンダムでデキた指輪。

「ずっと一緒だ。この軽金属の輪こそ、僕達の愛の証だよ」

「ありがとうシュウジこれからよろしくね」

とだけ交わして。約束と誓いのキス。

そのまま終演してもいいのだが、一番大事な仕事。『婚姻届』にサインする事だった。

はい、わたくしことアマテ・ユズリハはアマテ・イトウとなりジオン国籍を得ます。

シュウジも初めて戸籍を手に入れたらしい。「ビックリしているよ」とサイン

晴れてスペースノイドたるジオン法国国民2名が、この地球という大地に産まれた。

婚姻なんて、この紙切れ一枚書くだけで十分なのだ。

「メデテェ！メデテェ！」とハロは叫び。拍手は鳴り止まなかった。

ヴァーシロードを二人で歩き。花束を投げた。掴んだのはララアお姉様だった。

「ララアさん、幸せになってね！」

ララアさんは恥ずかしそうに左指を見せてくれた。

キラめく物が光っていた。シャアとララアさんは幸せになったようだ。

ニヤアンがコモリンにでも渡せばよかったかな。

式はわたしの長い誓いの言葉にも関わらず40分ほどで終了してしまった。

結婚式って披露宴を含めると半日はかかるって聞いてただけど？まあいいか！よろしくね！

披露宴という名の軽い昼食会が行われた。強襲揚陸艦ソドンのキッチンスタッフが作ったすこし豪華なメニューがずらっと並ぶ。

立食式だったけど、新郎新婦と身重のニヤアンの為に椅子とテーブルが用意されていた。

真っ白なドレス、染みの一つでもつけたらオシマイだ。と緊張しながら食べていた。

貸衣装ではない。これは一点物のドレスなんだ。家に飾っておきたいくらいだ。

シュウジはローストビーフをバクバクと食べていた。

「こんなにおいしい牛さんを食べたことはない、これほどおいしいことはない」

とバクバク食べていた。タキシードにソースが染みる。まあシュウジのタキシードは一点物じゃないしいかなあ。あまりにもバクバク食べるので、ハンケチで口を拭いてやる。

夫婦の共同作業が口拭いとはねえ：

その後、小さなウェディングケーキに入刀。こっちが正式な夫婦の共同作業。

「このケーキ、まるごと食べたいな」とシュウジ

「シュウちゃんは式でもハラヘリムシだね」とニヤアンに笑われてしまった。

食事の後、わたしはララアさんと親しく会話をした。

シュウジもシュウジでシャアと軽い挨拶と何を語っていたようだ。

「お幸せに」とシャアに告げた所だけ聞き取れた。

——夕日が沈むにはまだ早い時間だったけど、式はこれにて終了。大人達はソソクサとソド
ンへ戻ってって行く。

「またね、ニヤアン」

「いってらっしゃい『あなた』赤ちゃんうむ、この星でうむから」

エグザベくんもニヤアンの別れ際はとんだ愁嘆場だった。しかしニヤアンはカラッとしていた。
エグザベくんを送り出して。夕暮れの兆しが見える砂浜を見つめる。

あの賑わいはどこへやら。みんなサッサと帰ってしまえば、いつも通りの三人が暮らす小さな島。もうすぐ人口が増える予定だ。ニヤアンのあかちゃん。

何度でも同じ事を言ってやる。それでもと叫び続けろ

ニヤアンはいいおかあさんになれるよ。そして、わたしはいいおよめさんになるんだ。

しめやかに式典が終わる。お日様は午後の体裁をなしていた。

マチュビームその⑩

前回のあらすじ…結婚式おわりました。最高でした。

「シュウちゃん？マチュ？今日は灯台の小屋で寝るから」

「「なんで!？」」突然の告白にわたしとシュウジが素っ頓狂。

「今夜はシュウちゃんとマチュにとつての、最初の夜だから」

改めて言われると恥ずかしい。

「初夜とかないから…もうシュウジの事はつま先からおしりの穴まで知っているしい」

「おしりの穴はあまり見られなくないと、ガンダムが言っている」シュウジ赤面

シュウジは恥ずかしがっているが実際そうなのでどうしようにもない。互いの秘部を愛し合う行為が毎夜紡がれる営みに欠かせなかった。本番が終わった後、互いを労り、慰め合う。それはお互いをリスペクトしている事。シュウジの蟻の戸渡りまで知っている女性はきつとわたし位な

もんだ。

きつと、ララアお姉様ですら知らないはずだ。わたしはシュウジのすべてを知っている。

「そこまでアケスケに言わなくても……けど、愛し合っているんだね」

「うん、婚前交渉の限りを尽くしてきたからね。今更新婚初夜もないよ」

「まあ肉体的繋がりは大事故だからね、互いに遺伝子を刻んでいた。それだけだよ」

「シュウちゃん……」

ニヤアンは恥ずかしそうだった。ニヤアンだってエグザベ君と夫婦相応の行為をしているからまあいいじゃん。夜のニヤアンは結構はげしいんだよ？隣の部屋からすごい嬌声が聞こえる。

「けど、特別な日だから。特別な夜を送って、私の事は気にしないで」

「身重一人をあの灯台に置いてく訳にはいかないよ」

「たまには歩かないと」

「舗装されていない砂利道歩かせるのは不安だなあ」

「心配すぎだよ」

『心配すぎ』という言葉に反してニヤアンのおなか膨らんでいた。

小さいなれど人間が一人、そこに眠っているという事のはっきりわかる膨らみだった。

ニヤアンの細い身体には、不釣り合いのその膨らみ。「慣れてきた」とは言うけれどたまにバランスを崩して転びそうになる瞬間が多々ある。だから砂浜に出る時なんかは絶対わたしとシュウジが手引きして歩いている。これからさらにお腹が大きくなる、臨月を迎える。ニヤアンはこれからなんだから、危ない目を見させちゃダメ！

陽が落ちてくる。いそいそとタオルケットを用意するニヤアンをシュウジが止めた。

「ニヤアンはここで眠って、僕達が灯台で寝るよ」

「でもあんなバラック小屋」

「灯台小屋には寝台があったらう？今日の式でもまだ残っていた」

灯台小屋はかつての灯台守が使っていた居住できる家だった。ポロかったけど。寝室が存在して眠れるように出来ていた。今回の式にあたってあのポロ小屋もジョンの人たちによって随分と直してもらったけど、ベッドも寝室も残っていたのをうつすらと見ていた。

「あの小屋にニヤアン一人泊められないよ、私たちはバラック小屋で十分」

笑っていったのけた。プライベートスペースがあつて。そこにベッドがあれば私たちにとって、

どこでも愛の棲家になるのだ。わたしたちは巢作りに場所を選ばない鳥類みたいだ。

イズマコロニーにはいなかったけど、よく「ポッポポッポ」と鳴いている鳩は、巢作りにまったく関心がないんだとか。些末な巢でも十分に卵を育むそうな、

わたしとシュウジも場所を選ばず愛し合っている。巢は作るけど粗雑でもいい。

ハトみたいなものかもしれない。

ハトのおよめさんだったんだわたし：『ハトのおよめさん』なんとなくいい響きだ。

「うん、あの小屋で二人っきりで過ごすよ。初夜なんだから、それらしい雰囲気を楽しむよ」
「それもいいね、なんかコーフンしてきちゃった！」

なんだかワクワクしてきた。ボロ小屋で二人キリ：豪華な新婚初夜とはいかないけど、シュウジとわたしらしくていいじゃん。灯台の明かりを見つめながら夜を明かすんだ。なかなかいい感じになってきたぞお。普通じゃないわたしとシュウジの生活。その第一歩がきつとこの初夜なん

だろうなあ…としみじみ思っていた。

「シーツだけ持っていこう」とシュウジはサラ（新品の意）のシーツを取り出す。結婚式準備の際に、貰った客船で使うシーツだった。

「寒くない？」とマチュ訝しむ。

「ボクとマチュで温め合うから大丈夫だよ」

シュウジはこういう事サラっと言ったのけるからたまらない。マジで愛している。

「すき…だいすき…」

恥ずかしいのに、めっちゃくちや恥ずかしいのに口に出てしまう。シュウジだいすき。

「食べ物とかは？」とニヤアン

「いらないよ。愛し合う事だけに集中したいんだ。灯台にも水道が引かれているから水には困らないね」

「お腹が空いた頃には返ってくるよニヤアン」とだけ告げた。

「すぐ帰ってきてきそうだね。シュウちゃんハラヘリムシだし」

「粘るよ。ボクとマチュにとっては神聖な時間だからね」

「餓死する前には帰ってくるよ。安心してニヤアン」

わたしもイソイソと

「そう、楽しんできてシュウちゃん、マチュ」

ニヤアンに見送られながら、家を後にする。あつという間の出来事だった。

「スマホ取ってくる」とすら言えなかった

「そんなものはいらない、ボクとマチュだけの時間だ」

シュウジが目で訴えているように思えたからだ。きつと訴えているに違いない。そう二人の時間に情報端末なんて必要ない。初夜の夜をSNSに掲載するほど承認欲求に飢えていない。

今のわたしは「シュウジに愛されている」という事で満ちていた。生理的欲求、安全の欲求どころか社会的欲求すら欲していなかった。シュウジという「愛」だけで満ち足りていた。

今のわたしにマズローの欲求段階説は通用しない。あのピラミッドをも打ち壊す愛のキラキラだけが私たちを結んでいる。この愛の欲求は底なしで、きつと満ちる事がないであろう沼であるだろう。スマホでちょっと読んだ恋愛小説も愛が満ちて終わりではない。愛という器から愛がこぼれても愛を欲する。そんな様子が垣間見えた。

わたしとシュウジの愛はそんな形では顯せないと思う。底はあるし、常に満ち足りている。恒久的な愛の宇宙を漂うのだ。きつとビックバンによりその宇宙は広がっていく。

わたしってば！何を話しているだ！？妄想ではなく現実のシュウジを見ろっていうの！

トボトボとシーツ一枚持ってシュウジと坂道を歩いていく。灯台のある岬はずっと上り坂で。けっこうしんどい。毎日わたしとシュウジは海を泳いでいる。だから運動不足って訳じゃないけどこの永遠と続くの上り坂だけはどうもなれない。まあ20分もしないうちに踏破できる坂なんだけどさ。

シュウジと仲良くお手々繋いでさ、その坂道を登っていた。とても楽しかった。

お互い無言だった。けど掌の血潮から気持ちちは伝わっていた。手汗こそ書いてないけど、お互いガチガチに緊張していた。式の最中より緊張していたんじゃないかな？

式でブーケをラアさんに投げてた時には、真南を向いていたお日様が西へ沈もうとしている。時刻は午後4時を指していた。下半期の南半球。12月の夕暮れはとても長い。

岬へ続く一本道を歩く、丘から灯台が見えてきた。

「疲れてない？マチュ？」とシュウジがわたしの顔を伺う

「大丈夫。海の風が涼しいね」

「うん、浜風は心地良いね。水面はベタ波で、風の様相を見せているけどこの浜風は常にこの島を護っている。この風が好きだよ、それに」

「それに？」

「満潮だ、今夜は満月だよマチュ」

島に棲んでいる癖に、潮の満ち引きなんてあまり考えた事なかった。シュウジはそういう所結構見ている。

「お月様：あまり見てなかったや」我の反省す。

「ボクがマチュの元へ還元（かえ）ってきたあの夜も、満月だったよ」

「そうだったけ？お月様出てた気はするけど」

おかしいなあ、あの日はシュウジと再会できてあんなに嬉しかった夜なのに。外観とかディテールとかまるで覚えていない自分がある。なんかベッドとシュウジがいればそれでオッケイって感じだった。ハイテンションだったのは覚えている。

「あの夜のマチュはすごかった、からだじゅうキスマークで埋まったよ。満月の姿とマチュの身

体が重なってとてもエロースな夜だったよ」

シュウジは深々と語る。

「そりゃあシュウジと久方ぶりに愛し合った夜だもん、燃えるよ」

自慢げに語る。全肯定とは言わないけど、わたしはわたしを肯定するのだ。そうやって生きていくと決めた。わたしの事はわたしで決めて、わたしが動かす。そうやって掴み取った平和だし、なによりシュウジとニヤアンというステキなズグと知り合う事が出来た。シュウジと出会えたのも、きつとわたしの衝動的行動からだろう。ニヤアンと友達でよかった……って本当に思える。

不気味な静寂は終わり、二人灯台への崖を登りきってしまった。

辛い事も二人で共有すればそんなに辛くない。幸せな事を二人で共有すれば二倍は幸せになる。夫婦の共同作業を結婚初日にこなしてしまった……幸せな女だなあわたし。

シュウジと話していると、辛い坂道もあったという間に踏破できてしまう。

灯台と灯台守が棲んでいた小屋が草原いっぱいに広がっている。風の影響で背の高い草木は茂る事ができず。ボロ小屋を直してくれたついでに養生してくれた芝生と土地にしかないという橙色の花が12月とも言うのに咲いていた。「エゾカンソウ」と言うらしい。

見下ろせば紺碧の断崖絶壁。遠くに咲く花々。芝生の上にポツンと立つ古ぼけたベンチ。

なんとも小説的な世界が広がっていた。「映画バエ」しそう。と考えてしまったのは自分の悲しい姿である。スマホがあればSNSにすぐ投稿してしまいそうだった。ヒゲマンと私たちだけの秘密の島なのに、バレたら南の島でのバカンス生活は終わりを告げるだろう。

「座ろうか」とシュウジ。苔むしたベンチに白いツナギ姿で座る。「草露ってなかなか洗濯で取れないから大変なんですけど!」という怒りの感情はなかった。

シュウジと二人っきりの空間。そこにあるベンチという舞台装置に酔っていた。

なんで? どうして? 今までこのベンチの存在を忘れていたのだろうか: 『エモ』とかでは済まされない美的感情がわたしの心を驚掴みにする。まるで二人の為に繕われた二人っきりの座席だった。

ちょこんと座る。シュウジが言う通り浜風が気持ちいい、ちょっとしょっぱい感じがするけど清涼な香りがする。磯臭いのは嫌いだけどこの匂いは好きだ。

崖からは古びた灯台がニョキッと寂しそうに立っていた。白い塗装はところどころ剥がれ、ヒビが入っては修繕を繰り返している左官さんの修繕仕事が見られる。蔦(つた)めいた緑

色が触手を伸ばそうとするも、浜風に煽られ朽ちてしまった枯れたツルが残念そうにその姿を残している。太陽電池を浴び、物理的故障さえなければ半永久的に光を灯す灯台が30秒に1回間隔で、私たちには見えない光を発しているらしい。夜、ポツポツと紅く光るのはそのせいだろう。

お船や飛行機の為に電波も飛ばしているらしい。ボロい割によく働いているよこの灯台。
「なんかいい感じだね」とシュウジに今の気持ちを伝える。

「そうだね、僕達だけの風景だね」と返してくれる。私たちだけの風景。そのスチールはカメラではなく眼球に焼き付けておこう。

ベンチで二人。手を繋いで外を見つめる。次第に太陽が西に落ちていくのを如実に感じる。

コロニーでは毎日毎時毎分毎秒いろんな情報が目の前に現れては消える。スマホにポップアップされるどうでもいい通知から、友達との「Zzz」まで、スマホから目を離せば外の環境は目まぐるしく変わる。クラブなんてその最たる例だ。120分の1秒。1フレームのはるか先を読み合うのだから恐ろしい。シュウジに護られながら無我夢中でトメノスケホークを振り回していた昔の自分はかなり情報にも振り回されていたのだろう。

しかし、ここはどうだろう？この世界の片隅としかいいようがない南の島。波と風とお日様く

らしいか変わるものがない。たまに嵐がやってきたり、スコール（通り雨）が時々降る程度のもので、それもだいたい余地できる。雲の早さはだいたい数40キロ。クラブにおけるその同士の相対的速度は音速の約5倍にもなる。40キロなんておっきい雲からすればノロノロ運転みたいなものだ。

しかしこういうのんびりとした時の流れは好きだ。この島に来てよかったなあと思える所は此処にある。ビーチパラソルの下、瓶入りの炭酸水なんか飲んで見せながら、何も考えずのんびりを過ごしているとあつとう間に夕方になっている。そういう日常をニヤアンと共に過ごせた。

そして、いま。そういう「時間」をシュウジと共に過ごしている。二人並んで座っていると、お日様は西へ翳りを落とし、夕日となり、いずれ陽は落ちる。

「時の刻みはあんただけの物じゃない」そんな台詞をクラブの最中に聞いた。どうでもいい。今ッ！時の刻みはわたしのシュウジの物だった。二人だけの刻みが紡がれていく。

時の刻みは私たちにはないッ！

なんて想いに更けているとシュウジが何か言いたげな様子でこちらを見ていた。シュウジの貌（かお）をジッと見つめる。

「もうすぐ夜がやってくる。暮れの明星が見えてきたよ。火星も見えるし。月も顔を出している」

「火星？火星火星って地球から見えるの？」

地球から一番近い惑星は火星だって、なんか中学の科学の授業で聞いた、けど光の速度で6年はかかる、そんな遠くの世界らしい。ジオンの人が入植しているって先生が言っていたが片道6年はかかる。随分の気の長い宇宙旅行らしい。行って帰って丸12年じゃん。

「太陽が照らしてくれたら星は見えるさ、星空が満天の日には火星どころか木星が見えたり、そういう日がある、くもりだったり星空さんの機嫌が悪い時はみえないけどね。でも金星は別だ、金星は毎日おはようとおやすみなさいを僕達に教えてくれる。惑（まど）う星と書いて惑星かなんて呼ぶけど。楽しい星達だよ」

シュウジは淡々と、ガクが足りないわたしに対して、星の事を教えてくれる。明けの明星。宵の明星は金星の事で一番おひさまという太陽光を浴びているから一番綺麗に見えるみたい。

「でも、一番綺麗に見えるのはお月様だよね」とシュウジがまとめてくれる

「そうだね、お月様が身近にあるっていいね」と頷く。

「潮の満ち引きはお月様のお陰だ、この惑星、地球の生命の源はきつとお月様にあるんだ。月面都市フォンブウンとかそういう冷たい感じではなく、地球から感じる月光と月の引力が生命を司っているんだよ…難しいことはわからないけどね」

シュウジは最後に付け加えたけど、シュウジほど世界を知っている人類はきつと存在しない。

彼はいくつもの世界を渡っていきただから。学者さんよりきつと世界って奴をしているんじゃないかな？

潮風が引いていく。ベタ波の波肌はまるで磨かれたガラスのように紺碧としている。

夕風の時間だ。海からの風が止む、ほんの一瞬であり、神聖な時間だ。

わたしたちの会話を遮る風音がなくなった。そよぐ木々の草花の音色すらしない。何も音が無い。わたしとシュウジだけが支配している世界。

シュウジは私の身体を抱きしめる。あの日と同じだ、肩に顔を乗せる。互いの顔は見えないが互いが想い合っている事は確認できる姿勢であった。

「ボクはマチュに抱かれてよかった」

「わたしもシュウジに抱かれてよかったよ。相性いいんだね私たち」

ちよつと強がって言ってみせた。相性なんていいに決まってるじゃん！シュウジだよ？

「ありがとう、この星にボクを見つけれくれて」

「そうやってマジマジと言われるとはずかしいな。けど今日はいいよ。シュウジのおはなし全部聞いてあげる、なんせ結婚生活一日目だからね」

「ありがとう、マチュ。だからマチュ、ボクのおはなし聞いて」

「いいよ聞かせて」

「月と僕らの話に戻るんだけど――」シュウジはわたしを一度、しっかりと抱きとめた後、顔を向かい合わせにして。話し始めた。真剣だった。

「毎晩マチュの胸に抱かれながらボクは月を見ているんだ。月は神秘的だからね、生命の繁栄も月が導いてくれたんだ：ボク達の繋がりが満月の夜で本当によかった」

「なんか満月の夜にはサンゴの産卵があるらしいね、この海はサンゴ礁だからいくらでも見れるんだらうけど、夜の海は怖くて見たことないや」

「サンゴと同じさ」「何なにナニ!？」

「僕達も子宝を授けられるかも知れない」

——赤ちゃん!？ シュウジちよつと気が早すぎない!？

まあ…女に産まれたからには考えていないと言え、嘘になる。赤ちゃんくらい立派に産んでやるわ!という根性はあった。

おかあさんのような母親になれと言われたら、無理かもしれない。けど、シュウジへの愛と同じ位の愛を我が子に授けるつもりだ。まだ予定。ふんわりとした予定。

「新婚初夜にもう赤ちゃんの話い？」 マチュ訝しむ

「気が早いかもしれないけど、これからの事を考えるのが結婚だよ。もう他人同士じゃないんだからね、夫であり妻である身内さ。これからマチュがニヤアンやシャリアとどれだけ仲が良くな

つてもこの『身内』という社会的つながりを共有することはできない。「家族」単位の世界だからね。ニヤアンを養子にもらおうか？重婚はしたくないかな」

「ニヤアンと私はマブだし、言っちゃえば『家族』だと思うけど、ニヤアンはエグザベくんのモノだから」

「そうだね、いいおよめさんになったねニヤアン：そんなニヤアンももうすぐおかあさんだ」

「だから：だから：」

「うん、大丈夫だよシュウジ」

「マチュ、一緒に赤ちゃん作ろう。子孫を繁栄させるんだ。僕達の子をこの大地に根付かせよう」

「いいよ、いっぱい赤ちゃん繕うね。野球チームで対戦できるくらいポンポン産んで上げる！」
「そんな事したらマチュの身体が壊れちゃうよ！」

「18歳から産み続けて18人：控えピッチャーが3人欲しいな。全員産まれるは何年後だろう：わっかないや！」

アハハ、と声が出そうなほどアツケラカンに答えた。

「それくらい、愛し合おうという気持ちがあればそれでいいんだよ」

とシュウジニツコリ。

わたしもニツコリ。うれしいね。およめさんってすごくうれしい！

「マチュとこの星に生まれ落ちて、マチュが選んだこの世界に『遺伝子』を刻める。それだけで嬉しいんだ」

「むずかしいはなし？」

「誰でもいいって訳じゃないって事だよ、マチュという「およめさん」と出会えてよかったって話」

「ありがと♪頑張るぞお！これから十分立派に『シュウジのおよめさん』になっちゃうぞ！」

海岸に向かって叫んでみせた。風の海肌は黙って聞いてくれた。シュウジ・イトウとアマテ・イトウ夫婦は未永く互いに消滅するまで愛で結ばれ、愛の限りを尽くす事を誓います！

この地球表面の7割を占める生命の源である『海』がその証人だ。

「そんなに大きな声で言わなくても」\」とシュウジは恥ずかしそうだった

「シュウジも海に誓って、『マチュのだんなさん』になるって！ホラッ」手を引っ張る

「はずかしいよ！」「いまの私達に恥ずかしいモノなんてなにもない！」一喝

シュウジはしばしモジモジした後、海へ話しかけた。

「ありがとう地球、僕を引き止めてくれて。ボクはこれから『マチユのだんなさん』として、じゆうぶん。りっぱにげんきにがんばります！」

「マチユツーーーー大好きいいいい！きみが好きだよおおお！」

青年の主張を海はそれはもう優しく受け止めてくれた。この世界を滅ぼそうした終末装置に対して、地球はとてもやさしかった。宇宙全体が優しさにつつまれる。そんな夕暮れだった。

シュウジといっぱいお話していたら夕日はすっかり落ちていく。薄暮の時間、うっすらとシュウジの輪郭が見えるだけで影しか見えない。

「マチユ。おうちへ帰ろう。灯台小屋だけど僕達のおうちさ」

「そうだね」

「そして、愛し合おう」

「愛し合う？今でも愛し合ってるじゃん」鈍感な自分

「もっとさ、肉体的に求め合うだ、満月の夜にふさわし嬌（まぐ）わいを、交わさないとね」
「それって…結婚初夜って奴」

「もちろん、ニヤアンのご厚意に預からないと」

「マチュ、これからは性行動の時間だ。僕達は夜が明けるまで愛と性に対峙してまじわろうよ」
キラキラじゃない。胸のドキドキのドラムがヘビメタを熱演している。

やばい、シュウジに誘われるのめっちゃ恥ずかしい…いつも私から

「シュウジいあんた相当恥ずかしい事言ってるのわかってる？」

チグハグな心でツツコミをいれる。言葉がはつきり出てこない

「もちろんさ、マチュ。セックスしよ」

かくしてマチュにとって、そのいちばん長い新婚初夜がはじまってしまった。

マチュビームその⑪

前回までのあらすじ…あげちゃいました！島で結婚式。幸せッ！シュウジ大好きッ！

幸せ気分でウカれていたら、「新婚初夜」というヤバイイベントが待っているなんて知らなかった。完全に忘れていた。島の灯台。小屋でその初夜が始まろうとしている。それ相応に日が暮れていった。星空が綺麗。満月が見守るなか、性なる夜がわたしたちを支配する。

「シュウジ大好き！セックス！セックス！」

「ボクも交尾は大好き。マチュの事が大好きだよ。君が好きだよ」

「『交尾』って言わないで！ちょっとデリカシーないじゃん」

「僕達が行っているのは愛のある性行動に違いはないけど、動物という目線でみればただの交尾さ、ボクはその交尾という行為に神聖さを求めている。知恵無き動物たちがそうであるように。陸上生物から植物、そしてプランクトンに至るまで細胞を有している全ての生命体が行う性的交配。つまり『交尾』に命を滾（たぎ）らしたいんだよマチュ、キミが好きだよ」

シュウジは随分狂酔な事を口に出している。しかし瞳は真面目だった。マジだった。

「わかった、じゃあ夫婦にもなったし。『本気交尾』しょっか！」

わたしはアマテ・イトウ18歳。今とんでもない下品な言葉を発しました。

「本気交尾」男子の世界あまり知らないけどネットの広告に出てくるエロいヤツが言いそうな言葉がナチュラルに口から飛び出してしまった。赤面して、それこそ穴があったら入りたいくらい恥ずかしい。

けど、恥ずかしがらない！シュウジとマジでガチでセメントでノーブツクのマジ交尾始めるんだから！見ときなさい！観客無しでやってやる！…何を言っているのだわたし！？

「交尾は気持ちいいよ。交尾に快楽を求めるのは人間を含め数種類の生物しかない。みんな生き延びる為、子孫を繁栄させる為に行う『行動』としか求めていない。雄と雌で快楽を共有できる生物はボノボというお猿さんと僕達しかない」

「たのしいこうびにしようね」

シュウジは笑って言っただけ。

懷述の通り、わたしとシュウジはウブでネンネという訳ではなかった。イズマコロニー時代から性的関係を含めた愛情関係を構築していた。ごめんねニヤアン。

初夜だけど処女じゃないし。シュウジと毎晩キラキラの海を泳いでいるし。なによりシュウジの性のすべては掌握しているに等しかった。互いの愛するべき部分をしり、互いの気分を紅潮させ。そして果てる。この事に關しては誰にも負けるはずがなかった。

しかし、新婚初夜ってシチュエーションははじめてだあ……ヤバくない？絶対ヤバイだらう一生に一度しかないだらうこんな機会！

そんな新婚初夜から「おこうび」って、ちょっとデリカシーないなあシュウジ。

まあそういうシュウジも好きだけどね「セックス」って言うのちょっと恥ずかしいし！
よっしゃ！やってやりますか！『性行動』するぞお

なんかヤル気が湧いてきた。お姫様みたいに抱かれるのかと思ったが相手はシュウジだからわたしは頑張らないと。

マチュはおもむろにワンピースを脱ぎすてた。尻が終わり、潮風が身体を包みこんだ。薄暮は終わり、夜の貞操、シルエットだけが長い影を残していた。

裸一貫！産まれたままのわたしを愛してシュウジ！

「マチュ……はずかしいよ」

「何言ってるの？わたしの裸なんて見飽きているでしょ？」

「マチュの肉体に飽きることはないよ。けど…」

「けどなにさ？なんなのさ？シュウジもスッポンポンになろう？はだんぼで性行動しよ？」

不気味な沈黙が240フレーム（2秒）ほど、シュウジが恐る恐る口にした

「おそとで、するのかい？マチュ？」

「マチュはお外するのがいいのかい？獣に戻ろうか？文明を持つ以前の、いにしえの遺伝子が目覚めているのかもしれないね」

シュウジの声色がちよっとトーンダウン。

「えっ？もうするんじゃないの？」わたしもトーンダウン

「とりあえず、お家に入ろう、おうちでしようね」

「ソソソソツ：そうだね、おうちにはいる：おうちでせいこうどうする」

裸になってみたものの、シュウジに諭されると、恥ずかしさが後から押し寄せてきた。恩讐の彼方からやってきた羞恥心でニヤアンじゃないけどワケワ力になる。

小屋の扉をくぐる。シュウジが手探りでスイッチを探す。

パチン

白で覆われた明るい世界が広がる。結婚式の装飾が、まだ残っていたのだ。

白布で身を固めた小屋のリビングにはむかしからある机と椅子。簡易な水道が見渡せる。

昼に一度目になっているがあのボロ小屋からは想像できないような飾り立てだった、メイク室を構成していた仕切りは取り払われている。

「やっぱ、家の中がいいね」

「そうだよ、僕達は人類だからね、安心できない野原で性行動という弱点を晒す行為には至れない、熊さんとか狼さんに襲われちゃう。お腹に赤ちゃんを宿す為の行為なのに狼さんのお腹の中で消化されたら大変だからね」

「今日はシュウジが狼さんになるんでしょう？」

いじらしく聞いてみた。

「マチユは赤ずきんだね…おてやわらかに」

シュウジ、落ち着いていた。なんだかいつもの夜と違う感じがした。しかし新婚初夜だ。

「ウェディングドレスとタキシードで愛し合いたかったなあ」

ポツリと呟く。

「だめだよ汚れちゃうし」

「汚してもいいじゃん！貧衣裳じゃなくて一点物なんだよ？」

「そういう願望はボクにもあった。白無垢の花嫁さんに赤い染みを残すんだ。少し下劣で男性的な想像だけど」

「けど、その赤い染みはワタシなんでしょ？いいんだよシュウジはおとこのこなんだかそういう事考えても」

「いいのかな？」

「いいよ」快諾。「ありがとう」感謝。

「シュウジの人間らしい姿、ちゃんと見せてよ。わたしの前では、等身大の『おとこのこ』として生きて、生きて欲しいな」

「そうする事にするよ。けどお下品な事を考えるのが男の性だからね、あまりそういう部分は見せたくないかな」

「今更なにいつてるの。キ○タマの裏まで許した女の前でなにカマトトぶってるのさ、ウブなね

んねじゃあるまいし」

何をまくし立てているのマチュくん！？カマトトぶるなんてなんか旧世紀を描いた時代小説でしか見たこと無いよ。時代劇かつ！

※こと、宇宙世紀0085年においては旧世紀に制作されたドラマや映画演劇などすべて

「時代劇」扱いとなります。現代において100年前にあたる明治・大正時代のラブロマンスが時代劇として扱われるのと同様です。

「人類がどんなに進歩しても。破瓜の痛み、出血と征服欲のイメージは遺伝子レベルで紡がれているようだね。ボクもマチュをどうにかしたいって思う時があるよ」

シュウジがおとこのこらしい事を話す。

「うれしい、シュウジにどうにかされちゃうんだ…その口ぶりだと普段は自重していたの？」
シュウジとの性生活を赤裸々に告白しよう。シュウジけっこうねちっこい攻めをしてくる。

「身体の相性」なのかニュータイプ故の才能なのかはわからないが、とにかく弱い所を攻めてく

る。そんなシュウジのシュウジにこっちは腰をつかって激しく前後して放精を促す位しか対抗策がない、シュウジのされるがままだ。だけど

「独りよがりなブレイは性行為じゃないよ。自慰行為にすぎない。マチュを尊重してはじめて性行動は成立するんだ。自重しているよ」

「毎晩あれだけ激しいのに自重しているの！？どんだけスケベなのシュウジ！？」

「ボクはララアという一人の女性に対する一方的な愛の為に三千六千世界を彷徨っていたんだよ。かなりスケベだと自負している」

「どすけべシュウジ♪」

「ボクのおよめさんになるんだから床事情に悩む必要はないよ、おばあちゃんになるまで愛して上げる」

「おばあちゃん「に」なっても愛してあげるでしょ？」

抱きつきたくなるこの男、マジサイコー。

「そうだね、一緒のお墓に入ろうね、骨になっても物理的に消滅しても愛し合うんだ。キラキラはその為にある」

「ありがとキラキラさん、さっそく『およめさん』にしてもらおうかなあ」

わたしは最後の理性ともいえるブラジャーのホックを外そうとする。前に持ってきてからの方が外しやすいけど、後に手を回して外した方がなんかサマになるじゃん。

それに、このブラ：すっごくキツイ。ウェディングドレスに合わせる為にデザインされているのか肉が引き締められている感じがすごい。島で過ごしている間は水着で過ごしていたからワイヤーブラをするのが久しかったからかもしれないが、女としち乳をぶら下げるのは大変なのである。

「ちょっとまって」

シュウジが一言。あわてている様子

「まって、まってマチュ」

「どうしたの？エッチするんじゃないの？」

「そうだけど…そうなんだけど…」

シュウジの言葉尻がどんどんしぼんでいく。

「はっきり言わなきゃわからないよ。恥ずかしがらずに言ってみて？」

恥ずかしくてシュウジがちっちゃく丸まってる。かわいい、けどシュウジの恥ずかしい言葉を

マチュに紐解かせて？

「今のマチュが…綺麗すぎたから…そのままでちょっといて欲しい」

「そのままでって？」

「マチュの下着…すごいエッチだ。こんな下着はじめてみたかもしれない」

言われてみればそうである。こんなエッチな下着、履いたこと一度もないかも知れない。

小さな周り、キッチンにある小さな鏡で自分の姿をまじまじと見る。シュウジの言う通りだこれはすごい。

白無垢の生地だけで構成されているぱっと身ただの白い布でしかないこのブラジャー。刺繍がすごい施されている、指でなぞったらわかる。上品な縫い目が人差し指の末端からピンピン感じる事ができる。これ手縫い？宇宙世紀に手縫いの装飾？手縫いだとしたらこのブラジャー一着何十ハイトするの？百万ハイトって言われても納得のいく仕事であった。これはただのブラジャーじゃない、セクシーランジェリーの領域に達していた。

「エロいね…これは」納得してしまった。

「シュウジのスケベ！ハレンチ！」怒ってしまった

「恥ずかしい話をしてもいいかい？」「うん、いいよ」快諾。

「マチュのウェディングドレス姿。ステキだったよ」「ありがと♪」

「マチュの白いドレスステキだったけど、見えていたよ」「見えていたってナニさ」

「ブラジャー、くつきり形が見えていたよエッチだったよマチュ」

ええーっ。驚愕するしかない。

出てこい変態ドレスデザイナー。考えてみればそうだ。ドレスに合わせる下着がこんなゴージャスな刺繍する訳ないじゃん。ドレスがメインであってシルエットが主張しちやダメなんだから。式の最中にニヤアンがこっそり「ヌーブラじゃないんだ」って呟いていた理由がわかった。

変態どもに祭り上げられとる！奉られている事実のマチュは憤怒した。その反面感謝した。

「今のマチュがすごいステキだから…せめてベッドで抱き合う時まで下着は外さないで欲しいな、ボクの理性が持つ間は外さないでほしい」

「わかった、そんなにエッチ？」

「エッチだよ。エロースを感じるよ。愛の天使みたいだよマチュ」

赤髪の天使がそこに降臨した。愛を運ぶエロス神の気分になったのは初めてだ。

「うれしい：シュウジだいすき」

「さあベッドへ行こうマチュ」

——ベッドへ行こう

今、この男はさらっと言ってのけたけど、シュウジから誘われるの、実は初めてかも知れない。キスもワタシからだっし、ペッティングもわたしからだっし。はじめての夜のお誘いもわたしだった。冷静に考えると恋愛本のロマンスがまるで通じない恋愛してるじゃん私たち。シュウジ性欲なさすぎ！自分からくる自己主張が足りない：まあベッドではすごいんだけどね。

「うん、シュウジ、だいすき」

「ボクもだよマチュ、きみがすきだよ」

身体を重ねる。皮膚と皮膚が接触し熱移動が起きる。愛の移動であった。心臓の奥からドクドクと流れる血潮が熱にかわり、交わろうとしていた。

「ああ、これからこの人に愛されるんだ、愛を確かめ合うんだ」

という気持ちでいっぱいだった。シュウジのおよめさんになったよかった。

カミサマなんか、信じない。けどこの夜だけはきっと神がくれたもの、カミサマがくれた僥倖にただ感謝する。

口づけの末、まさぐり。啄み、バードキス。いきなり互いの歯を舐め合うような口淫でもかまわないのに、恋人らしくしている

「んんっ」「ん？」「んんんっ」

「ん」の音だけで会話が成り立ってしまうのはきつと恋人共通の概念だと思う。唇と唇が離れる瞬間に軽くパチュッと音がする。愛の音色だ。決して淫靡じゃないぞ。ここは言っちゃいけないと。

シュウジが下を挿入してきた。今日のシュウジは積極的だ。旦那さんらしくていいぞ。わたしの夫になるんだからこれくらいゲンキじゃないと。

「んんッ」

お返しに舌を絡ませる。シュウジの喉の奥からお昼に食べたローストビーフに匂いがちよっと香る。食べ過ぎシュウジ！

キッシングの限りをつくして、200cmほどの木台たるベッドへ腰掛ける。申し訳程度のマツトレスが敷かれてあって、それだけしかない剥き出しの寝台。

抱き合って、構わって。押し倒される：押し倒されるんだろうな。と思っていた。

「マチュ、ちよっとまってね」

とシュウジは制止。まってじゃないよ！続けて

「おトイレ」生理現象じゃしょうがないや！

「いいところだったのに」

「マチュもトイレに行っておいた方がいいよ」と静かにシュウジは語った。確かな言葉だった。なんでだろう？

「これからボクとマチュは今夜、体液の交換ししません。互いの体液を密接に交換しあうのです。汗も粘液もなにもかもキミとボクの間にしかりとりされません」

ナニさ、愛し合ってるのに。随分と理路整然な事を言うじゃない。

「ボクはマチュにしか体液を与えないつもりでいる。ボクの精のすべて、「液体」のすべてをマチュに捧げるよ。だからトイレにいった余計なものを出す、マチュもそのつもりでいてほしい」

彼による。愛の告白だった。

わたしはシュウジのすべてを受け入れるしかないらしい。受け入れる。だってわたしの旦那さんだもん。夫と妻の関係だから。およめさんだから。

「わかった、ありがとうシュウジ。わたしもシュウジのすべてを軀（からだ）で受けるよ、おいで」

「ありがとうマチユ、けど感謝の言葉は、行為が終わってからの方がいいと思うな」

「ボクは今夜、マチユを寝かせるつもりはない、朝まで互いに哭（な）き続け、絶頂の限りを尽くそう。初夜らしく。正常位だけで。小細工無しさ、キラキラに頼らない。肉体的な愛に浸（ひた）ろうよ」

「わかった、浸る。めっちゃ浸る」

シュウジは小屋の外にあるトイレで用を済ませる。わたしも別にしたくはないけど、トイレで中断なんて恥ずかしいし。トイレを済ませる。

灯台小屋のトイレはボットンではなくなっていた。簡易水洗で、ウォシュレットまでついていた。至れり尽くせり。誰が監理するんだろう：私たちか。

外のカラットした夜風でほてった身体を少し冷やす。高揚している気持ちだけはそのままに。所要を済ませ、シュウジと再び対峙する。シュウジのツナギは立派にテントを張っていた。

興奮してるじゃん。よかった。うれしい。

「脱水で倒れるのだけはゴメンだ、おみずのもうね」

下半身とは別にシュウジの口ぶりはずいぶんと冷静だった。

「そうだね」といつてコップを取ろうとする

シュウジは満たされたコップを持っていた、口に含んだ。ゴクゴク飲むのかと思ったら、口に含んだまま、唇と唇が重なる。シュウジがわたしについていばんで補水する。

口移しだった。

口と口で補水する。漏れ出した水が喉伝って胸元に溜まる。エッチだすごいエッチだ。

「これが愛だよマチュ、僕達はこうして餌付けしあうんだ。番（つがい）の鳥さんみたいに」
——変態。って嘲笑われてもいいや。いいや。

サイツコーだった。ヤベーじゃん。こんなの。

「もう憂う物はなにもない。マチュ、愛し合おう」

「うん、シュウジ。たくさんあいして」

それからの情事は筆舌に尽くしがたい。口で説明しろって言われても無理。
シュウジとの愛がそこにはあった。

——今宵、夫婦の契りを交わす。

接吻。接吻。齒と齒がブツかる。おかまいなしだ。接吻。舌。口淫めいた接吻。

シュウジはその大きい掌を乳房へ当てる。乳房、乳房、おっぱい。乳輪の先が張り裂けそうになって痛い。ブラジャーという矯正具にはおさまらないほど乳腺が張り詰めているのだ。

「シュウジ、おっぱい。おっぱい」

「そうだね、おっぱいだね」

ブラの手触りをシュウジは愉しむ。早く外して欲しいのに。おっぱいはシュウジの愛を欲しているのに、いじわるだ。シュウジは布越しでしか愛してくれない。

「マチュのおっぱい…おっぱい」

双つの谷間に青い毛がうずくまる。谷間で青き少年の鼻腔はめいっぱい広がっている。いい匂いをするのかな？

「よしよし」

と母親めいた言葉で彼を抱きとめる。式の為に塗ったラメ入りのネイルが月夜に光る。撫でる手は心地よかった。幸せを感じずにはいられない。

「あまえんぼうだね、シュウジは」

口から漏れてした。

「ボクの命の源はきつとマチユのおっぱいなんだ…マチユのおっぱい大好きだよ」

「おっぱい飲んでネンネする？」挑発的に聞いてみた

「する！」

ゲンキに答えるシュウジ。

正直でよろしい。

2つの房にここまで思いを馳せた事はなかった、おかあさんがそうであった様に、わたしもまた、豊かな乳房に恵まれる事ができた、二次性徴と共に膨らんでいく乳房は自分に最初からあるものだ、だから他人の物をうらやましがする事もある、自分にはない物を人は求めてしまう。

「隣の家の芝生は青い」って誰かが言ってる、その通りだ。

だから、ニヤアンみたいなスリムで綺麗なおっぱいに憧れた。でっかいだけのおっぱいなんて…って思っていたし。

ラアさんみたいな豊満なバストに憧れる事もあった、自分が甘瓜ならラアさんはスイカくらいある。ふっくらした服や矯正の多い服ばかり着ているから目立たないんだけど、ラアさ

んのおっぱいはすごい。100センチはあるってカンチャニちゃんが教えてくれた。

釣り鐘型の、強気な乳房に今、優しさが灯る。シュウジが嬲ろうとしているのだ。

背中のホックをまさぐっているのがわかる。

「取ろうか？」聞く

「ボクにやらせて」

「難しいよ？」

シュウジとの性行為では全部自分でポンポン脱いでいった。だってその方が楽し。だから、シュウジはブラの外し方を知らない。戻ってきてからの逢瀬も全部ビキニで済ませていたから。

「できるさ」

といい、フックに手を当てる。あたり。わたしは背中をわざと反らせて、シュウジの指が入るように隙間をつくってあげる。

さすがニュータイプ。解いてみせた

シュウジを手こずらせる事に成功したのは嬉しい。フロントホックにしないでよかった。

バルンッ

という効果音がなりそうな勢いで拘束具から乳房が解放される。

「はあ：キツかった」とシュウジの若き芽を布越しに撫でながら答える。

「おつかれさまマチュ、りっぱなおっぱいだったね」

「ありがとシュウジ、お疲れ様ブラジャーさん」

ポイッと無で捨てた。次に着用する時はきつとニヤアンの結婚式だろう。冠婚以外は絶対つけない。冠婚でもつけない！シュウジ専用ブラジャーだ。

シュウジは顕現された乳輪をやさしく撫でる。

「痛い？」

「いたいけど、いたくない。気持ちいいが勝ってる」

「そんな感じがしたから、マチュのおっぱいは今、怯えているね」

「怯えている？シュウジの手はきもちいいよ」

「これからの快楽に怯えているんだ。マチュもっと健やかなおっぱいであって、緊張しないでいいんだよ」

シュウジは完全に乳輪に話しかけていた。おっぱいと対話してる。

けど、嬉しいなあ。ありがとうおっぱい。シュウジのお話いっぱい聞いてあげて。

「期待で胸を膨らませているんだ。さきつぼの感覚が敏感になってる。やさしくさわってあげて」とだけ忠告。この男忠告を守る男ではなかった。

暴漢のようにおっぱいを揉みだき始めた。乳輪は痛かったけど乳房はシュウジの掌を快く受け入れてくれた。よかった。それが気持ちよかった。子宮がドクドクと蠢いているのがわかる。

わたし、いま。感じているんだ。

脂肪と乳腺の塊をここまで愛してくれるんだから男の人ってえらいなあって思う。

きとおかあさんのおっぱいの味が忘れられないんだよなあ

なんだかガマンができなくなってきた。自分で自分の秘部を弄りはじめる。クロッチが濡れている。

「ごめんね、マチユ。我慢させちゃったみたいだね」

とシュウジはもみしごく掌を止め、鼠径部へ手を伸ばす。

「パンツは脱ぐから」

「わかった、いいよ」

ポイポイと脱ぎ捨てる。ブラジャーほど執着はしていなかった。

鼠径部、子宮のあたりに指をなぞるシュウジ、この光景は何回みても美しい。

餅のように弾力をもつ女の子の肌がその男らしい角ばった指を弾き返すのだ。少女であつてうれしい、男の子だったらこんな柔肌持ち合わせてないもんね。

そしてその青い茂は鼠径部に顔を埋める、まずは舌で周りを撫ではじめ、そして雌蕊の奥へ。きもちよかった、いやエッチなきもちよさもあるけど、それ以上に「シュウジに愛されている」と言う快樂が勝っていた。愛されているんだ。という実感がわたしを支配した。

ビクツビクツと腰が引けている。揺れる花びらがパクパクと雄蕊を受け入れる準備ができた。

「シュウジ、きて」

「マチュ、あいしているよ」

射精時の男性の二〇は実に2しかない。たったの2。サボテンと同じ二〇らしい。その放精の瞬間至るまでの、最後の会話だった。

「シュウジ、シュウジ」

「マチュ、マチュ」

互いの名を呼びあいながら必死に性器を秘める臀部を振り続けた。

「粘膜交換」。果てる。さらに「粘膜交換」。その繰り返しだった。

シュウジの言っていた事はたしかだった。シュウジはわたしにだけ体液を許した。唾液が口を潤し。汗が肌を滑り。そして精虫が子宮に放たれる。

シュウジは全力でわたしを愛してくれた。わたしはただ、その愛を受け入れるだけ。愛を受け入れる「器」であった。この器、はたして満たされる事があるのだろうか？

満たされた

「いくからやめていくからこわいイクのこわいイクのやめて」

器が決壊しようとしていた。覆水が溢れてくる。

「だめだよ、いっしょにイこうマチュ」

快樂の波に、せいっぱい抗うように。耐えるためにシュウジの背中を抱きとめた。ネイルして
いないくてよかった、シュウジの筋肉に刺さりまくっていたに違いない。それくらい強い力で抱
きしめた。

——何度目かわからない、放精が始まる。

愛の器は耐えきれずに決壊

「しゅうじ、しゅうじ」

彼の名を叫びながら絶頂を迎えた。

キラキラは見えなかった。けどどしあわせだった。キラキラという空間に逃げない。肉体の愛がそこに広がっていた。

——素乱たる心から正気を取り戻し、その朝を迎えるまで、ずっとシュウジの名前呼び続けた。
——シュウジもまた、耳元でずっと「マチュ」と呼び続けてくれた。

雄鶏と雌鶏が、朝でもないのに泣き続けているのだ。泣き声の後に明けの明星は光りはじめた。

——神聖な瞬間が訪れた。

「しゅうじい：おちんちんのおそうじ？おわったよ？」

男体そのものを啜え、放精孔の先までしゃぶりつづけた。昨晚の愛撫のお礼だ。

「おそうじちゃんとできてる？」とシュウジに確認。男体の先になんどもキスをする。

「うん、もう出るものも出ないよマチュ、降参だ」

「おちんちんまだ元気だけど？」限界という割に怒張を続ける男体を啜えながら言ってる。

もう腰がガクガク言ってるし。きつとまっすぐ歩けない。身体はもうガタガタだった。

事後を楽しもう。そう身体が悲鳴をあげていたが。心はまだ求めていた。

「ドライオーガズムはしたくないよマチュ。出ない時はやめとこう」

「そっか：そうだね。ありがとうシュウジのガンダムさん」

ビームサーベルにお礼を言ってシュウジの顔の方へよじ登る。

純白のシャツは皺と体液でまみれ。男と女が果てる姿を、ただ見つめている。

抱き合う二人を包む揺り籠としてその使命を果たしていた。

「寒くない？」シュウジが聞く

「さむくない、シュウジのからだポッカポカだもん」

湯気が立ち込めかねない12月の空。ジオン領土某島、朝5時の気温は摂氏22度

窓を締め切り、互いの匂いを部屋に纏わせる……というのが性的射幸心を煽るのだろうか

窓あけっぱなしだし、もうそれは大変タイヘン。島中にわたしの絶叫が響いていたに違いない。ニヤアンに聞かれちゃってるな……。まあいいか！

「もっと事後を味わうものだと思ってたけど、朝になっちゃったね」

「言ったはずだよマチュ、今夜は眠らせないって。朝を迎えちゃったね」

「だいすき」

シュウジに口づけ。さっきまでシュウジのシュウジを舐っていたおくちを口づけを許してくれるのが実にシュウジらしい。互いを愛し合ってる証拠だ。

初夜の終わりを告げる。終戦の合図だった。

「すき……シュウジすき」

「ボクもだよマチュ。マチュがすき」

この短いあいだの啄みを繰り返すのみだった。接吻。接吻。また接吻。

——目覚めの接吻ではない、ずっと起きていたのだから。眠りへ誘う口吸いだった。

『寝起きのキスは最悪』って何かで見た気がする。SNSかな？ブログかな？友達の口からじゃなくてネットだったのを覚えている。

あたりまえじゃん。一応わたしアマテ・ユズリハ。こうみえてエスカレーター式の女学園出身の高校二年生。男と無縁の園で暮らしている温室育ちの女の子ですから。

いけない。もう「アマテ・イトウ」だった。

肉親以外の男性と喋った事すらない女学生が平気にいる社会だ。朝チュンのキスなんて知るはずがなかった。

『キス最悪理論』の人が言うにはこうだ。寝起きて唾液分泌が少ないせいで口内細菌が一番繁殖してゐるらしくて。せっかくの口づけも臭い口のせいで千年の恋も醒めるという理屈だった。

前述のアンキーから聞いた「愛し合っている男のおならで萎える」という話に近い。

けど、シウウジのお口全然臭くなかった。無事消化されたのかローストビーフの香りは消えていた。

臭い訳がないじゃん。だって寝てないから。ずっと起きてましたから。

わたしの唾液とシュウジの唾液で咽喉内はバッチリ潤ってますから。ぬかりはないのである。ただ単純にシュウジと朝まで愛し合っていただけなのだが。

「新婚初夜って余韻を愉しむものなんじゃないの？」

聞いてみた。朝まで果てちゃいましたからマチュねえ：

「余韻もいいけど、眼の前のマチュが魅力的で：寝かせないなんて言っでごめんね」
シュウジの瞳がちょっとシュンとする

「いいの、満足。シュウジらしくて好き。何度も求めてきたところが大好き」

「僕は欲望のまま動いていただけだよ。大丈夫マチュ？身体痛くない？」

「ぜんぜん。：うそ。からだじゅういたいかも」

「ごめんね」と言いかけるシュウジの口を手で覆う。

「いたいけど、毎晩この位の勢いで求めても：いいよ？」

「マチュの身体が壊れちゃうよ」

「壊れても良い」終末主義者であるわたしは豪語する。

「ボクのからだもたないよマチュ、静かに愛し合う事も必要だよ」

「それもそうだね：シュウジに愛されるならなんでもいいや」

焼け鉢になるわたしを頭をシュウジは撫でてくれた。

するつていうと頭の奥がぼーっとしてくる。意識が遠のいていく。肉体と脳が限界だと言っているようだ。クラバの最中みたいにアドレナリンを過剰摂取するような興奮感覚はなかった。

「ニヤアンが待つ家に帰る前にサ」

「なんだい」

「ちょっとだけ、寝よう」

「そうだね、おやすみマチュ」

シュウジはわたしを抱きしめる。抱擁がふたりを包む。

その朝。時刻にして午後29時半。シュウジの腕枕で眠った。深い眠りではなかった。

キラキラをシュウジと泳いだ。

肉体は限界を超えていてもキラキラの中でなら愛せる。延長戦がはじまった。

「もう近くじゃないよ」

「近く？」

「クラブの時、ボクは常にマチュの近くにいたんだ。だけでもう近くじゃない」

「どういうこと？」

「傍にいる。ずっとずっと傍にいるよ。それだけ」

「わたしもシュウジの傍にいるよ」

「ずっと、ずっと。一緒だ」

ノストラダムスが予言した通り。この星が爆発する日も一つでありたい。

融合を求める赤と青の魂が交わるように宇宙を流れていたという。



目覚める。からだじゅう痛い。肩甲骨のあたりがゴリゴリと、そして腰痛。シャワーでも浴びようかな。小屋を覗く

「そんなものないよ」とシュウジの一言

「僕達のシャワーはこれさ」

外へ案内される。性行動の名残りある体液を大腿から垂らしながら外へ庭仕事様の蛇口だった、ご丁寧にホースとシャワーヘッドまでついていた。

「これで身体を禳ごう」

「寒くない？」

「ぬるい位だよ、安心してマチュ」

シュウジとふたり。すっぱんぼんのまま、シャワーをかけあった。ヘアメイクされたままだったので、整髪剤が髪をゴワゴワにさせていた。洗い流した。スッキリした。

そのまま、倒れるように芝生の上で大の字になった。

「きもちいいね、マチュ」

「きもちいい！お外で裸になるの気持ちいい」

「誰も見ていないから安心して。このまま裸で過ごそう。自然に帰るんだ」

「それもいいね」

たとえば、人工衛星に見られようがかまわない。衣服を捨て、己れの身体を向き合うと言う享樂を受けるのだ。

「アダムとイブってこんな感じだったのかなあ」

心は原始に帰ろうとしていた。原始宗教の目覚めが

「ボクたちは知恵の実と生命の実、どちらも食べてしまったようだね。神様になんて顔すればいいのやら」

「そうだね、すごいねニュータイプ」

「新人類になるかもね、いっぱい赤ちゃん作っていっぱい増やそう——ちなみに」

「ちなみに？」

「生命の実も知恵の実もリンゴらしいよ」

「へえ、シュウジの好物じゃん」

「リンゴだいすき、マチュもだいすき」

産まれたままの姿の男体と女体。童のような牧歌的な会話で時を過ごす。

運命的とはいえ自由恋愛の末に結ばれた夫婦にしては、は原初的で初々しい会話だったそうなの。

シュウマチュは小さな恋のメロディ。小さな恋のメロディなんだよ。

そうガンダムが言っている。きっと言っている。

シュウジのおよめさん つづく。

マチュビーム おまけ

みなさん、元気にお過ごしですか？わたしです。マチュです。

わたしの名前は「アマテ・イトウ」シュウジ・イトウのお嫁さん。

シュウジのおよめさんになってしばらく経ちました：いろいろあったけど。

島は追い出されちゃいました。ジオンと連邦が面倒な事になちゃってねえ：

それでサイド3で匿ってもらっています。今じゃ立派なジオン市民です。

ヒゲマンはもちろんのこと、ニヤアンとエグザベくんのトリモチもあって今じゃジオン市民の一員。なんだかなあ：ジオンって物騒だから怖いんだけどなあ。

今はザビ家ではなくアルティシア様が治める法国として安定しているみたい、行政も立憲君主制、独裁ではなくなったみたいね。

島からジオンに引越しました。国賓扱いは期待していなかったけど。与えられたのはジオン

の公共団地！円形に棟が立っていて中央に遊具のついた緑地があるような。そんな立派なマンモス集合団地。ヒゲマン達ジオン星人達は「世界を救った英雄」なんて言うから、てっきり山の手の豪邸にでも住まわせて貰えるのかと思ってたんだけどなあ。

ニヤアン曰く「上流階級は差別意識が強い。この団地の方が絶対平和だよ」って力説するもんだいから。まあ居住の書類にハンコ押しちゃったもんね！

まあいいか！シュウジと一緒に住めば都。どんなところでも愛の巣って事で。

「ドス・風呂／トイレ別。採光性の高い大きな窓がお出迎え。」

外からは子どもたちがはしゃぐ声が聞こえてくる。

「まあいい物件なんじゃない？」「ドス、将来子供とか出来ても余裕な広さだった。今はその有り余る部屋を余している。」

とりあえず一室はシュウジの工房になっている。スプレーの匂いがツンと香る。

もう一室はわたしとシュウジの愛の巣、寝室だ。8畳には不釣り合いな天蓋つきのベッドがお出迎え。

新妻マチュ、そんな感じで過ごしております。よろしくね。

8月13日。季節は「立秋」を迎えています。そうです「お盆」の季節ですね。

イズマコロニーは名の通りアジア系はもとより日系人の多く住むコロニーでしたのでお盆の習慣がありました。仏教からくる先祖供養の習慣。

わたしもシュウジもそのコロニーの住人でありました。そして一応日系人です。先祖供養が頭をよぎります。

イズマコロニーで過ごした日々に想いを馳せます。

「夏って感じしないねシュウジ」

「そうだね、温かいけど、暑くはないね」

恥ずかしながら夜通しキラキラを演じた後、水シャワーで身体を禊いだ二人。季節は8月、夏真っ盛りだというのにまったく暑くありません。

サイドのは開放型コロニーであった為、反射板から得る太陽光を調整し、春夏秋冬を演出していました。

人口の大地であるが四季が演出されていました。マチュが制服姿でプールへダイブしたのも初夏の頃でした

ジークアクスは9月から11月までのほんの数ヶ月のお話だったのです。宇宙の存亡を占う壮絶な

「小さな恋のメロディ」が繰り広げられていました。

「学校のプールで泳ぎたいなあ」マチュ

「そもそもプールがあるのかな？このコロニー」シュウジ

サイドωはシャングリラコロニーに次ぐ古いコロニーで、密閉型コロニーの為、季節がありません。人類が生存できるギリギリの環境を維持しているにすぎません。ズムシティは常春です。

団地には採光性の高い窓がありますが、注ぐのはサイド3の人口照明だけです。

おひさまが懐かしいなあ…太陽光を浴びたいな。とボヤいてみたり。

「ニヤアンが言うにはあるらしいよプール、屋内にある温水プールね。マタニティスイミング教室に通いたい！ってこの前話していた」

ニヤアン現在妊娠9ヶ月。臨月を迎えようとしていた。もうすぐ産まれます。

よかったね、エグザベくん。

「大きな産道を泳ぐ感じだねプールは子宮なんだよ」

「難しいことばかり言わないでシュウジ！」

ふと、おかあさんの顔が脳裏を過ぎていった。そうだ、おかあさん。随分と合っていないな

「実家……どうなっているのかなあ……」 「何があったの？」

「お盆といえば実家に帰るのが風習じゃん」

「そんな事もあったね」

シュウジは長い間、刻（とき）を彷徨っていたので風習や文化に疎いです。

「お母さんの顔、見たいな、せめて声くらい聞きたい」

「電話して見たら？」 シュウジはマチュの画面が割れたスマホを手取る。

「ダメ、コロニー間通話はジオンが規制されているみたいなんだ、繋がらない」

マチュは試しにタマキおかあさんの電話番号にかける

（こちら、ジオン通信局です、おかけになった電話番号はジオン通信傍受法により通話が許可されていません）

電子音声でおねえさんが案内してくれる。

ジオンは一年戦争で勝利したものの、すこし前まで全コロニーと敵対していた独裁国家です。まだ不自由な所がたくさんあります。中立コロニーからは敵視されています。自由はあまりないと思ってください。

「お母さん、元気にしてるかなあ」マチュ訝しむ。

「聞いてみたら？偉い人に」「偉い人？」

「そう、偉い人」シュウジはニツコリとして言います



「あーモシモシ？ヒゲマン？元気してた」

マチュが明るい声が夫婦の部屋に響きます。相手は、もうわかっているますね？

「ごめんねお盆休み中に！ちょっと困った事があってさあ…」

「いいんですよ、ジオンに盆はありませんから」

という優しいお髭の紳士の声が聞こえます。

「実は——で——でさあ、サイドののおかあさんと、ちょっと話したいんだよね」

わたしは簡潔に事の次第を話した。お母さんと話したい、それだけだった。

ヒゲマンちょっと黙りこんでいます

「少し、難しい話かもしれませんが。今日中におかあさんとお話という理由にはいきませんね。逢えますか？今日」

「うん、いいけど何処にいけないの？」

「ジオン公舎で合います。私の名前を言えば入れるように伝えておきます午前中はちょっと手があけられないので、15時頃着てください」

「わかった。ありがとうヒゲマン！」

「お待ちしております」

「ムッ……ムッ……」 電話がキレました。

「ズムシテイ官舎に來いってさ、気合の入った服でいかないと！」

「ズムシテイか、懐かしいな。僕は何を着ればいいだろう」

「シュウジはシュウジのままでもいいよ。とにかくご飯食べて着替えよう」

マチュ、団地に不釣り合いのウォークインクローゼットで服選びです

結局。いつもの「ビキニスタイルにホットパンツ」というマチュの勝負服に決まる。夏だからね。いいと思う

シュウジは洗濯したての白いツナギを着る、できるだけスプレーの染みがない奴。

数時間後、即席で作ったニンニク抜きペロンチーノ（別名油パスタ）とバゲットでブランチを済ませ。

「ニヤアン、コンチ。ちょっと出かけてくる！」と隣室のニヤアンに一声かける。褐色の手が玄関先で降ってる。黄色い箱の電子音も聞こえる。

隣室○×△号室にはエグザベくとニヤアン夫妻が暮らしています。

「マチュやシュウちゃんと離れ離れになりたくない」とニヤアンが駄々をこねたのです。

お陰で、今はお隣さん同士、仲良く暮らしています。

エグザベくんは艦隊勤務からサイド3内勤になりました。なんか軍学校の先生として授業しているらしいよ？

おとなりさんのオリベ夫婦、毎朝6時には二人が朝餉を済ませて、7時にはエグザベくんが出勤。軽金属製のドア越しに軽いキス。そして夕方の6時過ぎには帰って来る。そんな幸せな夫婦像が描かれているそうなの。

まあわたしの家は常にシュウジいるんだけどね、時々スプレー缶片手にラクガキに出かける程度で。常に一緒。うれしい。

シュウジが務めるアトリエ「イトウ工房」をよろしくね。ご依頼等受け付ける営業日は毎月第三水曜日のみ。

シュウジが社長、専務というか経理はわたくしまちゅ。二人だけの小さな会社です。

高校もロクに出てないのに経理なんてできるのだろうか……まあニュータイプだしなんとかなる。

——余計な話が挟まってしまった。ヒゲマンだよヒゲマン。
いそいそとメトロに乗って乗り継ぎ一回で小一時間。

ジオン官庁舎が集まる「ジオン公舎前」駅下車。

ジオン公舎前は街の雑踏とは違い、物静かで計画的に作られた田園と一本道があるだけだ。

「いい散歩になるねマチュ」

「これを毎日通勤するのは大変だねヒゲマン」とポツポツと歩きながら

どう考えても悪の組織のアジトにしか見えないジオン公国公舎がそびえたっている

「相変わらず趣味ワルッ」

と呟くと衛兵達がジロッとマチュの方を向く。うかつのな事は言えない

衛兵達に臆することなくマチュ達は荘厳すぎる門をくぐる、中は近代的でホテルのロビーのような待合室が佇んでいる

「シャリアブル中佐に15時にここに来いって言われたんだけど…」

ビジネスシーンなんて一切知らないわたしは雑にアポイントを確認する

「ユズリハ少尉ですね。はい15時から伺っております、ご案内します」と受付のお姉さん

わたし、アマテ・ユズリハは少しの間だけ軍籍にいた。ソドンの檻に入れられながらヒゲマンと修行に明け暮れていた時に軍籍を取得していたらしい。ニヤアンと同じ少尉だった。当然、名

營除隊した。軍隊なんてもうコリゴリだよ。しかし、まだその軍籍はジオンの都合でこっそりと残しておかないといけないみたいで。

軍では「ユズリハ少尉」と呼ばれています。もう「アマテ・イトウ」なんですけど！

ちなみにマチュとシュウジに配られた「ジオン十字勲章」の恩給で月一万円（日本円で約150万円相当）がポンと支給されます。恩給すごい。一生遊んで暮らせるじゃん。

ニヤアンとエグザベくんも貰っている恩給。ニヤアンは産まれてくる子供の為に貯金しているらしい。わたしも無駄遣いしないで貯金しよう。

シュウジがどれだけバクバク食べても毎月一萬ハイトなんてお金は使えないのであった。長いエレベータと長い廊下を歩くと、ヒゲマンのオフィスが見える。

「すごい緊張する」

「緊張することはないよ、中にいるのはシャリア・ブルさ」

ヒビとドアをノックする。荘厳なドアだった。

「アマテくんだね、どうぞ」

独特な渋い声が聞こえる。

会議室ほどはある空間にヒゲマンのデスクがポツリとある。赤絨毯が敷き詰められている。窓からジオンの平和な街並みを見つめるのがヒゲマンの趣味らしい。

「ヒゲマンおひさー」とマチュ

「おひさしぶりです。そちらから連絡があるなんて珍しいですね…びっくりしましたよ」

「シュウジくんも、ご顕在でなにより」

「僕はこの世界からいなくならないよシャリア、安心して」

「ところで頼んだ事…できそう？」

「お母様との通信ですね。これは外交面の問題でして。あなた、サイドのじゃ今でもおたずね者だそうですね」

「やっぱり!？」カネバン公司の金庫あさってアンキー撃ち殺そうとしたのがマズかったか。

「ええ、あなたは今、中立コロニー連合からなる警察機構により指名手配されています。ジオンの庇護の元であなたの身柄は健全な生活が保証されているにすぎません」

「ヤバイじゃん」

「それほどの事をあなたは犯したのですから、自戒しなさい」

「はい、でもクラブがないとシユウジと出会えていないよ？」

「それはそうなのですが――」

ヒゲマン難しい顔をする、癖なのかお髭を撫でながら熟考。

「じゃあ？やっぱ無理そう？」

「いえ、安心してください。外交・諜報部にはこちらから手を回したので、普通にお母さんとお話いたせますよ」

「よかったあ……」マチュ、安堵する

「ですが、今日という訳にはいきません。2日後。指定された場所で指定された時間。10分間のみ話ができます」

「わかった、15日ね」

「10分は長いようで短いです。このような機会はなかなか作れません。次がいつになるかわかりませんので」

「大事に言葉を選んで大事なお話をしてください。人生にとってかけがえのない10分間になります」

「…めっちゃ重たいじゃん」

「まあでも話せそうでよかったねマチュ」

「とりあえず15日、○時××分にまた公舎へ来てください。」

「わかった！ヒゲマンありがとー」

「もう少しお話したい所ですが、今日はこの辺で切り上げましょう」

「ごめんね、忙しそうなのに時間割いてもらって」

「あなたから受けた『恩』に比べたらこんな奉公は些細なものです、君もですシュウジくん。本当にありますかとう」

「僕はマチュに導かれただけだよ、シャアは元気かい」

「彼については話したい事がたくさんありますが、またの機会にしましょう。では」

ヒゲマンがドアへと導く、公共の場には似つかわしくないビキニスタイルの女とツナギの男がトボトボと公国の棲家から出ていく

「なに話そうかなあ」

「とりあえず結婚の報告はしといた方がいいね」

「それはもちろんする、話足りないよ10分って長いようで短いじゃん」
「彼はああいつてたけどなんでもいいんだよ、今のマチュの事を話せば」
二人が歩む帰り道は、とても明るかったそう。

――後日、8月15日。イズマコロニー官庁内某所。

タマキ・ユズリハ部長が某政府外交官により拉致される。

目隠しとイヤーマフを装着され、見知らぬ場所へと連行される。

目隠しとイヤーマフが外される。コンクリートで固められた四角い「箱」の中であった自分の座っている椅子と赤電話が一つ置いてあるだけの空間だった。

「ユズリハさん、娘さんが貴方と話がしたいとの事でして」

外部スピーカーからコモリ少尉の声が聞こえる

「アマテ！アマテなの！？」

まさかの出来事にタマキさん困惑するばかり。

「電話が鳴るまで、しばしお待ち下さい」

それからの時間、タマキさんにとっては永遠とも思える「待ち時間」が続いた

そして数分の時が経ち、*ピピピピ*と古めかしいベルになる

受話器を取る、耳をあてる。無言だ。

「…アマテ？アマテなの？」タマキさん声を荒げる。

「——お母さん！」

あの頃と何も変わらない夏の果実のような新鮮で元気な声が聞こえる

「アマテ！元気！？元気にしてるの！」

「うん、場所はいえないけど元気だよ！おかあさん！話したい事がたくさんあるんだ」

「わかった、おかあさんも話したいことがたくさんあるけど、まずアマテのお話から聞こうかな」

「うん、この電話10分しか繋がらないから手短にはなすね——わたしね、結婚したの」

「——おめでとう、旦那さんはどんな人？」

おかあさんは無償の愛でわたしとシュウジの婚姻を祝ってくれた。

——怒られるかな？ってずっと思っていた、だってこんな親不孝な娘いないよ？

「旦那さん、どんな人？アマテまだ18歳でしょ？結婚とか早いんじゃない？」

「ジオンは16歳から結婚できるんだよ。生涯のパートナーだから結婚するしかないじゃん」

「どんな人って言われたら……ちょっと抜けてる所はあるけどしっかりと優しい男の子だよ」

「優しい人なのね……アマテにぴったりの男の子だね」

「ありがとう」

「マチュ、改めて。ご結婚おめでとうございます。お母さん、とっても嬉しい」

「ありがとう、お母さん、お母さんと話せて嬉しい——それでね」

それから10分、母子のたわいない会話が続いたという

たわいないとは言うがタマキさんの瞳には涙が溢れていたという

「じゃあ元気でねアマテ。身体に気をつけてね」

タマキさんの言葉はそれが最後だった。

こうしてマチュのささやかな盆休みの帰郷は終了した

言葉だけのやりとりだが、二人の想いはきつとつながっているに違いない。

大雨

人口の大地であるスペースコロニーには、生意気にも気象変動がある。

イズマコロニーの晴雨は気象計画によって、文字通り「計画」で定められている。雨雲もすべて人工的に管理されているに過ぎない。すぎないはずだとマチュは思っていた。天気予報なんて概念はない、「天候予定」という形でニュース番組に出ているお姉さんが伝えてくれる。コロニーに気象予報士はいない。天気はすべて人間の手で作っているのだから予報する意味がない。

しかし、今日の豪雨はマチュにとって全くの想定外だった。「天候予定」では、朝晩通して晴れであるはずのイズマコロニー上空には雷雲がゴロゴロと喉を鳴らしている。お気に入りのセーターをズブ濡れにさせるほどの大雨が、地表に降り注いでいるのだ。

マチュは走った。ただただ走った。

こんなずぶ濡れの身体でメトロには乗れない。だから、走った。スニーカーから靴下まで、グシャグシャの自分がいた。

目指したのは我が家じゃない。下水溝へつながるマンホールを探しているのだ。氾濫しそうになっっているいつもの川の高架下へ。マチュは向かう。

いつものドブ川は、濁流に飲まれ、流域治水としての本来の役割を果たしていた。シュウジが描いた「キラキラ」のグラフィティも波にさらわれて、見えない。

——シュウジ！？シュウジどこ！？

誰かを必死で探すマチュの姿がそこにはあった。こんな雨の中で想い人なんか合えられるはずもないのに……ないのに

——近くにいるよ。

彼女の脳内に声が響き渡る！「シュウジだ！！」雨音に負けない声で彼女は叫んだ。

——下水道は危ないからね、管理用の通路を案内するよ

彼女の視界には翠に赤のアクセントがまばゆい光の世界が広がっている。眼下にいるのは、シユウジ。その人である。彼女が「シユウジ」と呼ぶその男とマチュは「キラキラ」という名の共通世界で繋がっていた。通信端末は必要としない。「想い」が繋がっているのだという。人はそれを「ニュータイプ」と呼ぶかどうかは、まだわからない。

——こっちだよ、おいで。

シユウジが道を授ける。コロニーの下層へつながる連絡道路へつながる扉までマチュはたどり着く。

——鍵は空いているよ。

ギィーという鈍い音を立ててドアが開かれる。非常灯のみが赤黒く照らす暗がりの道をマチュはシュウジの導きにより走っていく。彼女の後には雨水の足跡がしっかりと残る。

重たく厚い最後の扉、ハ重のシリンダーロックが外れる。赤いガンダムとまばゆい照明がマシユを出迎えてくれた。

「シュウジ！」

マチュの目線の先には、青いタンクトップが見えていた。

「やあマチュ！……ズブぬれだね」淡々と彼は答える。

「すごい雨ッ！コロニーの予定になかった！どうなってるの！？」

彼女の赤い髪は濡れているのもかわらず元気にハネている。いつもの艶はなく、光に反射する事はなく、下地で染めたキウイ色のベースカラーはその姿を見せない。

「天気は予定なんてない」

「けどコロニーじゃ……」

「地球に天気は予定なんてないよ、できる事としたら気象を観測し予測する事ぐらいだ」

赫い瞳が彼女を見つめる。その瞳は鋭くもあるがやさしさを帯びていた。マチュはこの赫い瞳に

メロメロである

「そっかあ：地球って、雨とか雷とか。天気がいろいろあるらしいね、雪なんて見たことない」

「地球には低気圧が渋滞して季節じゅう雨がやまない地域があるよ。砂塵の嵐が止むことがない場所があったり。一年を通して雨が振る事がない砂漠も存在する。不思議な惑星だよ、この地球は。そこで僕達は産まれ、育まれた」

まるで他人事かのように地球を語るシュウジにマチュは疑問符を投げかけた？

「達観しているねシュウジは。もしかして宇宙人かナニかなの？地球を侵略するエイリアンとかそんな感じ？」

シュウジしばらく黙り込む。その黙する様子がまた神妙で現実味を帯びていた。とマチュは後述する。

「宇宙人だったら？僕のことキライになる？」

「もっと好きになる♪」

マチュはゴキゲンだった。突然振り出した大雨も、マチュのとっても僥倖の一つに過ぎない。何故ならシュウジに逢えたのだから。

彼女にとっては、すばらしい「雨宿り」だったのだ。

「ズブ濡れだね」シュウジは改めて口にする。

「うん、今着替えるから、タオル貸して！」

マチュはガンダムに無造作に干してあったタオルを手取る。全長18メートルの巨大人型殺戮ロボットも、彼にしてみればただの物干し竿にすぎない。

「いいけど、昨日ボクが使ったやつだよそれ」

「…なおさらい！！！」

「新しいタオルだすよ！」「いい！これがいいのシュウジ！」

マチュ黒いタオルを強引に取り、顔いっぱいタオルを広げる

「シュウジのおいだああああ！！！！キラキラだあ！！！！」

中性的な顔とは裏腹に細躯ながらもしっかりとした男の子らしい骨格がある。そんなシュウジの匂いを全身に浴びるアマテ・ユズリハの姿があった——ただのジャンキーだった。

「恥ずかしいから新しいタオル出すよマチュ」

「いいよいいよ！ちょっと待って制服脱いじゃうから！引き出しにある着替えもってきて」

シュウジに堂々と「指示」するマチュの姿があった、ワシヤワシヤと髪をぬぐい、雨を吸い上げ、鉛のように重たくなったセーターを脱ぎ捨てる。濡れた制服もパパッと脱ぎ捨て。下着も脱いでしまう。

——産まれたままの姿にバスタオルを巻いたマチュの姿が顕（あらわ）れる。

「はい着替え。風邪引かないでね」シュウジが差し出す。

同世代女子の裸体が視界いっぱいに広がっているが、シュウジには動揺する気配はまるでなかった。心の音は「風」そのものであった。感情の波もベタ波だった。

ここで多くは語らないがシュウジとマチュ。隠れ家を共有する二人にはもう裸を見てどうこうするような関係性は存在しなかった。それほど、深い仲になっている。——とだけ補足しておく。

シュウジの前でいそいそと着替えるマチュ。オーバーサイズシャツとホットパンツ姿に着替えた姿があった、何故かマチュの着替えがシュウジの隠れ家に存在する。その程度の仲にはなっ

いた。同じ「キラキラ」の海を泳いでしまったのである。互いの関係を深く潜るには、そこまで時間はかからなかったと言う。

「外は大変みたいだけど。これは恵みの雨だ」

「なんで？」マチュ訝しむ

「水だよ、水は貴重なんだ」

シュウジは隠れ家の一角に佇む黄色い箱を指差す。プラスチックでできたおおきな四角形は箱と言うには大きすぎる……タンク？と言った方がいいのかもしれない

「あれがボクの生命線さ、この水はほとんど雨水で賄われている」

「雨水が流れてくる雨樋（あまどい）みたいなのが地上に生えていて。そこからここまで流れてくる、きつと今晚の雨で満タンになる。幸せだ」

「えっ！？雨水飲むの！？」

マチュは驚愕した。そうか、ここはコロニー市民とかニヤアン達みたいなかわいそうな難民とかそういう一般の概念が通用しない世界。「コロニーの隙間で勝手に棲む男『シュウジ』それだけが存在しているのだから、常識で測ってはいけない。とマチュは自戒する。

「ろ過はするよ。あとほら、これを見て」

シュウジは〇〇くらいの大きさはあるタブレット（錠剤）を握っている。それを黄色い水槽の中に投げ込む。シュウシュウと音を立てながら白いタブレットが泡へと消えていく。

「浄化剤。簡単にいえば塩素だよ。これで普通に飲める飲水になった。マチュも飲む？」

シュウジはウォーターサーバーからコップへ水を注ぐ。

「飲んでも大丈夫なの？」 「ボクはずっと飲んでいるけどお腹を壊した事はない、それにマチュはもう飲んでいるよ。キッチンで蛇口から出るおみず。あれ全部雨水だから」

「！？」 マチュの表情が変貌する。

何度もシュウジの隠れ家に遊びに行った。料理もしたし、お水も飲んだ。

「私もニャアンも平気だった！つまりそういう事なのだろう」と納得するマチュはコップの水をグイッと飲む！

「おいしい！」 「うん、普通のお水だからね。地球の水が飲みたいなあ」

「ミネラルウォーター？」 「そう、高いんだよ。地球の水」

宇宙コロニーは水素を様々な場所で使用する。化学反応を起こすその副産物として「水」は大

量に発生する。なので宇宙市民は「純粋な水」にこまることはない。

「宇宙の水にはミネラルはないからね、でも1000m一本500ハイトは暴利だよね『ミネラルウォーター』」

イズマコロニーでも地球のミネラルウォーターを手にするには大枚をはたかないといけないらしい。

「けどさシュウジ！地球に行ったら地球のお水飲み放題だよ！」

「水のある所にいけばね、湧き水なんか飲んでみたいなあ…地下水…井戸、人類が文明を持ち始めて最初の発明。井戸が人類の定住を可能にしてくれたんだよ」

「いど？井戸はよくわからないけどとにかく地球！地球いこ！みんなで！」

「そうだねマチュ、クラブと貯金。がんばらないとね」

「クラブ頑張らないと！ニヤアンの市民権も買わないと！」

イズマコロニーはソドムとゴモラの街であった、金があれば市民権などいくらでも買える

「これから大変だねマチュ」

「うん、けど楽しい！学校より楽しい！」

マチュは子どものようにはしゃぐ。そんなマチュをシュウジは抱きしめる。

まだ憧憬が残るその姿は少女と成人の間にある不確定で不安定な存在だった。そんな存在を抱く事はシュウジにとって、とても不安な事だった。明かりのない夜道を共に歩くような、そんな不安がよぎっていたのだ、しかし。幸せだった。

「ちょっとシュウジ！なに！？」マチュはシュウジに抱かれていた。シュウジ肌見放さず身につける大きなグローブが彼女を包み込む。そして、いつもように彼女のつむじを嗅ぐ。

はじめて邂逅したあの日と同じだ！

「うれしい」

そうとだけマチュは呟いた。マチュはシュウジに抱きつく。

シュウジの隠れ家は静かな場所にあった。双つの心臓がドクドクと鳴る音だけが聞こえる、心臓弁がヘビメタを熱演している。ドキドキしているのだ！神聖な瞬間なのだ！

（わたし、この人と…こんな事してる…これで本当にいいのかな？）

マチュは不安に思った、非行少女なりの不安だった。幸せすぎて不安にかられたのだ。

不安と動揺が入り乱れる二人を、ガンダムとコンチだけが見守っていた。

「マチュ、冷たいね」シュウジが切り出す

「えっ！？何が！？」マチュ動揺する。身体を預けることへの不安を彼に悟られたのかと思っ
いた

シュウジ、マチュの掌を握る。

「冷えてる…マチュの軀（からだ）雨に当たったからね。」

「うん、あまり考えてなかったや」

「風邪引いたらいけないよ。軀を温めよう。シャワーを浴びよう」

「う・・・うん」不明瞭な回答しかマチュにはできなかった。

電化ボイラーがポンポンと音を立て、動き出す。

「水については心配しなくていいよ、今日の大雨でこの先水には困らない」

「それは・・・わかったけど」マチュ、言葉尻がどこか細かい。

「どうしたの？」シュウジは訝しんだ。

「いっしょに・・・はいるの？」マチュ、少女一人せっぱいの『間い』であった。

「その方が水を節約できるよ、それにマチュとシャワーを浴びるのは、好きだ」

あっけあかと答えるシュウジの姿に、多分私達の間に『壁』という物は存在しないのだなあと確信した。あるとすれば肉体的な壁。だけど精神は、キラキラで繋がれている。

——恥ずかしがっているのは自分だけだ。そんなもの捨ててしまおう。

「オユガワキマシタ」お決まりの電子音がボイラーから聞こえる。

マチュはさっき着たばかりのシャツとパンツを脱ぎ捨て、浴室へ向かう。

シュウジもイソイソとタンクトップとツナギを脱ぎ、畳んでから浴室へ向かう。

二人、隔たりの内空間でシャワーを浴びる。シュウジの家のお風呂は浴槽がない代わりに大き

なレインシャワーが構えられていた。

お互い、抱き合いながら湯を浴（あ）む。この大雨はとてもあたたかく、そして気持ちいい。なにより——幸せだ！

恵みの雨に感謝しないと。この雨は、ふたりにとっての、ほんの幸せ。

おそろい

「マチュ：シュウちゃんの匂いがする」

ニヤアンの一言を咀嚼するまでマチュは長い時間を要した。実に30秒。

「どうしたのマチュ？」

ニヤアンは心配そうに屈むんでニヤアンの顔を覗く。純粹無垢な魂がそこには存在した。「きききっ気のせいじゃないかな!？」

マチュは嘘を付くのが苦手な女の子だった。ㄇ年間、ずっと自分にも他人にも正直に生きていたからだ。その正直さで人を傷つける事もあった、傷つくこともあった。

人に懐かれる事もあった、今日の前にいるニヤアンだ。懐いてくれている。友達。人に好かれる事もあった、シュウジー——シュウジだ。好き。

わたしはシュウジの事が好きで、シュウジはわたしの事が好きなの。

その事実は絶対的に揺るぎないものであった。『蜜月』の二文字では済まされない関係が存在する事は周知の事実だった。

「そうかなあ：マチュからシュウちゃんの匂いがする」

ニヤアンは一瞬、マチュの髪の毛の匂いを嗅ごうとするが躊躇う。その行為が何を意味しているかニヤアンは知っているからだ。シュウちゃんが好きな人に対して行う求愛行為。それが「人の髪を嗅ぐ」なのだから。正確にはマチュつむじを嗅いでいた。

ニヤアンはマチュの髪の毛ではなく、服の匂いを嗅ぐ。シュウちゃんの香りがした。

「マチュ、いまは幸せ？」

「幸せだよ！ニヤアンだって幸せじゃない？」

「私は幸せだよ？軍警は平気で人を殴るし、明日の仕事があるかどうかもわからない。けどマチュとシュウちゃん三人でいる時は幸せ」

決して穢してはいけない魂であるとマチュとシュウジが約束した魂がそこには存在した。

ニヤアンの悲しき過去。そして悲しき現在がマチュへ降り注ぐ。護らないといけない。

「ありがとうニヤアン」

「今のマチュの匂いは好きだよ。やさしい匂い。シュウちゃんの匂い」

「そんなに言われるとハズいよニヤアン」

マチュはニヤアンの脇をかくく肘で小突いた。剥き出しの女子高生らしい可愛らしさがそこには存在した。ニヤアンの幸せそうな表情を見てマチュは安堵する。

「『おそろい』はやっぱりマズいか」マチュ、我が身を五分反省する。

事の始まりはシュウジの隠れ家であった。小型宇宙艇『ランチ』でシュウジは生活している。

わたしみたいにお母さんに洗濯やご飯やらを頼っている訳ではない。ニヤアンと同じく一人暮らしだ。シュウジは「ガンダムと一緒に棲んでいる」と言うが、無機物たる軽金属「ルナチタニウム」とカーボン素材で身を固める全長18mの巨大殺戮ロボット。

それと一緒に暮らすのは実質一人暮らしと同じだ。

そこらへん大人だなあ、と思う。食べる事も寝る事も保証されていない中、ニヤアンとシュウジは暮らしているのだから。わたしなんかちっぽけな恵まれた少女でしかない。

ニヤアンの生活の様子は日々から垣間見えた。普段変な制服を着ているけどニヤアンはああみえて結構オシャレさんだ。終日学生服にお気に入りのセーター姿で歩くわたしと違って私服で街を歩いている。レパートリーも多い。軍警に暴力に屈したりと辛い事ばかりだけど、『生活』が安定している事がわかる。

問題はこのハラヘリムシだ。どうやって生きているのかよくわからない？収入は？昼間はグラフティとクラブ以外なにやってるの？

地下の隠れ家。多重シリンダーでロックされた扉を明けるたびに聞こえてくるのは「マチュおはよう、おなか吸いたなあ」だ。生活力がニヤアンと比べてあきらかに低い。

まあ：ハラヘリムシに料理を作ってあげるのも楽しみなんだけど！とマチュは嬉しそうな顔。食欲と排泄欲と創作意欲は満たされているとして、人間として清潔なのか？という問題がある

――。

答えは、半分清潔。半分不清潔。

シュウジは毎日スプレーと闘っている為、常にペンキめいた塗料が服につく。真新しい物から古い染みまでいろいろある

「ペンキ酷いね、洗濯はどうしているの？」

「溶剤をかけたら取れる」有機溶剤に洋服漬け込んだら洋服がとけちゃうよシュウジ！

「このツナギはそんなにヤワじゃないよ。ガンコな汚れ、これはウタマロ石けんで擦って取るんだよ」

シュウジの洗濯術は結構本格的だった。

シュウジの家の水回り。普段は地下道を流れる雨水を溜めて。それを生活用水にしている。飲料水も雨水だろ過しているらしいが不清潔。ただし洗剤はピンク色の粉石鹼。清潔かな？

「業務用だよマチュ、でっかい箱でまとめて買うんだよ」なかなか清潔。

隠れ家でトイレを借りた時とか料理をする前にピンクの粉石鹼で手を一度洗ったけど、翌日手が荒れた。掌の掌から油分が剥離された感じだった。洗浄力が高いのも問題である。

お風呂には入っている。「毎日じゃないよ」とシュウジは言う。不潔だが咎められない。

『水』は彼にとって貴重な存在なのだ。コロニーの雨は計画的に降るとしても一月に2回か3回だ。雨水も計画的に使わないといけない。その為毎日入るのはちょっとアブない。らしい。干からびて死ぬ

けどわたしと肌を重ねた時はシャワーを貸してくれるシュウジの姿があった。「マチュと一緒になら節水になるしね」やぶさかではない。

シュウジとそういう関係になっている自分が好き。

シュウジのお風呂事情は簡素だった。固形石鹸一個で身体の全てを洗う。洗髪も洗身もすべて白い角張った塊に委ねていた。

わたしも当然髪を洗う。石鹸で洗うと髪という髪から油分が抜け落ちた。家に帰ると髪逆立ちし櫛が髪を通らない！元に戻るまでに3日ほどを要した。

ヤバイよシュウジ！洗いすぎも問題だよ！清潔であるが不清潔！けどシュウジの髪はいつもどこかシットリとしていた。ジェジーが買っているポメにどこか似た匂いがする

くさいという訳じゃない。ジェジー、口は悪いがポメラニアン通称「ポメ」を大事に扱っている。

「犬はなあ：毎日風呂に入れたらお肌が荒れるんだよ：野生、自然界に石鹸なんてまず存在しないからな。だから石鹸で洗うのは月に1回。それ以外はお風呂にいれるだけだ、丁寧乾かしてついでに爪を切っておしまい」

なんて、犬について熱く語る時がある。ポメはかわいい、ジェジーが手をかけているからだ。そのポメとシュウジが似たような匂いをする。野性味なのかなあ。

固形石鹸で身体を禿ぐ生活。シュウジは大丈夫かもしれないが、私が大変だ！という事であったの私は家にある洗剤やらシャンプーやらボディークリームをシュウジの家へ持っていった事がある。持っている一番大きいバッグに入り切らなかったもので洗濯カゴに入れて持っていった。

「そこまでしなくていいのに：」とシュウジは訝しんだ。

「シュウジも髪傷むんだよ？

「傷んでも別に困らない」「私は困るの！」「複雑だなあ」いつものやりとり

たにし柔軟剤の匂いを嗅がせてみる。イズマコロニーのスーパードでは売っていない。お取り

寄せのいい奴だ！値段はお母さんが買っているから見たこと無いけど。ためしにスマホで調べてみる…600mlで100ml？高すぎる

※シャワールームでシュウジの身体を裸（みそ）ぐ安石鹸は一個「ハイトだと思ってください

「いい匂いがするね」とシュウジは褒めてくれた。うれしい

「これなら使ってもいいよ」「うれしい！」ちょっと飛び跳ねてしまった自分がいる。

シュウジのツナギやら下着やらを今にも壊れそうなシュウジの洗濯機に投げ込み、持ち込んだ柔軟剤と洗剤で洗ってあげる。シュウジの下着がちよっとくさい。シュウジの下着からはきつとシュウジのキラキラの香りがする…嗅ぎたい！けどそんな事したら変態じゃん！断腸の思いで洗濯機に投げ入れる。気持ちばかり酸素系漂白剤を追加。

その後は人間の洗濯。シャワーだ。シャワーの前にひとしきり恥ずかしい事は済ませた。

何度も一つになって、私も果てたし、シュウジも何回も果てた。ゴムとかそういうのは知らない。

お風呂、シュウジの産まれたままの姿がはずかしくなくなって久しい。

「昔は塗装ブースだったんだけど、お風呂に改造したんだ」というシュウジ渾身の浴室らしい。

「シュウジ座って♪髪の手洗ってあげる♪」バスタブはないけどレインシャワーが鎮座するゝ坪位の浴室でシュウジと戯れる私がいる。バスタブあったらいいのに。

「ありがとうマチュ」とシュウジは風呂椅子に座る。ステンレス製の風呂椅子はどこか名前に反して錆びている。座面がプラスチックだ、おしりは痛くなさそうだ。

シュウジの髪の手をワシワシと洗う。自分の髪を洗うのとは訳が違った。ちょっと難しい、けど悪い気はしなかった。美容師さんって毎日こうやって髪を洗っているんだあという気持ちとシュウジに尽くしている自分にちょっと酔っていた。心地よい。

シュウジの頭ちよつとベトベトだったのでシャンプーは二回！

「トリートメントするよ、これ流していいタイプだからベトベトしないよ」

「そこまでしなくていい、僕はできるかぎり自然なままがいいんだ」

「えー！髪の手傷むよ！？」「マチュが優しく洗ってくれたから大丈夫、ありがとう」

嬉しかった。その言葉が嬉しかった。

「お礼にマチュの身体を洗ってあげるよ」「！？」「背中向けて、マチュ」

そのままシュウジに身体を裸でもらった。悪い気はしなかった。むしろ心地よかった。

結局全部洗ってもらっちゃったもんね、レインシャワーという豪雨の中。□づけをした。

「シュウジの身体も洗ってあげる♪」「おちんちは自分で洗いたいな…おちんちはボクの友達なんだ」

「キミのおちんちん私の友達でもあるけど?」「そうだね、マチュの友達でもあるね。よろしくねマチュ」

シュウジの身体も洗ってあげた、シュウジの陰部を洗浄する。皮も剥いて優しく洗った。それから、洗濯が終わった服をガンダムさんの上で干す。その間私達はすっぱんぼんだ。

恥ずかしい姿でシュウジとガンダムの上で過ごした。シュウジはガンダムの顔にうっとりしている。

クラブという殺し合いの中で傷ついているはずの装甲板がどこか暖かく感じた、いや冷たかった。

シュウジの隠れ家にはドライヤーという存在がない、自然で乾かすと傷むんだよなーと思いがらも家のお風呂の後、熱心にドライヤーなんてかけていない自分自身がいる事に気づいた。まあいいや、シュウジと一緒にだし。

「乾いたね」と言ってシュウジはツナギとパンツを触る。乾いているようだ。シュウジの隠れ家は湿り気はないがどこからか漏れてくる排熱音でほのかに暖かい。

「この暖かさで僕は生きているんだよマチュ、この薄い壁の外はマイナス300℃にまで達する宇宙空間だからね」

シュウジは淡々と語る。

「あれ？」

「どうしたのシュウジ？」

「マチュの匂いがあるね」シュウジは自分のツナギに顔を埋めながらそう答える

「マチュの匂い……ステキな匂いだ……」シュウジはしげしげと味わうように匂いを愉しむ。

「そんなに嗅がないでよ」「でもいい匂いだよ?」「それはそうだけど!」

「マチュの匂いに包まれているこんなにステキな事はないよ——」

——水底のように透明な翠色の空間が眼の前に広がる。キラキラだ。

文字通り産まれたままの姿でシュウジとキラキラの海を泳ぐ。

「おそろいだねマチュ」

「おそろい？」

「僕とマチュは同じ匂いで包まれている。同じ匂い、同じ身体が重なり合う。ステキな事だ」

「えっ！？やだちよっとはずかしいよ！？」

「はうずかしくない」

シュウジの赫い瞳が私を見つめる

「すぎだよ、マチュ」

キラキラの中で二人。重なり合う。同じ匂いを身に纏う。それはとても美しい事だった。

という背景がマチュとシュウジにはあった。それから、マチュは通販で柔軟剤やら洗剤やらボディソープからすべてそろえた

すごい値段になったので、クラブの貯金から切り崩した。ごめんねニヤアン。次のクラブで絶対取り戻すから！

お母さんが何気なく買っていた洗濯溶剤はすべて高額商品だった。こんな高級品にまみれて生

活しているんだ…という自分に嫌悪感を感じるが、一〇秒ほどで払拭した。

「これでシュウジとキラキラできるんだもん！安い買い物だ！」

まったく躊躇しないあたりに、マチュという人間は自分に正直に生きているという姿が見える。シュウジとおそろいの匂い。シュウジと『おそろい』って所がマチュは気に入っていた。

話を冒頭に戻そう。

だがニヤアンにバレてしまった。どうしよう。ニヤアンのサラサラヘアすごいよなあ…ヘアケア大変だろうなあ…まあいいか。バレても平気。「やさしい匂い」だって褒めてくれた！それに何より「幸せ」って言うてくれた。ニヤアンからその言葉が聞けるの嬉しいなあ。

そして明日も、明後日もきっとシュウジの家にお呼ばれするだろう。洗濯をしてお風呂に入る。毎日じゃないよ？「水は貴重だからね」…ってシュウジの口癖が移っている！

いち少女のはしゃぎっぷりがどこか憧憬めいて見える。イズマコロニーは今、夏を迎えようとしている。

——人工の大地であるコロニーに天日干しは似合わない。みな、乾燥機で済ませる。

けど、私とシュウジのお洗濯はいつもガンダムの上で天日干し。ルナチタニムと原子力電池のお日様がポカポカ照らしてくれている。

おでかけ

「私達、一応付き合ってるじゃん？」

「付き合うって何？」

シュウジがいつもの謎めいた瞳で問いかける。「付き合う」と意味をわたしに投げかけてくるんだ。

そんなの、言わせる方がハズいじゃん！女の子に言わせんなって言うの！

「愛し合ってるじゃんッ！」

恥ずかしい告白だった。なんでいつもこんな恥ずかしい告白させられるの！

まあ、うれしいけど。

「そうだね、僕達は愛し合っているね」

シュウジが答えてくれる。うれしい。「愛し合っている」という言葉がシュウジの口から出てくる事が、わたしにとって、本当にうれしい事だった。だったの！

「で、僕は愛し合ってるし？キミが言う付き合っている事も事実だよ？それがどうしたんだ

いマチュ」

「どうしたんだじゃないよ！付き合ってるならそれなりの事をしようよ！」

何言ってるのわたし——！。

はい、アマテ・ユズリハは告白します。これは神に罪を告白する告解（こっかい）に近いものかもしれない。神様なんて信じていないけど。

わたし、ことアマテ・ユズリハはシュウジ・イトウと「恋人」として文字通り恋愛関係にあります。身体も繋がっていますし、心も繋がっています。そしてシュウジがイメージする翠に光る「キラキラ」の中で毎日のように泳ぎ回っています。これ以上幸せな事はありません。

そんなシュウジとわたしがいます。イズマコロニーは今、キラメキまくっています、

「それなりって？」

「『デート』くらい連れて行って事！」

シュウジと二人、隠れ家のランチで過ごす。それはとても幸せだった。きっと俗に言う「お家デート」だった。ニヤアンもたまに来てくれるし何より二人、三人で過ごすのは楽しかった。ハ

ラペコムシのお世話をするだけで多幸感に満ちあふれている。まさに飯事（ままごと）だ。

それだけじゃフェアじゃないじゃん！ずっとシウウジの面倒みているわたしの気持ちにもなってもらえます？たまにはわたしを繕うとする姿勢がほしいなあ……って思ったりするだからわたしのお世話もして欲しいわけ！

って考えている事も全部シウウジにお見通しなんだろうなあ……お見通しだった。

シウウジはわたしをギュっと抱きしめた。シウウジの匂いが胸いっぱい広がって気持ちがいい。抱き合って、ああこのまま恥ずかしい事しちゃうんだろうなって思った。いつものようにキラの中を泳ぎながら果てる。そうやってシウウジの肉体に誤魔化されちゃうだ……と諦めかけたその時

「いいよマチュ、おでかけしよう。「でーと」はきつと楽しいものだから」
シウウジの優しい一言が溢れ出した。

「そッ！そうだよッ！たのしいよ「おデート」！おでかけは楽しいんだよ」

「じゃあお風呂入ってから行こうか！」

そうだね…そうだね！お風呂入ってからいこうね…シュウジの言う通り一緒にお風呂に入ってから出かけた。

——今日はバッチリメイクして来た訳じゃないから許した。これがマジでおデート気分でガチメイクしていたらかなりアタマは怒髪天だったと思う。お風呂入ったらメイク全部落ちちゃうじゃん！

シュウジとお風呂。気持ちよかった。そうとだけ伝える。シュウジのおちんちんを洗うのはわたしの役目だ、シュウジは、おちんちん洗うのをサボる傾向がある。ちょっと臭い。だけど嫌いな匂いじゃない。むしろ好きだ。けどカスみたいなのがついてるとさすがに萎える。シュウジのおちんちん洗う係はわたしなのだ！

まあわたしもいつもの制服だしシュウジもいつものツナギ姿だった。気合いの入ったデート日和（ひより）ではなかった事をここに告白する。

「おでかけ」、そうお出かけたかったただけなのだ。

「でかけよっか！」シュウジいつものつなぎ姿

「アンタそれしか着るものないの!？」さすがにオメカシして欲しかった

「そうだね、コレ以外だと寝巻きになっちゃうね」とシュウジ

シュウジ・イトウ。推定17歳。ツナギ一丁で生きている男だった。

「今度なんか服でも買いに行こうよ、クラブの稼ぎもあるし」

「あれは地球旅行の資金——」

「シュウジの服代としてちょっと使う分にはニヤアンだって許してくれるよ。今日は服は買わないけどおでかけ!おでかけ!」

「おでかけもいいね…スプレー持っていていい?」

シュウジ塗料スプレーと大きな手袋を用意する。

「ダメにきまってんじゃない!わたしのおでかけに集中してよ!わたしよりグラフィティの方が大事な人なの?」

ちよつと怒った、別れたいのって聞こうとおもったけど。わたしは別れたくないし。

なによりシュウジはわたしが好きで。わたしはシュウジの事が好きなのはわかっていたから。

そんな事冗談でも切り出せる訳がなかった。

「コンチ、ハロ、留守番おねがいね」と言うのと二つの箱と玉は電子音で答えてくれる。

「わかったよ、まあいつもの感じでいいかな？」

「いつもの感じ？」

「ボクのお散歩ルートだよ。マチュはどんな所行きたいの？」

「うーん：映画って気分じゃないけど：おでかけだから映画もいいし街中を歩くのもいいし」

「ボクが『おたずねもの』だって事を配慮して考えて欲しいな」

シュウジの目はマジであった。シュウジというか「赤いガンダム」は懸賞金がかけられている文字通りお尋ね者であった。シュウジの顔は捜査機関に割れていないらしいが。あまり表通りを歩けるような少年ではないらしい。虞犯少年？ いやスペースコロニーにラクガキってもう犯罪か！ 犯罪少年じゃん！

：犯罪少年と付き合っているなんて学校にバレたらどうなるのかな？ まあそんな事どうでもいいや！ ニヤアンもなんか軍警に追われているけどフツーに友達だし！

わたし、前科とか気にしない感じで生きていこうと思う！

——シュウジと二人。お金が溜まったら、たとえ闇ルートであってもニヤアンの市民権だけは買おうと約束していた。

ニヤアンの笑顔だけは護りたいと二人、誓い合った。市民権を買うにはアンキーが仲介に入ららしい。どれだけ中抜きされるのか、それだけが怖い。

とにかくシュウジに合わせて街を歩く事にした。普段使われていない氾濫防止用の下水管から外へ出る。コロニーが反射する太陽光が眩しい。

まだ午前〇時前だった。お母さんには家じゃ集中できないから塾の自主室で勉強するだけ伝えて朝からお出かけた。お母さんは休日出勤で家にはいなかったし、バッグには参考書も教科書も入っていないかった。とんだ非行少女だが許して欲しいなあ。

——いままでいい子に育ってきたんだから、ちょっとした火遊びくらい、許してよ。

もちろん、シュウジとの付き合いは火遊びなんかじゃない。マジで考えてる。：シュウジと結

婚するのわたし！？マジで！？子どもとか作っちゃうの！？とかこの男、人を養う事なんてできるのだろうか？やっぱわたしが働くのかなあ。やっぱ大学、出とかないとヤバイ感じか！ニヤアンもなんか「じおんのだいがく」に行きたいって言ってたなあ…ジオンがあるサイドでってなんて物騒な気がするけど？大丈夫かなあニヤアン。

「電車賃ちょうだい」とシュウジ、今日のおでかけの為に、お小遣いとして500ハイト（5万円相当）用意してきた。

内訳はこうだ。わたしの小遣いが100ハイトに、クラブの稼ぎからの借りが400ハイト。「ニヤアン、次のクラブで絶対400ハイト返すからちょっと貸して！」という泣きの400ハイトであった。

「いいけど…普段メトロ使わないの？」と10ハイト（1200円相当）コインを渡す。

「この10ハイトの為に難民街の追い剥ぎは共は人を殺すと」ニヤアンから聞いた。結構貴重な。「メトロ使ったら街のラクガキが見れないんだよマチュ、僕は普段歩くけど、マチュはきつと疲れちゃうよ」

シュウジの優しさが見えた瞬間であった。わたしを氣遣ってくれているだけでかなり嬉しい。

「普段どこまで歩くの？」と聞いてみた

「難民街手前、リトルチャイナ（中国人街）までかな。コロニーの端から端まであるく形だね」とシュウジ

——直径6.4kmのスペースコロニーは、113.5秒に1回回転し、1Gの遠心力を生み出している。いつもの口上だが、これは円周の話である。全長はまた違うのである。みんな小学校の時に習った円柱の体積の求め方を思い出して！

ちなみにイズマココロニーの長さは20kmくらいあります。

狭いようで広いのがこのコロニーだ、端から端まで歩くとハーフマラソンくらいになる。

女の子の脚で歩くのはちょっとシンドい。というかりトルチャイナにまで着く頃には夕方か夜になっているだろう。

メトロで行くのが正解だった。シュウジの隠れ家の最寄り駅「エアドッグ前」からメトロに乗

る。エアドッグ前は閑散としていてメトロに客は誰もいなかった。

シュウジと仲良く、ベンチシートに座る。ガランドウの車体が動く度に軋む。

「メトロに乗って正体バレないのシュウジ？」と聞いてみる。

「まあ顔は割れてないからね、マチュを疲れさせるくらいならメトロにのって捕まった方がマシさ。だってキミにとつての大事な「おでかけ」なんでしょ」とシュウジ

大事だったけど、シュウジが捕まるのは大変だ！元の子もない。

シュウジがわたしの手を握った。うれしい！だけど、シュウジの手は震えていた。

「ちょっとこわいかな」と漏らす。

「大丈夫、大丈夫だよシュウジ」

わたしはシュウジの頭を撫でた。少し、恥ずかしそうだけど。ニッコリと笑うシュウジの顔があった、そして、膝枕でその頭包んであげた。講習の面前で膝枕。全然恥ずかしくなかった。

大胆な行動だったけど、メトロには誰も乗っていないから誰かに見られてる感じはしなかった。

一駅、五分間だけの神聖な瞬間であった。

「次はエアポート前、エアポート前」というアナウンスと同時に膝枕は終了！

エアポートは他のコロニーとの玄関口だ、絶対人が入ってくる！当然キャリアを持ったお客さんがいっぱい入ってきた。

二人、顔を赤らめながらモジモジして、リトルチャイナ最寄り駅の「リイクニ西二丁目」前まで乗った。あのいつも平然としているシュウジの顔が赤くなっていたのを、今でも鮮明に覚えている。

このメトロでの出来事はきっと。おかあさんになっても。おばあちゃんになっても。鮮明に覚えていられるだろう。

シュウジのおよめさんになっても、なれなくても、絶対に覚えている！わたしの脳というノートにキツチリ刻まれてしまった。刻印のような記憶である。

メトロは移動手段にすぎない！本番の「おでかけ」なんだけど、リトルチャイナには出店がたくさん並んでいた。装飾品とかお土産屋もあったけどなにより飲食店がダントツ多かった。ほぼ

飲食の店飲茶（ヤムチャ）のお店がメインだった。

シュウジはとにかく食べまくっていた。最初は私も合わせて食べていたけど三軒目からギブアップ！乙女の胃袋を何だと思ってるんだこのハラペコムシは！

わたしはパクパクと葱餅を食べるシュウジをテイクアウトの烏龍茶を飲みながら見つめることしかできなかった。今より、もうちょっと強靱な胃袋が欲しいなって思った。

「マチュおいしいよ？葱餅食べようよ」とシュウジが食べさを渡してくれた

「葱餅食べようよ、葱餅を食べないなんていかななものかと」とシュウジがいうので、食べさしだけで一口頬張った。間接キスにはもう慣れてしまった間柄である。

おいしかった。お腹いっぱいじゃなかったらそのシュウジの掌サイズの葱餅を丸々ひとつ食べたい位だった。

「おいしいね」と付け足しておく。

「マチュとこうしておでかけできて、幸せだよ」とシュウジ。

「私も幸せだよ」とシュウジの手を力強く握る。何かわたしの中で光った。そして突き動かされてしまった。

思わず立ち止まるシュウジの唇を――。つま先をピンと立てて、精一杯背伸びする。

そして、口づけ。葱餅の油でベタベタした唇に口づけなんてサイテー！と思いがらも、身体が動いてしまった。今ここにいる雑踏に私達が愛し合っている事を記さねばならない。そう身体が言っていた。きつとキラキラの奥底からそういうお告げがあったのだろう。

「うれしいね」とシュウジもお返しといわんばかりに舌を交える。

ステキな瞬間だった。この一時だけ写真に切り取って。飾りたいくらいステキだった。

コンチを隠れ家に置いて来てしまった！コンチがいたら撮影してくれたのになあ。

「おでかけ」に誘ってよかったな。今私とシュウジは愛の啄みで繋がっているんだ。

――それを、再確認できた。今日はとってもステキな日。

やきもち

「嫉妬なんかしない」

なんて言えば嘘になる。あの日、ニヤアンがジークアクスに乗った夜。シュウジと一緒にクラブという戦場で舞ったあの夜。わたしは嫉妬していたんだ。

ニヤアンにじゃない。シュウジと誰かがマブになる事だった。コクピットでわたしを抱きしめてくれる腕（かいな）。あれはわたしだけのものだったとばかり思っていた。

独占欲だった。『ほしがり屋さん』だったんだなわたしって……ちょっと醜い自分がいる。

けど、もうそんな嫉妬に狂う必要はない。今はシュウジもニヤアンもみんな一緒なのだから。

——南の孤島、シュウジはすぐに見つかった。終末装置なんていってもただの男の子なんだよ、わたしの事が大好きな男の子。だから、帰ってきたんだ。わたしの胸の中へ、私の唇を指して。愛を欲して戻ってきた美少年を受け入れるしかわたしには術（すべ）がない。

三人揃ってなかよく暮らしています。よろしくッ！

昼下がりにはニヤアンはイヤホンで音楽を聞きながらお洗濯をしている。南の島はすごい！洗濯物が数時間もしない内に乾く！おかげで毎晩シーツを洗濯している…まあ別の意味で洗濯しないといけないんだけど。

ニヤアンの顔はいつも穏やかだ、幸せを掴んだって顔してる。うれしい、ニヤアンの幸せがうれしい。わたしは洗濯物を畳む係とお昼ご飯係。お昼はだいたいカレーライスになる。簡単だし失敗しないからね！

毎晩シュウジと愛し合っている。南十字星が輝いているのもおかまいなしに愛し合っている。粘膜の交換といえばみんな理解してくれるはず、これ以上説明するとエッチな感じになっちゃうじゃん！だから「粘膜の交換」それだけ。キスだって粘膜の交換ですから！

枕元でシュウジはいろんなお話をしてくれる。毎回出会う「不幸せなラアラさん」の事。小惑星を押し返すシャアさんと白いガンダムの話が一番面白かった。まるで映画のようなお話だった。

あの頃のシュウジが殺すしか選択肢がなかったラアラさん達。

「彼女の幸せの為にボクは彼女を殺めすぎた。彼女の為とはいえ独善的だったね」

とシュウジは話をしめくくる。

「でもさ、もう殺さなくていいじゃん？」

「マチュがこの世界にボクを引き止めてくれたからさ」シュウジ淡々と答える。

「それもそうだけど、シュウジがさ、目覚めてくれたからなんだよ」

「目覚める？」

「愛とか……そういう感情だよ、たとえばの話だけど」

そう言って、わたしはシュウジと唇を重ねる。あの日と一緒にだシュウジを抱きとめて。そして重ねる。

あの日と違うのは舌と舌を絡めている事、恋人同士のキスになっていた。

「あの日、私がこうやってキスしなかったら。帰って来る気なかったでしょ」

「うん、マチュの世界は諦めていたよ。ボクはこの世界にはいられないんだって思ってた」

「けど帰ってきたじゃん！」

「うん、帰ってきた」

「それが『愛』っちゅー訳じゃーん？」

私ははにかむように笑った。満月の月明かりが二人の身体を照らしてくれる。

「そうだね、それが『愛』かもしれないね。ボクはラアへの『愛』の為に動いていたつもりだけど、マチュのお陰で、『愛』を知ったよ。」

「言ってくれるじゃん」マチュは肘でシュウジの細い身体を小突く。

「本当だよマチュ」シュウジは私を見え微笑んでくれる。倅せな時間だ。

「けどなんか妬いちやうかな」

わたしはベッドから立ち上がる。喉が乾いたので水を飲みキッチンへ向かうのだ。

三人が住んでいる…というか棲んでいる巢たる島には水源が二つある。

一つは地下水。でっかい洞窟から湧き出るお水はおいしい、普段はこっちを使う

もう一つは、今は苔むして自然と一体になっているジークアックスの原子力電池だ。この電力を浸かって海水を真水に還元している。ヒゲマンが言うには水道ポンプと家庭用の電力として使うだけなら一億年は持つ頑丈な電池だそう。一億年って…人類絶対死滅してるじゃない！

——苔むしたジークアックスを前に、ヒゲマンは続ける

「一億年後も人類が繁栄する為に、ニュータイプ研究は必要なのです」

「それって私達も実験台？」

「あなた達から得られるデータはもうなにもありません。あのゼクノヴァの観測データさえあれば十二分です。今、あなた達を研究に巻き込めば戦争の道具にしかないでしょう、だからあなた達はこの島で幸せに暮らしてください」

そんな事を言っていたのを思い出した。なんだかすごい事したんだなあ私達。

冷蔵庫に手をかける、湧き水をペットボトルに入れて冷やしてある。それを取りにいくのだ。パンツを履いて上半身は何も着ないでキッチンに向かう。後ろから影が映える。シュウジだ

「ボクもお腹がすいたや」と冷蔵庫を漁ろうとしている

「明日のご飯だからダメッ!」といいつつ、フランスパンと作り置きของツナマヨで彼の食欲を満たしてあげる事にした。

フランスパンとハムだけは絶対に在庫を切らさないようにしている。

毎朝、ニヤアンが作ってくれるフランス風ベトナム式サンドイッチ「パインミー」は絶品だからだ。大根と人参の酢の物がまたアクセントになっていい!「なます」っていうらしい。

まあそれはいいとして、ペットボトルから直接水をガブガブ飲む。

水の勢い余って喉元をバシャバシャと濡らす

「扇状的だね」とシュウジ。

「エッチな気分になる？」「まあね、マチュは常にエッチだよ」

とくだらない会話を続けた後、わたしはさっきのララアさんのお話を思い出していた。

「なんか妬いちゃいな：ララアさんに」

シュウジは黙り込んでしまった。フランスパンを齧る手も止まった。軽い緊張感が走る

（（マズい事：いったかなあ））と心の中で我が身を五分反省。しかし、シュウジには心の中なんてお見通しだった。

「いいよマチュ、話して。ララアさんの事」

「うん：シュウジみたく全部を知ってる訳じゃないよ：浅はかな知識で語っちゃうけどいい？」

「いいよ、ボクだってララアのすべてを知っているわけじゃない」

シュウジの瞳は真剣だった。真っ暗なキッチン、窓から月明かりと玄関の灯りが差し込むだけだ。

玄関の灯りからは、と羽虫がバチバチ当たる音がする。この島の虫さんはたくましい。

「ララアさんはさ、たしかに憎しみとか怒りもあるとおもうけどシュウジに思われてたじゃん、毎回思う通りにいかなかったも。ララアさんへの愛がシュウジを突き動かしていた」

「そうだね、マチュの言う通りだ。時には怒りと諦めに感情を埋める時もあった」
シュウジもわたしも淡々と話しはじめる。否、語り始める。

「そういう感情をブツけてくれる相手ってさあ……うらやましいと思うんだよね。変な事聞くけどさ？ わたしたちもう夫婦だよね？」

「愛の契り交わしているつもりだよ」シュウジは答える。私達には結婚指輪も結婚式もない、ただ愛を交わしている。それだけが夫婦である証明であるのだ。

「夫婦、というか人生ともにする相手にはさあ愛だけじゃなくて憎しみとか悲しみとかそういう感情を触れ合っておかないといけないと思うんだよね」

やだッ！？ 何語りだしてるのわたし！？ 恥ずかしいじゃん！

「そうだね、愛は必要だけどいろんな感情を知れば知るほど関係は深みを増すというものさ、これはガンダムの言葉じゃない。ボクの言葉だ」

シュウジがガンダムに頼らない！ 自分の言葉で喋ってる！ えらい！

「わたしさ、ニヤアンに勝手に嫉妬して…ほらニヤアンがジークアクス乗って闘った時あるでしょ？」

「熱出てたからあんまりおぼえてないや…けど彼女は紫色のキラキラを纏っていた。綺麗だったよあれがニヤアンの色だ」

「そう、それからちょっとケンカ…って程じゃないけど。わたしの独りよがりなんだ…嫉妬でおかしくなりそうで、けど頑張ってくれたニヤアンは憎む訳にもいなくて…いろいろあったんだよ、だから今があるんだ…ニヤアンにはちょっと感情を剥き出しにしまったけど、そのお陰でニヤアンと友達になれた、生涯唯一の本当の意味での『ともだち』だよ」

「そうだ、ニヤアンとマチュはいいともだちだよ」

「嫉妬深いんだわたしって…こんなに醜い所があったんだってあの時はじめて知った。けどそのお陰で今があるんだ」

「嫉妬深さならボクは負けないよ、ララアのお話、もっとしてあげようか？」

「いいよ！いいよ！」わたしは水を飲む手を休めてシユウジにZOのハンドサインを送った。

「嫉妬とかさ、怒ったりさ、泣いたりして仲良くなるんだね…人間って」

なんかもっともらしい事をわたしの口が発している。大丈夫かなわたし

「それが人類繁栄の礎だよ。感情のコントロールと認知機能が人類をここまで大きくした。火を覚えてから数千年で宇宙空間に住み始めるって生命の歴史からしたらとんでもない事だよ…変な事を話してしまったね」

「いいの!？」「マチュの言う事が正しいだよ、怒ったり、泣いたりして人は距離を近づけていく、大事なことだよ」

「ニヤアンやラアさんへのやきもちも？」

「そうだよ、大事な事さ、これが憎悪になってしまったら人間関係は構築できない、けどマチュはマチュなりに受け入れてくれた。これでいいんだよ」

「いいのかなあ…いいのかなあ」

恥ずかしくなってわたしは髪をワシヤワシヤ掻きむしった。汗をかいて髪がベトついている。シヤワー浴びないと。

「いいんだよマチュ、ボクもマチュとこうして感情を出して話し合ってるからこそ仲良く慣れたんだ…夫婦、番（つがい）の関係にまでなれた」

「うれしい！シュウジから『ふうふ』って言葉が出てくるのうれしい！」

わたしははしゃいで見せてシュウジに飛びかかった、抱き合った。暖かった

「けどシュウジはあまり感情出さないじゃん」

「ベッドでは感情剥き出しだよマチュ：偽物の愛は無表情だけど、愛し合う時は感情に溢れるんだよ」

「うれしい♪シャワー浴びよ！」

「そうだね、シャワーにしよう」

そうして私達はタオルだけ取ってシャワーブースを共にする。南半球にある孤島は今夏を迎える。水シャワーが気持ちいい。

夜中にこんなにハシャイで、ニヤアンを起こしてしまわないか心配だった。

「ほしがり屋さん」のわたしも悪くないなあ：こちらからもっと欲張っていいこう

ニヤアンとの友情も、シュウジとの愛も全部わたしのもの。もちろんお互いの関係が大事。

やきもちに身を寄せる夜も悪くない。雨水のように降り注ぐレインシャワーにシュウジと共に身を任せながら、そう思えばかりだ。

あとがき

本誌を御手にとっていただいた皆様、はじめまして、わしさんと申します。

シュウマチュ、いいですね。1月の先行上映から脳ミソがシュウマチュに染められてしまいました。本放送も終わり、かれこれ師走が見えてきました。早いものですね。

「シュウジのおよめさん」というタイトルに特に深い意味はありませんが、マチュがおよめさんになる姿、幸せになる姿を想像しながら綴りました。とても読みづらい文章だったとは思いますが、ご一読いただき、重ね重ねになりますが、本当にありがとうございます。

アフタヌーンギャグ漫画の金字塔「ハトのおよめさん」を是非ともよろしくおねがいします。

奥付

誌名「シュウよめ シュウジのおよめさん」

発行者 ゲンキなサル 著者 わしさん 発行日 2025年11月29日

ご意見、ご感想いただけると励みになります。できればやさしい言葉でお願いします。

何かありましたらこちらまで。

